

首都大学東京 博士(観光科学) 学位論文(課程博士)

論 文 名

モンゴルにおける小規模ゲルキャンプツーリズム
の発展と地域活性化に関する研究

- アラハンガイ県・ウギー湖のゲルキャンプの事例として -

TSERENBAT CHINBAYAR

審査担当者

主 査

委 員

委 員

委 員

上記の論文を合格と判定する

平成 年 月 日

首都大学東京大学院都市環境科学研究科教授会

研究科長

モンゴルにおける小規模ゲルキャンプツーリズム

の発展と地域活性化に関する研究

-アラハンガイ県・ウギー湖のゲルキャンプの事例として-

TSERENBAT CHINBAYAR

首都大学東京大学院都市環境科学研究科

観光科学域

2013年9月

要旨

モンゴルでは 1989 年の市場経済化によって、観光産業を独占してきた国営旅行社が 1990 年に民営化された。このことを契機に、モンゴルの伝統文化が見直され、遊牧民の生活文化は観光資源として再評価されるようになった。特に、ゲルキャンプツーリズムの観光形態が発展し、遊牧民の生活体験が主要な観光プログラムとして注目されるようになった。そこで本研究は、モンゴルのゲルキャンプツーリズムの諸相を実態として網羅的に把握することを第 1 の目的とし、さらに地域活性化への関与が最も期待される小規模ゲルキャンプツーリズムと遊牧民の生活文化との関係性を明らかにすることを第 2 の目的とした。

1990 年以前は、ゲルキャンプ場はモンゴル国内で 3 か所に立地するにすぎなかった。しかし、市場経済への移行にともなう国営旅行社の民営化を契機に、民間の旅行会社が増加し、モンゴルにおける観光客の受け入れ基盤が急速に発展するようになった。そのため、来訪する外国人観光客数は 2007 年に約 49 万人を超えるようになり、ゲルキャンプ場も 2008 年までには 300 か所以上に立地するまでになった。

モンゴルにおける 2010 年のゲルキャンプ場の分布状況をみると、ウランバートル周辺の中央県に最も多くゲルキャンプ場が分布し、次いでその周辺のフブスグル県、アラハンガイ県にゲルキャンプ場が多く立地していることがわかる。ゲルキャンプ場を規模別に概観すると、キャンプ場内のゲル数が 10 棟以下の小規模ゲルキャンプ場は全体の 52% を、11 棟から 30 棟以下の中規模ゲルキャンプ場が全体の 38% を、そして 31 棟以上の大規模ゲルキャンプ場が全体の 10%

を占めていた。つまり、モンゴルのゲルキャンプ場において、最も多く卓越するのはゲルの棟数の少ない小規模ゲルキャンプ場である。10棟以下のゲルで運営を行っている小規模ゲルキャンプ場は、遊牧民が実際に生活で利用するゲルとほぼ同様のものを宿泊施設として利用していた。このようなゲルの組立や移動は大規模・中規模のゲルキャンプ場のゲルと比べて容易であり、観光客もゲルの組立や移動を手伝うことができた。また、小規模なゲルキャンプ場では、遊牧民の生活文化を身近に体験することができ、観光客は遊牧民と直接コミュニケーションを取ることにもできる。このように、遊牧民の生活文化を体験できる観光のプログラムは、小規模ゲルキャンプ場の特徴ともいえる。そこで、モンゴルにおけるゲルキャンプツーリズムの発展と遊牧民との関わりをより詳細に把握するため、小規模ゲルキャンプ場の典型的な事例として、アラハンガイ県・ウギー湖のゲルキャンプツーリズムを調査研究した。

本研究で明らかになったことは、アラハンガイ県・ウギー湖に立地する小規模ゲルキャンプ場は、リゾート地や別荘地などの観光資源に多くを依存している大規模・中規模ゲルキャンプ場とは異なり、遊牧民の生活文化に基づくプログラムと自然や文化などの地域資源とを組み合わせることで観光客を誘引している。言い換えれば、小規模ゲルキャンプ場は地域固有の自然環境としての草原に、遊牧民の日常生活で行っている乗馬や乳製品加工などを体験プログラムとして組み合わせることで多くの観光客を引きつけてきた。ウギー湖の小規模ゲルキャンプ場では、遊牧民の夏営地とゲルキャンプ場の設置場所が重なるため、遊牧民の生活文化が身近に体験できる。また、放牧地を定期的に移動する遊牧民は、草原の資源と共生する環境保全

型の生活様式を実践している。そのため、小規模ゲルキャンプ場の環境資源利用は一般的なホテルや大規模・中規模ゲルキャンプ場のそれと様相を異にしている。それは、小規模ゲルキャンプ場以外の宿泊施設が草原の自然環境を改変して立地しているためである。他方、小規模ゲルキャンプ場は草原に分布し、遊牧民の居住用のゲルを宿泊施設として使用している。実際、小規模ゲルキャンプ場の宿泊施設は、冬期に解体して景観を元の草原に戻すという遊牧民の環境保全型の生活様式に基づいて立地している。さらに、小規模ゲルキャンプ場は植生への負荷による環境劣化を避けるため、ゲルを1か所に常設して長く留まることはない。したがって、小規模ゲルキャンプ場は定期的に移動するなどの環境保全に対する仕組みがあり、その環境保全の意識を観光客に啓蒙することもゲルキャンプツーリズムの大きな役割の1つになっている。また、小規模ゲルキャンプ場では、遊牧民の生活文化そのものを観光資源として生かし、収入源としていることが特徴になっている。これは、遊牧民がゲルキャンプ場の経営に参加することによって、遊牧以外から貴重な現金収入を得ることができることを示している。つまり、小規模ゲルキャンプ場は大規模・中規模ゲルキャンプ場よりも地域の遊牧民に経済的な波及効果をもたらしており、その地域活性化への貢献も大きことが本研究で明らかになった。

以上に述べたように、アラハンガイ県・ウギー湖に立地する小規模ゲルキャンプ場の事例は、小規模ゲルキャンプツーリズムが自然環境と遊牧民の生活文化を保全しながら地域の社会・経済を維持するため、モンゴルにおける持続的な観光の基本モデルとなりうることを明示している。今後、モンゴル各地において、自然環境と遊牧

民の生活文化を活かした小規模ゲルキャンプ場が盛んになることで、遊牧民の生活水準が向上し、その伝統的な生活文化が維持できることも本研究で確認することができた。

**Development of Small Scale Gercamp Tourism within Mongolia and its
Relevance on
Regional Activation; A Case Study of Ugiinuur District, Arkhangai
Province**

The public department on tourism has privatised in 1990 when Mongolia was transferred to market economy at the end of 1989. It was considered to renew Mongolian traditional culture as nomadic life in terms of tourism product. Particularly, tourism form in ger camp has been developed and program to introduce nomadic life style has raised much attention. The primary goal of this study is to consider fully different form and current image of ger camps in Mongolia. The second aim is to clarify that how herder's life is connected to small scale tourist ger camp which is the most hopeful to develop the region.

Before 1990 only three ger camp was operating in Mongolia. With the transition to market economy state owned tourist places are privatised and then many private tourist companies are established and tourism in Mongolia has rapidly developed. In connection with this, number of foreign tourist visitors has reached approximately 490 thousand in 2007 and ger camps are increased as over 300 in 2008.

In 2010 according to distribution of ger tourist camps that are operating in Mongolia, the most ger camps are near Ulaanbaatar and Tuv province mainly. Next many ger camps are in Khuvsgul and Arkhangai provinces. According to size of ger tourist camps, small scale ger tourist camp with less 10 gers has 52% of total ger tourist camps, medium scale ger tourist camp consisting of 11 to 30 gers has 38% and large scale of ger tourist camp consisting of over 31 gers has 10% of total ger tourist camps. In other words, small scale of ger camp is dominating among ger camps. A small scale ger tourist camp consisting of less than 10 gers is operating their activities in a ger same as local nomads live. This kind of ger is easy to move and settle down compare to medium and large scale ger camps. Also tourists can help to move and settle down gers. Also in small scale ger tourist camp, it has opportunity to learn from herder's life and a tourist can communicate with local herders directly. Accordingly a tourism program

which enables an opportunity to introduce nomadic life style on site is a specific feature of small scale ger camp. Therefore, in order to make a precise study on development of a small scale ger camp within Mongolia and how it is connected with nomads, a study is conducted in ger tourist camp of Ugiinuur district of Arkhangai province as taken an example of small scale ger tourist camp.

As a result of this study it is known that a small scale ger tourist camp in Ugiinuur of Arkhangai province is different from medium and larger scale ger tourist camps that are commonly based on tourism products of resort and vacation centre and tourists are attracted by its program based on nomad's life culture and regional local products both in nature and culture. In other words, many tourists have been greatly attracted by small scale ger tourist camp's program that includes nature beauty of specific place and introduction of herder's daily work such as horse riding, dairy product processing and household labour. A small scale ger tourist camp of Ugiinuur is located together with nomadic people's summer camp. Therefore, it has an opportunity to be introduced by nomad's life style on site. Also nomads who travel frequently due to grassland distribution keep a strong habit to protect nature and environment. Therefore, environmental use of small scale ger tourist camp is different from hotel and medium and larger scale ger tourist camps. The reason is that other scale ger tourist camps change environment and have an effect on nature. On the other hand, a small scale ger tourist camp is spread in steppe and it makes herder's house as its place for overnight. Gers of small scale ger tourist camp are dismantled in winter season. Thus, it leaves place as its pristine nature. It deeply connects life style of living. For small scale of ger tourist camp, ger is not kept in one place longer in order to protect nature and grass. Therefore, small scale ger tourist camp protects nature by moving from one place to another in routine. This awareness of protecting nature is for educating tourists as well as it is one of great advantages of ger tourist camp. Also it is important that this ger tourist camp is an income source by making nomad's life culture as tourism products. It shows that herders can get different source of income other than livestock farming by participating in activities of

ger tourist camp. In other words, small scale ger tourist camp is financially more productive for regional herders rather than medium and larger scale of ger tourist camps and it is certain by the study that it contributes a lot to develop the region.

As mentioned above, an example of small scale ger tourist camp located near Ugiinuur of Arkhangai province shows that tourism of small scale ger tourist camp is possible to be a basic model of tourism in Mongolia to develop regional economy and society while it preserves nature and ecology and nomadic herder's life culture. Furthermore, this study determined that living standard of nomadic herders will be increased and such traditional culture can be preserved by developing small scale ger tourist camp based on nature ecology and herder's living culture in everywhere.

目次

第1章 はじめに

- 1.1 研究の背景と目的
- 1.2 従来の研究とその問題点

第2章 モンゴルにおける観光の発展とそれを支える遊牧環境

- 2.1 モンゴルにおける自然環境と人々との生活
- 2.2 モンゴルにおける遊牧民の基本的性格
- 2.3 モンゴルにおける遊牧民の畜産経営の変化
- 2.4 モンゴルの遊牧による地域区分
- 2.5 モンゴルにおける外国人観光客数の推移
- 2.6 民主化による観光業の変化
- 2.7 モンゴルの観光部門における運輸部門の役割

第3章 モンゴル国におけるゲルキャンプ場の諸類型

- 3.1 ゲルキャンプ場の数とその推移
- 3.2 モンゴルにおけるゲルキャンプ場の分布
- 3.3 ゲルキャンプ場における観光資源
- 3.4 ゲルキャンプ場の分類
- 3.5 小型ゲルキャンプ場の分布と特色
- 3.6 中型ゲルキャンプ場の分布と特色
- 3.7 大型ゲルキャンプ場の分布と特色

第 4 章 アラハンガイ県・ウギー湖における小型ゲルキャンプの存立 形態

- 4.1 事例小型ゲルキャンプ場の選定
- 4.2 アルハンガイ県・ウギー郡における観光資源としての自然と歴史
- 4.3 アルハンガイ県・ウギー郡における観光資源としての遊牧文化
- 4.4 小型ゲルキャンプ場における設備・調度品
- 4.5 遊牧民の活動の季節的変化におけるゲルキャンプの運用
 - 4.5.1 ゲルキャンプの営業期間
 - 4.5.2 ウギー湖周辺のゲルキャンプサイトの分布と特徴
- 4.6 ゲルキャンプ場における一日の観光行動
- 4.7 小型ゲルキャンプ場の土地利用に関する権利関係
- 4.8 小型ゲルキャンプ場のステークホルダーによるプログラム企画

第 5 章 モンゴルにおける小型ゲルキャンプ場の意義

- 5.1 小型ゲルキャンプ場における地域資源の活用
- 5.2 小型ゲルキャンプの運営による経済効果
- 5.3 小型ゲルキャンプ場の開設による地域活性化
- 5.4 小型ゲルキャンプ場における自然環境の保全

第 6 章 結論

参考文献

図目次

- 図 1. モンゴルの自然環境
- 図 2. モンゴルの人口密度
- 図 3. 小型ゲルキャンプの観光資源
- 図 4. モンゴル国における観光客入込数の推移
- 図 5. モンゴルにおける主要送出国からの観光客の推移
- 図 6. モンゴルを訪れる外国人観光客の理由
- 図 7. モンゴルにおけるゲルキャンプ場の数と推移
- 図 8. モンゴルにおけるゲルキャンプの分布図
- 図 9. ゲルキャンプの主に分布する地域
- 図 10. ゲルキャンプ場の規模による割合（種類別）
- 図 11. ゲルキャンプ場の都心部からの距離と規模の関係性
- 図 12. モンゴルにおける小型ゲルキャンプの分布
- 図 13. モンゴルにおける中型ゲルキャンプの分布
- 図 14. モンゴルにおける大型ゲルキャンプの分布
- 図 15. アラハンガイ県・ウギー湖の位置
- 図 16. ウギー湖周辺のゲルキャンプと遊牧民の土地利用
- 図 17. モンゴルにおける観光シーズン
- 図 18. 小規模ゲルキャンプにおける経営カレンダー
- 図 19. ウギー湖におけるゲルキャンプの移動による環境保全
- 図 20. ゲルキャンプの乗馬ルート
- 図 21. ウギー湖におけるゲルキャンプ場の分布と特徴

図 22. 小型ゲルキャンプ場と遊牧民の共通理解と保全に関する取り
決め

図 23. ゲルキャンプの解体・保管の費用

図 24. ゲルキャンプの開始準備費用

図 25. ゲルキャンプ活動の費用

図 26. 小規模ゲルキャンプの経営における支出の割合

図 27. 地元住民への利益

図 28. ウギー湖におけるゲルキャンプのスケジュール

図 29. モンゴルにおける特別保護区

図 30. ウギー湖周辺における遊牧民に配分される作業

表目次

- 表 1. グリーンツーリズムの特徴と役割
- 表 2. モンゴルにおける民主化による観光発展の変化
- 表 3. モンゴルゲルの種類
- 表 4. ゲルキャンプが主に分布する3つの地域
- 表 5. ゲルキャンプの規模別における特徴
- 表 6. ウギー湖のゲルキャンプにおける1日の行動（観光客）
- 表 7. ゲルキャンプにおける乗馬ツアーの概要
- 表 8. ゲルキャンプの観光資源
- 表 9. アラハンガイ県・ウギー湖における小規模ゲルキャンプ場のルール案
- 表 10. ウギノール地域の課題と目標
- 表 11. 地元住民に割り当てられる利益

写真目次

- 写真 1. モンゴルにおける放牧地
- 写真 2. ウランバートル - 2 リゾート地
- 写真 3. 日本人が経営する Terelj Hirota ゲルキャンプ場
- 写真 4. ウランバートル市近郊のゲルキャンプ場
- 写真 5. モンゴルにおけるハラハ族のゲル
- 写真 6. モンゴルゲルの内側
- 写真 7. ゲルに風通しをする様子
- 写真 8. ゲルキャンプ場に建てられた大型ゲル
- 写真 9. モンゴルの 13 世紀時代を再現したゲルキャンプ場
- 写真 10. オボー
- 写真 11. ウギー湖におけるゲルキャンプ場のゲルの組み立ての体験
- 写真 12. 観光客が遊牧民のゲルを訪問している様子
- 写真 13. 羊の屠蓄
- 写真 14. 石焼（ホルホグ）
- 写真 15. 観光客の乗馬している様子
- 写真 16. 地方のナーダム祭の様子
- 写真 17. アラハンガイ県・ウギー湖のゲルキャンプ場
- 写真 18. テレルジ国立公園でアメリカ人が経営するゲルキャンプ場
- 写真 19. Mongol shiltgeen ゲルキャンプ場
- 写真 20. Mongol shiltgeen ゲルキャンプサイト内
- 写真 21. アラハンガイ県・カラコルム寺院
- 写真 22. アラハンガイ県・カラコルム寺院の内側
- 写真 23. アラハンガイ県・ウギー湖の自然風景

写真 24. アラハンガイ県ウギー湖の自然風景

写真 25. ラクダ乗って体験する様子

写真 26. 山羊の乳搾り体験

写真 27. 山羊や羊の乳搾り体験

写真 28. アーロールを天日干しする様子

写真 29. 小規模ゲルキャンプの内面

写真 30. 大規模ゲルキャンプの内面

写真 31. 土の上に建てた遊牧民のゲル

写真 32. 馬乳酒を発行させるの袋

写真 33. ウギー湖にける遊牧民の乳製品加工している様子

写真 34. ウギーのゲルキャンプ場の様子

第 1 章 はじめに

1.1 研究の背景と目的

モンゴル国（以下モンゴル）は、1990年の民主化運動によって、計画経済国家から市場経済国家へと転換した。この急激な市場経済化を受けて、1990年には社会主義に基づく産業の崩壊と急激なインフレが起こることによって、すなわち体制転換の負の影響として都市と地方の貧富の差は拡大した（モンゴル自然環境省 2006年）。

市場経済国家への移行当初は農牧業協同組合の民営化と牧畜の過放牧によって、モンゴルの牧畜環境は悪化した（モンゴル国家統計局、2011）。モンゴルの遊牧民は、1年を通じて、家畜のために自然放牧地を利用するので、舎飼する定住の家畜と比較して少ない労働力とコストで良質の畜産物を生産している（写真 1）。しかし、モンゴルにおける放牧は、自然の直接的な影響下にあって天災などで家畜を失うという弱点をもっている（モンゴル自然環境省 2008年）。

以下の内容は、モンゴル国家統計局の統計に基づいて分析することにより、モンゴルの畜産業の現状をまとめたものである（モンゴル国家統計局 2005年－2010年各年）。

家畜頭数は2009年には約4,900万頭に達したが、2009年から2010年の間に起こったゾド（雪害）により、多数の家畜が死亡した。ゾドとは、気候変動によって増長しやすい複合的な気候事象であり、家畜の死亡率を大幅に上昇させる原因である。モンゴル国家統計局の報告書によると、2010年の家畜死亡頭数は約1,030万990頭となり、家畜数は、3,273万頭に減少した。この影響により家畜を失って収入の道を絶たれた遊牧民は、自らの職を求めウランバートル市

に定住した。これが 2009 年と 2010 年に続いたゾド(雪害)により、遊牧民の 5 % 以上が全家畜を失い、7 % が家畜の半数を失った。さらに 5 % 以上の遊牧民は、その家畜頭数が 100 頭未満に減少した。このため、国内の農村部での貧困が深刻化した。現在も地方から都市への人口の移動が顕著となっており、2005 年の 1 年間で約 4 万人が地方から都市部へ移動したとされている(モンゴル国家統計局、2010)。

遊牧民がウランバートル市に移動した理由のひとつは、2003 年から都市部の土地の私有化を円滑に行うために、モンゴルの政府が住民登録料を徴収しないことを決定したことにある(ウランバートル市役所、2008)。2003 年以前は、遊牧民が住民登録料を支払わなければ都市への移動出来ず、これが都市への移住を抑制していたと考えられる。遊牧民が都市へ移動するための住民登録料は、3 万トグリグ(2003 年当時モンゴル銀行のレートでは 1 円 10.43 T g)程度で当時のモンゴル人の収入基準からすると、月収の半分(ヒツジ 1 頭分)程度であり、この額が負担になるほど遊牧民の生活が厳しかったかがわかる(モンゴル国家統計局、2004 年)。住民登録料を徴収しなくなったために、ウランバートルへの流入人口が激増したとみられる。これらの結果、モンゴルの放牧地域では過疎化が進み、遊牧民の人口は減り始め、コミュニティの維持が困難となり、伝統文化の継続が途切れつつある(モンゴル観光環境省、2011)。このような事態に対し、モンゴル観光環境省は、現在、観光を通じた遊牧民の現金収入の向上、伝統文化の保護を実施している(モンゴル観光環境省特別保護区観光政策プロジェクト、2012)。

遊牧地域から都市へと人口が流出する中で、大規模なリゾート開発にみられるような利用の不十分さからくる施設の無駄と環境問題への取り組みの遅れ、リゾート開発の地域経済や社会との関連の希薄さなどの問題が生じている。このような状況のなかで、モンゴル観光環境観光省は、大規模な投資を必要としないゲルキャンプの促進を提唱している（自然環境観光省特別保護区事務局 2008年）。モンゴル自然環境観光省も、環境負荷を減らすために、ゲルキャンプ場の活用を自然特別保護区で推奨している（自然環境観光省特別保護区事務局 2008年）。モンゴルにおけるゲルキャンプ場の現地調査において、モンゴルゲルの特徴を調べると、冷房や暖房に頼らず、夏期は涼しく冬期は暖かい宿泊ができるキャンピング施設であることがわかった。また、自然環境観光省の2006年の報告書によると、ゲルキャンプは、移動可能なキャンプなので、モンゴルの自然特別保護区では、自然を保護するため建造物の建設が禁止されていることを受けて、宿泊施設として利用するゲルキャンプ場の設置のみが許可されている（自然環境観光省特別保護区事務局 2006年）。モンゴルにおけるゲルキャンプ場の2011年の現地調査でモンゴルゲルの特徴を調べると、組立や解体が簡単で、冷房や暖房に頼らず、夏期は涼しく冬期は暖かい宿泊ができるキャンピング施設であることがわかった。

ゲルキャンプツーリズムとは、遊牧民の伝統的な家屋であるゲルに宿泊し、自然環境や遊牧民の伝統文化を楽しむツーリズムの1つの形態である（山口 2007）。ゲルキャンプツーリズムは、自然環境や遊牧民の文化を損なうことなく、それらを体験し学ぶ観光のあり方である。さらに、地域の自然環境や風俗慣習などの生活文化に

関する資源を持続的に保全しつつ、地域の活性化と観光の振興に寄与し、環境と経済を持続的に両立させていくものであることが期待されている（自然環境観光省 2006年）。

従来より社会問題とされてきた遊牧地域における人口流出の主な要因は、家畜に代わる遊牧民の収入源がないことにある（モンゴル自然環境省 2003）。そのため、地方にゲルキャンプを設置し、遊牧民が観光に関わることができれば、遊牧地域から都市への人口流出の歯止めになると考えられる。さらに、遊牧民自らの伝統文化が観光対象として観光客に評価されれば、遊牧民が自分の伝統文化を再認識し、モンゴルの伝統文化の保護にも寄与できることも指摘されている（モンゴル自然環境観光省、2011）。実際、2000年代の自然環境観光省の報告書から伺うことができるツーリズム政策の方向性をみる限り、ゲルキャンプツーリズムは、モンゴルの観光発展だけではなく、自然環境の保護、伝統文化の推進につながるものとなっている。

本研究では、モンゴルにおける観光の変遷と現状とそこにおけるゲルキャンプの位置を捉えたうえで、モンゴル全土においてどのようなゲルキャンプが存在しているのか、すなわちゲルキャンプの類型と分布を把握するとともに、実際にどのようなゲルキャンプが、そこにおけるどのような運営、観光行動を通して、自然保護や伝統文化の維持、地域活性化に寄与しているのか明らかにすることを目的とした。

まず、1990年以前のモンゴルにおける観光業の状況をモンゴル中央文書館のデータによって、また、1990年以降のモンゴルの観光の変遷と現状、外国人観光客入込数の推移やモンゴルの畜産業の現状、

さらにはゲルキャンプツーリズムの類型やその分布といった実態を、モンゴル国家統計局の統計によって分析した。

続いて、ゲルキャンプツーリズムに携わっているゲルキャンプ場の経営者及び遊牧民の活動の実態を実際に把握するために、ヒアリング調査を実施した。まず、ゲルキャンプに関わっている遊牧民とゲルキャンプを対象としたヒアリング調査は、調査対象とした遊牧民世帯に直接訪問をし、調査の主旨を説明した上で調査を行い、各遊牧民の世帯主より回答を得た。次に、ゲルキャンプおよび遊牧民にして観光に関する意識や活動実態などに関するデータの収集とヒアリング調査を行い、ゲルキャンプ場の比較と分析をすることにより、遊牧民における観光の資源を実証的に検証し、今後、ゲルキャンプと遊牧民のライフスタイルを観光資源として利用する上、自然環境と共生した適正なゲルキャンプツーリズム計画の提案を考察する。

上記調査の結果から、今後の成長が期待できる「遊牧民と連携したゲルキャンプ場」としてどのようなものが考えられるかを考察し、外国人観光客に提供する観光資源の可能性を明らかにする。そのため、文献や資料調査と併せて統計分析を実施し、それらの結果をもとに、モンゴルの観光業における産業振興の方向性について考察する。すなわち、観光業が持続可能な発展をするには、持続性の高いゲルキャンプを発展させるための地域政策が必要と考えられる。

研究方法は以下の通りである。まずヒアリング調査は、モンゴル自然環境観光省の協力を得て、2009年6月、2010年7月、2011年5月、2012年7月の期間にわたり実施した。調査対象として、ウランバートル近郊におけるテレルジ国立公園のゲルキャンプ場（20か

所)、中央県のゲルキャンプ(3か所)、ウブスハンガイ県のゲルキャンプ場(2か所)、アラハンガイ県のゲルキャンプ場(4か所)、ブルガン県のゲルキャンプ場(1か所)、さらに観光業に携わる方々の旅行会社(2か所)を訪問し、モンゴル各地のゲルキャンプ場の情報やデータの提供を依頼した。また、モンゴル国の観光の現状とゲルキャンプツーリズムの地域活性化という研究内容からどのようなゲルキャンプが地域住民との関連が深いかをわかるデータが必要であるため、ゲルキャンプ場の位置、ウランバートル市からの距離、ゲルキャンプ場内に設置されているゲルの棟数をヒアリング調査で集計されたデータを分析したうえで分類し、モンゴルのアラハンガイ県・ウギー湖を研究対象地域として、小規模ゲルキャンプと遊牧民との関わりに関する現地調査を行った。

1.2 従来の研究とその問題点

ゲルキャンプに関する先行研究は、ゲルキャンプが影響を与える対象の違いによって、大きく2つに分けられる。まず1つは、ゲルキャンプ場の建設が自然環境や景観にもたらす影響に関する研究である。本研究では、現地調査を行い、モンゴル国におけるゲルキャンプの現状を総観するとともに、ゲルキャンプツーリズムの展開と土地利用・自然保全との関連性を概観した。山口・齋藤(2007)は、モンゴルで山小屋をともなうゲルキャンプ場が増加したことにより、ゲルと草原のみからなる風景がなくなりつつあると指摘している。また、ゲルキャンプが伝統文化に与える影響について考察した研究として、Gonchigsumlai(2005)では、ゲルキャンプ場と植生の関係を考察し、観光客数の増加とゲルキャンプ場周辺の土地が荒れてい

ることには関連性がないことを明らかにしている。

以上のように、先行研究でも、ゲルキャンプと自然環境や景観、および伝統文化に対する考察がなされ、ある程度の研究の成果がみられている。しかしながら、山口・齊藤（2010）も指摘するように、これらの研究はそれぞれの事例地区を対象に行われているにとどまっており、モンゴル全土におけるゲルキャンプ場の実態やその影響が、これらの研究で全て明らかにされているとは考えにくい。すなわち、モンゴルの各地で営業を行うゲルキャンプ場は、ゲルキャンプ場のエリア内に設置されているゲルの棟数や規模など多様であり、地域における意義、重要性もまた様々であると考えられる。したがって、ゲルキャンプ場の分類を行い、モンゴル全土のゲルキャンプ場をその分類ごとに網羅的に把握する必要があるといえる。また、これらの把握は、今後のゲルキャンプツーリズム研究の方向性や先行研究の位置づけの再検討にも大きく寄与すると考えられる。

ゲルキャンプツーリズムは、モンゴルにおけるツーリズムの一種であり、多くの国で展開されているグリーンツーリズムの1つとして考えることができる。そのため、ゲルキャンプに関するもう1つの研究はグリーンツーリズムとしての視点からのものである。農村におけるツーリズムに関するこれまでの研究で取り上げられているツーリズム形態の多くは、グリーンツーリズムと称されてきた。グリーンツーリズムとゲルキャンプツーリズムの共通点は、まず、都市から離れた農村地域で展開され、農村がもっている独特の機能を生かすことにある。そこでは、農村にいおける小規模な事業を可能にし、自然や伝統的社会と伝統的文化を活かしている。グリーンツーリズムは、農村のもつ固有性を保全する持続的な開発を指向し、

地域資源の開発においても持続的開発が基本にある。

ヨーロッパにおけるグリーンツーリズムは、都市からはなれた農村に滞在し、自然や文化、地元の人々との交流を楽しむ旅を意味する(山崎 1993)。また日本の場合、農山漁村地域において自然、文化、人びととの交流を楽しむ滞在型の余暇活動と位置づけている(農林水産省 1992)。モンゴルにおけるゲルキャンプツーリズムは、都市から離れた遊牧民地内に設置されているゲルキャンプ場に滞在し、遊牧民の生活を体験すると共に自然や文化を楽しむことができるツーリズムになっている。グリーンツーリズムの「グリーン」はソフトツーリズム(環境に優しい観光開発や経営、環境問題に意識をもった人々の観光行動)と解釈され、グリーンツーリズムの中で中心を占めているのは、農家の兼業の一環として行われている「宿泊施設」である(山崎 1993)。農村観光地では、観光資源としての農業維持は、地域にとってもっとも大きな課題であり、宿泊施設(農家民宿)はその象徴である。農家民宿は、農村における環境保全に重要な役割を担うだけでなく、地域の観光発展の牽引役となる可能性があるが、そこには農家民宿の推進策や地域における環境保全に向けた政策も不可欠である(富川久美子 2007)。

ヨーロッパにおいても農家民宿は農家の副業として農家収入を支え、農村における雇用の場を創出していること、またそれを求めていることも、確かな事実であり、都市と農村の交流の場である(横山秀司 2006)。グリーンツーリズムが、地域の文化を守り、地元住民の生活水準を上げ、観光客には長期休暇を過ごせる施設を提供できる上、外貨を獲得する手段としても期待されている点において(山崎 1993)、グリーンツーリズムの定義がモンゴルで行われているゲ

ルキャンプツーリズムと類似している。表1では、ヨーロッパのグリーンツーリズムと日本のグリーンツーリズムおよびモンゴルのゲルキャンプツーリズムそれぞれを比較しながら宿泊施設の特徴を中心に示した。農家民宿と異なる点として、日本の水田、集落、人工林の農村景観に対して、モンゴルは放牧地と家畜と集落が点在する大草原の景観になっている。モンゴルのゲルキャンプは、ヨーロッパの家屋構造となるレンガや石を素材にした耐用年数の長い施設と違って、日本と同じくプライバシーが守れない様式になっている。グリーンツーリズムと言えば、日本では農家民宿というイメージが強いが、ヨーロッパをみると、農家民宿、農家レストラン、農家によるバカンス施設の運営、農産物の加工や直売の4つの部分が地域で密接な連携を保持している(山崎 2005)。観光客が民宿に滞在する場合、地域にある直売農家を紹介し、そこでの食料品調達を案内し、食事の場合には民宿の経営者が近所のレストランを紹介するなど地域連携があり、地域活性化が現実されている。宮崎猛氏によれば、ヨーロッパのグリーンツーリズムと異なる日本のグリーンツーリズムの特徴には、水田作中心の小農社会、水利や入会等の共同規制があり、過疎化の進む農村の内発的発展には、村づくり、都市農村交流、地域経営体による地産地消や高付加価値化のためのグリーンツーリズム経営が不可欠である(宮崎猛 2002)。

以上のように、世界各地では異なった表現でグリーンツーリズムが定義されている。しかし、グリーンツーリズムが、環境保全、観光と地域振興による活性化の総合的な達成をめざす概念であることは、世界共通であることがわかった。また、グリーンツーリズムは、都市と農村の交流を内包し、田舎暮らしを体験し、農場で休暇を過

ごすことにより、農村地域の活性化にも貢献するものであるともいえる。グリーンツーリズム産業は、地域内の各産業との関連が強い
ため、地域経済全体へ広く波及効果を及ぼす特徴である（槍垣 聡太郎 1997）。

地域活性化とは、地域に住んでいる人々の誇りを再認識させて、
地域資源を住民主導で経営しながら、地域内外を巻き込んでいく活
動である。これまでに述べたようにグリーンツーリズムは多くのもの
にプラスを与える。さらにヨーロッパは、農村そのものの活性化
を観光で行うという姿勢がある。したがって、空き部屋を都市住民
などに宿泊させ、その結果地域活性化できればいいといった立場が
広がっている。また、グリーンツーリズムにおいて、先進国となる
ヨーロッパや日本とモンゴルではかなり条件が異なり、モンゴル独
自のモンゴル型グリーンツーリズムを推進する必要がある。

「地域活性化」という用語使用の時代的背景をみれば、次のよう
に説明できる。第2次世界大戦後、日本経済の高度成長による農山
村からの人口流出は、農業生産の弱体化を引き起こすとともに、人
口の急減は社会生活の維持機能すら不全化する事態を生じさせた
（安達 1979）。現在、農村研究において、地域活性化を直接的に概
念規定したものは必ずしも多くない。そのようななかで、小池（1992）
は地域農業・農村の活性化とは、地域に賦存する資源の有効活用を
図り、その機能を活発にすることを通じて、地域の牧畜業なり地域
農村なりの活動が活発になることをめざしつつ、同時に地域の生活
環境の改善を内包するものであると規定している。河村（1991）は農
村地域の活性化とは、日常的行為によって達成させる水準を超える
付加価値を達成する動きとし、主体の動態に着目する定義をしてい

る。さらに、地域活性化は「経済的活性化」と日常では得られない生活面の付加価値を求める「社会的活性化」の2つの視点で捉えた地域活性化について提案している。本研究は心理的充足も視野に入れ、観光にともなう経済的側面にとどまらない多面的な視点で地域活性化を捉える。そのためにも、本研究はゲルキャンプにおける地域住民（遊牧民）と観光客の交流活動に着目し、それらの関係に基づく「地域活性化」を考察する。

第 2 章 モンゴルにおける観光の発展とそれを支える遊牧環境

2.1 モンゴルにおける自然環境と人びとの生活

アフリカの北部から中東部にまたがる草原は、伝統的な遊牧の世界である。そのなかでモンゴルは、西は北アフリカから、東は大興安嶺にいたる、ユーラシア大陸の遊牧ベルト地帯の東の端に位置する（小貫 1985）。モンゴルの面積は 156 万 5,600 k m²、日本の約 4.2 倍である。ロシアとは北部（3,485km の国境）で接しており、中国とは東部、南部、西部（三方向の国境路線は 4,673km）で接している（モンゴル国自然環境省 2005）。

モンゴルは、北緯 42 度から 52 度に位置し、中央ヨーロッパとアメリカ合衆国（北部諸州）とほぼ同じ緯度である。モンゴルは大洋から離れた内陸国で、気候の変動が大きく、年間平均降雨量は 300mm と少ないことが特徴である。またウランバートル市の降雨量は年平均 220mm である。年間降水量の半分が夏の 7 月と 8 月に集中しており一般に乾燥している。モンゴルにステップ地帯が広く分布する理由は、雨が少なく、乾燥している気候に適する草が生育しているためである。ただし、モンゴル北部は平均降雨量が 500mm と多いため、森林も分布する。また、モンゴルには四季があり、内陸型の乾燥した気候の地域では、年間の晴天の日が年間平均約 250 日である。夏の最高気温は 40℃ 近くになる一方、真冬は -40℃ を下回ることもある。年間を通じて 1 日の温度差が 30℃ におよぶこともあり、日中と夜間の気温差、冬季と夏季の気温差が激しい。ウランバートルでも真夏の 8 月の末に雪が降ることもある。

モンゴルの植生をみると、国土の北部には森林地帯、中部にはス

テップ地帯、南部には砂漠が広がる。自然環境省の報告書 2006 によると、モンゴルには高山地帯（国土面積に占める割合は約 3.6%）、タイガ地帯（約 4.5%）、森林ステップ地帯（約 15.2%）、ステップ地帯（約 34.2%）、ゴビ砂漠地帯（約 23.4%）、砂漠地帯（約 19.1%）という 6 つの自然帯に区分される（図 1）。モンゴルの国土面積の約 50% に永久凍土が分布し、その一部は極東シベリアから南に伸びてモンゴル国境に入り、カラマツ林の分布域とほぼ一致し、森林と草原の境目は壁で仕切られているようにはっきりしていることがわかる。モンゴルの森林限界付近はほとんどカラマツ林帯であり、その下に永久凍土が分布する。カラマツ林は夏の平均気温が 16℃ 以下、年平均降水量が 300mm 以上で、かつ永久凍土の存在する地域に主に分布している。

モンゴルの人口は 2012 年現在 282 万 6,205 で、世界でも人口密度の低い国の 1 つ（2 人 / k m²、モンゴル総計局、2013）である。首都はウランバートルで、そこでは 128 万 7,100 の人口が居住している（モンゴル国総計局、2011）。図 2 はモンゴルの人口密度を示している。2012 年現在モンゴルの人口の約半分がウランバートルに集中していることがわかる（図 2）。ウランバートル市は、モンゴル中央部から東の場所にあり、標高は 1350m の高地に位置している。セレンゲ川の支流であるトーラ川沿い、ボグドハン山の山麓にある。ウランバートル市は、17 世紀のラマ寺院建設を機に街として発展した。ウランバートルという名前は「赤い英雄」を意味する。海から離れた内陸部にあり、緯度と標高が極めて高いため、寒暖の差が激しく乾燥した内陸性ステップ気候となっている。ウランバートル市は、世界で最も寒い首都の 1 つと言われている。年間平均気温は -1.3℃

である。冬はシベリアからの乾燥した季節風のため冬期の寒さが厳しい。1月の平均気温は-20℃まで下がることもあり、最低気温になると-40℃に達することもある。夏は、内陸性特有の気温の寒暖差で、朝晩は10℃以下の寒さにもかかわらず、日中に気温が急上昇し30℃以上まで上がることもある。他の主要都市としては、北部の工業都市であるダルハン市の人口は10万5,333、銅鉱山があるエルデネット市の人口は8万7,646である（ウランバートル市 2012）。国民登録局2010年12月のデータ（2010年12月）によれば、モンゴルの行政区は21のアイマグ（県）と334のソム（郡）に分かれている。モンゴルの人口の40%が、地方に住む遊牧民である。

2.2 モンゴルにおける遊牧民の基本的性格

北アフリカからユーラシア大陸における遊牧のベルト地帯にはそれぞれの地形や気候などの自然条件によって、遊牧形態に違いが現れる。中央アジアのステップ地帯のラクダ、馬、羊を主体とした遊牧民と、西アジアのラクダ、山羊、羊を中心にした牧畜民、アフリカの牛を中心とする牧畜民といったように、家畜の種類とその組み合わせに違いがみられる（小貫 1985）。モンゴルの遊牧民は、馬、牛、羊、山羊、ラクダという5つの種類の家畜を中心に行っていることが特徴的である。

遊牧民の移動する距離は地域の特性と関係している。移動の仕方としては、水平に移動するアフリカの牛の遊牧民と、トルコ、イラン、アフガニスタン、あるいは、スペイン、イタリアなどヨーロッパのように垂直移動する遊牧民との違いがある。さらに、垂直移動の方向をとる移動においても地域差がある。夏には高山牧地に移動

して放牧するメソポタミヤ平原、イラン高原、アフカニスタン高原がある。その理由は、夏は乾燥して低地の草地では羊や山羊を飼養することが困難になるため、山地の草地へ移動する。山地は気温が低いので水の蒸発が少なく、そのうえ低地より降水量が多いため草地の家畜飼養力が高いからである。それと逆に、冬は山地の牧地に移動し、夏は山地を下り、平地で遊牧するモンゴルのハンガイ地方などの例がある。モンゴルの場合は、年間の降水量の80～90%が夏に降るので、遊牧民は牧草を飼料に低地の川筋の水を利用しつつ夏を過ごす。冬季には家畜を山中の雪原に放牧し、雪の下に蓄えられている良質の枯草を食べさせるモンゴルの遊牧民の方法がある。

2011年のモンゴル国家統計によれば、モンゴルの人口のうち約40%は遊牧民で226,000以上の世帯が存在する。また、モンゴルは国土の80%を農牧業に利用しており、その全農牧業用地の中で約98%を放牧地、採草地は約1%を占める。そのなかでわずかに、約1%の農地の約半分に農産物を作付している。その中で、穀物は、小麦と大麦、エン麦が約82%を占め、飼料作物は、約16%とそれに次いでいる。農耕部門においても家畜の飼料生産が重要視されていることがわかる。モンゴルはアジアの放牧地面積の19.1%(約12万ha)を占めている。国土面積に対する牧地面積の割合が50%を超える国は、アルゼンチン51.6%、ニュージーランド52.4%、オーストラリア57.0%、エチオピア58.6%、ナミビア64.2%、南アフリカ65.2%、ボツワナ73.3%、ウルグアイ77.4%、モンゴル78.8%と、モンゴルが最も高い割合を示している。モンゴルに生育する植物は、2,023種で、そのうち、牧草は550種以上を占めるが、実際に家畜が採食するのは、約300種であるといわれている(今岡1988)。A.Yutanov

は、モンゴルの牧草の分布について、その 40%以上が、ハンガイ山岳性森林草原地帯に、20%以上が草原と半砂漠地帯に、6%が高山地帯に、7%が砂漠地帯に分布すると、述べている。主な牧草は、イネ科、ガマ科、ユリ科、キク科、アヤメ科、アカザ科の牧草である。雑草類あるいは、灌木類や喬木類なども副飼料として、雪害などの自然災害が起きた時の飼料となる。

モンゴルにおける家畜数は、4,026 万頭（45.6%がヤギ、42.2%が羊、6%が牛、5.6%が馬、0.6%がラクダ）である（モンゴル国家統計 2012）。モンゴルでは、全人口より家畜の数のほうが圧倒的に多く、全農業生産額の 80%以上が畜産部門において生産されている（モンゴル国家統計、2011）。しかし、家畜の増加にともなって過放牧が進み、放牧地が荒れるなど、自然環境に悪影響が及ぶまでの深刻な問題になっている。このような時代の変化、過放牧によって自然に影響を及ぼすより、より安定した所得源として確立しようとするゲルキャンプとの取り組みが貢献するのではないか。この新たな動きには観光客による新たな収入源の期待や長期的視点に立った遊牧民の牧畜景観の保全や遊牧民の自立促進への貢献、あるいは、牧畜業と草原のもつ多面的機能の開発などへの期待も大きい。

モンゴルにおける遊牧民は、移動型の牧畜を生業として行う人びとであり、彼らは 1 か所に定住することなく家畜を季節ごとに移動させながら自然植生を利用する生産様式を行っている（小貫 1985）。現地調査では、モンゴルの遊牧民は移動するが、定住地（春・夏・秋・冬それぞれの营地）を基本的にもっていることがわかった。モンゴルの観光では自然が主体であるため、そのなかで生きる遊牧民の暮らしは観光資源として大きな価値があることがわかった。図 3

によれば小型ゲルキャンプにおいて、遊牧民生活を体験するプログラムは大きな商品価値となっていることを示している。特に、乗馬、ゲルの組み立て、食文化を体験するプログラムが小型ゲルキャンプの価値のある観光資源となっていることがわかる。

モンゴルの遊牧民は従来、ボゴ・マル（小型の家畜）と呼ばれる羊や山羊のうち羊を主な家畜として飼うことが一般的であったが、山羊からとれるカシミア原毛が現金収入につながるとして、近年、モンゴルの遊牧民は山羊の多飼育化に力を入れた。その結果、モンゴルは中国に続きカシミア原毛の世界第2位の生産国になり、世界のカシミア生産の20%以上を生産し、年間約3,000トンを供給している（FIFTA MONGOLIA, 2007）。しかし、山羊は羊と異なり、草を根本から食べるため、山羊の増加は草原の砂漠化を助長するものとして自然環境への影響が懸念されるようになった。モンゴルの遊牧民は、羊を主に食用と毛取り用として飼育している。羊の総称はホニで、子羊はホラガと呼び分けている。山羊は羊の群れを安定させるため、羊の群れに一定割合の山羊を混ぜて飼育している。山羊の総称はヤマーで、子山羊はイシグ、種山羊はオホナと呼び分けている。2010年はゾド（雪害）により、山羊の数は約600万頭にまで減少し、羊の数より減少した（モンゴル自然環境省, 2011）。

また、馬と牛は全国的に飼育されているが、ラクダは地域差があり、主にゴビ（乾燥地域）地方で飼育されている。これらの家畜はボド・マル（大型家畜）と呼ばれている。モンゴルの遊牧民は馬を主に乗用、または搾乳に用いている。馬の総称はモリだが、種馬をアズラガ去勢馬、または馬群をアドー、雌馬をグーなどと性別によって呼び分ける。仔馬はオナガで、さらに年齢によって細かく分け

ており、2歳の馬をダーガ、3歳の馬をシュドレン、4歳の馬をヒヤザーラン、5歳の馬をソヨーロン、6歳以上の馬をイフナスなどと名づけている。ラクダは主に荷車用に用いられる。ゴビ地域ではラクダを主に飼育しており、搾乳も行っている。ラクダの総称はテメーで、仔ラクダはボトゴ、雌ラクダはインゲと呼び分けている。

2.3 モンゴルにおける遊牧民の畜産経営の変化

社会主義以前においては、遊牧は家族経営により行われておりホト・アイル方式が基本であった。ホト・アイルとは、遊牧民が協同で労働することからはじめ、家族経営の機能を補完する相互協力組織のことを示す。しかし、ホト・アイルは社会主義による集団化の強制により解体させられ、モンゴルにおける畜産経営組織形態はネグデルになった。ネグデルは旧ソ連のコルホーズをモデルとした集団農場経営であり、組合員はネグデルの労働者となり、ネグデルの家畜を飼養していた。ネグデルの形成過程を以下でみる。まず、1928年以降、家畜は、政府により没収され遊牧民に手渡された。1930年代に入ってネグデルが設立され、遊牧民はネグデルの組合員になることを強制された。その結果、1952年にはモンゴル全国に9,000人の組合員による165のネグデルが存在し、28万頭の家畜が飼養されていた。1955年には遊牧民1世帯あたり75頭まで家畜の私有が可能であったが、私的飼養には重税が課せられた。1959年には国による強制的な集団化により、全飼養家畜の75%が集団化され、その翌年には99.5%が集団化され、354のネグデルと25の国营農場が設立された。さらに1970年代には大規模化した272のネグデルと32の国营農場が登場するようになり、10の飼料生産国营農場が設立され

た (Gerelmaa Danaa 2009)。国営農場は、主要農産物である穀物、食肉、酪農といった分野において機械化による集約的な生産を行い、生産物を都市へ供給していた。しかし、1990年にモンゴルは、市場経済へ移行し、それまで活動してきたネグデルの制度が解体され、1991年に民営化法が成立し、家畜が私有化された。これにより、遊牧民と家畜頭数は増加し、家畜経営は再びホト・アイル方式に戻った。

2.4 モンゴルの遊牧による地域区分

ここでは、家畜が集中している遊牧の地域区分を明確にするため、モンゴル国家統計局の2010年の統計をもとに、モンゴルの家畜の密度を確認した。まず、モンゴルにおける県（アイマグ）を西部、森林帯、中央部、東部の4つに分けることができる。西部は、バヤンウルギ県、ゴビアルタイ県、ザブハン県、ウブス県、ホブド県で構成される。ここには、平原と砂漠が存在する。また、国土の26.6%、全家畜頭数の24.7%を占める。森林帯は、アルハンガイ県、バヤンホンゴル県、ブルガン県、オルホン県、ウブルハンガイ県、フブスグル県を構成される。牧草量がモンゴルで一番多く、面積が国土の24.5%であるが、全家畜頭数の38.0%を占めている。

森林帯に位置するアラハンガイ県とウブルハンガイ県におけるユーラシア北方遊牧民の歴史は主として、オルホン、セレンゲ文明とヘルレン、オノン文明とに分けられる。オルホン川流域は、モンゴル中でも草原地帯として歴史的遺産が集積した地域である。ここにはモンゴル帝国の首都とウイグル時代の都市などが分散している。また、オルホンの滝やホジルトの温泉も分布し、魚釣りの絶好のポ

イントもオルホン川にある。アラハンガイ県は農牧に適した地域で、小麦の大規模な耕作地や遊牧がされる草原が広がっている。ウブスハンガイ県に来る観光客の目的は、元時代の史跡であるエルデネゾーと亀石であり、モンゴルを訪れた外国人観光客が必ず来訪するところとなっている（Bayasgalan 2010）。観光施設などは、あまり整備されてこなかったが、1990年後、外国人観光客の増加にともないゲルキャンプ場の設置が進行している。

中央部は、ゴビスムベル県、ダルハンオールル、ドルノゴビ、ドンドゴビ、ウムヌゴビ、セレング、トゥブ県（中央県）で構成される。中央部に位置するウランバートル市は、モンゴルの玄関であり、主要観光地でもある。ボグド山、バヤンズレフ山、ソングノハイラハン山の4つの山に包まれ、景勝地や遺跡も多い。ウランバートル市にもっとも近い国立公園であり、草原、乗馬、釣りなどの目的で来る観光客の宿泊するゲルキャンプなどの開発が活発な地域である。この中央部の南の3県は砂漠地域であるが、北の4県は森林帯と同じように牧草の草生量が非常に多い地域である。中央部全体が国土に占める面積の割合は30.6%である。この中央部におけるモンゴルの主要な観光地の一つが、ウムヌゴビの大自然である。ウムヌゴビの利用の拠点となっているのはダランザドガド郡に位置するジュールチンゴビで、一帯にはゲルキャンプや飛行場が整備されている。この地域は、砂漠帯で、ゴビゴルバンサイハン自然国立公園が設定されており、雪溪のあるヨリーン・アム溪谷、モルツォグ砂丘やバヤンザグ恐竜化石、ラクダの放牧など観光資源が豊富な地域である。この地域のゲルキャンプは、地域特性豊かな観光資源を生かしており、バヤンザグで行われている恐竜発掘ツアー、ホンゴル砂丘で行

われているラクダツアー、ヨリーンアマで行われるバードウォッチングツアー、ネメフト山の恐竜化石やホラン野生馬を行うジープツアーなどのツアーが行われている。

また、モンゴルの基本的な地形により地域区分を6つの地域に分け、各地域の特徴をみる。

アルタイ山系地域には、モンゴルアルタイ山脈とゴビアルタイ山脈がある。これらはモンゴル北西から南東にかけて走る。アルタイ山脈は、モンゴル第一級の山脈である。短い支山脈が平行に走り、東へ行く程標高は低くなる。現在でもタバンボグド山に約20kmのポタニンと命名された氷河が残っている。ゴビアルタイ山脈は、東西に走る山脈である。砂漠気候の影響で半砂漠性山地帯となっており、山部と平地部の境界がはっきりしている。この地域は、山岳性森林草原、草原、砂漠性草原と、さまざまな牧地景観がみられるため、典型的なモンゴルの風景を期待する観光客が観光する場所として適している。また、標高2,000mを越えると現れるヤクが観光資源として期待されている。ヤクは、肩高1.5~2mで体の下面および尾に長毛が密生していることが特徴で、黒色をした個体を多くみかける。山脈に至る高地にしかみられない、古くから家畜化されたウシ科の哺乳類である。

ハンガイ山系は、アルタイ山系に次ぐ大山系で、高い山脈が密集している。イデル川によりハンガイ山脈とフブスグル山脈に分離されている。ハンガイ山脈を源とする河川は多く、そのためこの山脈を中心に放射状に河谷が発達している。ハンガイ山脈は、モンゴル最大の水源の役目を果たしている。フブスグル山地中央には、断層作用によって形成されたグブスグル湖があり、ツァータン族（トナ

カイを飼って生活する民族)が移住し、世界で唯一モンゴルでしかみられない生活習慣と文化が存在するため、外国人観光者が訪れる観光地になっている。標高は海拔 1,645m で南北に長い形をしており、長さは 136km、幅は 36.5km メートル、最大水深は 262m になる。アジアの淡水湖では有数の水量を誇り、モンゴルの淡水の 70%、全世界の淡水の 0.4% を占める。以上のような理由から、ゲルキャンプ場が多く (54 か所) 分布している。フブスグル地域はウランバートルからおよそ 900km 離れている。

ヘンティー山系は、東北から西南に走る山脈で、標高 2000m から 2500m、ハンガイ山脈と比較しても規模が小さい。北部がもっとも高く東、南、西方向に行くほど低くなる。東部地域の平均標高は 1,200m から 1,500m、丘陵と広大な平原が広がっており、農牧業地域となっている。この地域は、広大な草原ステップを利用したモンゴルの遊牧生活や伝統を体験することができるため、ゲルキャンプ場も多く分布している。

モンゴル北部平原の地域は、準平地帯である。特にヘルレン川南部には、標高 1,500m から 1,700m のなだらかな斜面をもつ、残丘や平地が緩やかに続いている。さらに西へ上流へ向かうと、平原が広がる。これをメネンギーン草原という。この地域は、広大な草原ステップを利用したモンゴルの遊牧生活や伝統を体験することができるため、ゲルキャンプ場も多く分布している。

アルタイ山脈北部低地の地域は、イヘノーリーンホットゴル (多湖の低地) という。モンゴルの大きな湖、オブス、ヒャルガス、ハルオス湖などが集中するため、遊牧民の夏営地や観光客の中継地としてゲルキャンプが集中している。

アルタイ山脈南部低地の地域は、モンゴルで最も乾燥しているゴビ（半砂漠）地帯である。南部地域の平均標高は 1,200m から 1,600 m であり、この地域はモンゴルで最も乾燥しており、ゴビ（砂漠性草原）が広がっている。ゴビ地帯は、乾燥しているため、羊、ヤギ、ラクダの飼育に適している。ゴビ砂漠を体験するために観光客が訪れるという背景からゲルキャンプ場が分布している。モンゴルにおける放牧地の分類を高山牧地、高山や森林牧地、山岳性湿原・草原牧地は、ハンガイ、ヘンティー、フブスグル、アルタイ山脈山頂の斜面からその麓野に広がる牧地と分けることができる。湿原や河谷の牧地は、セレンゲ河とその支流やヘルレン川の河谷に、半砂漠性牧地は砂漠性草原の中でも草原に近い北部に、砂漠性牧地は、モンゴル最南端に、サクサウル牧地は、アルタイ山脈以南のゴビ地帯にそれぞれ分布している。

2.5 モンゴルにおける外国人観光客数の推移

1921年の建国以来、旧ソ連の政治や経済圏内に組み込まれたモンゴルは、旧ソ連に次ぐ社会主義国であった。社会主義時代におけるモンゴル経済は、旧ソ連およびCOMECONに深く結びついており、産業、企業の技術、整備等は旧ソ連国や地域から供給されていた（小貫 1993）。

下記の内容はモンゴル中央文書館のデータよりまとめたものである。

モンゴルにおける工場施設は、旧ソ連の援助によって建設されていた。旧ソ連の政治や経済圏内に組み込まれたモンゴルへ主に旧ソ連の連邦国や東ヨーロッパからのわずかな観光客がモンゴルを訪れ

るにすぎなかった (E. Guremjav 2007)。その理由は、社会主義国特有の閉鎖経済だったため、および外国人観光客を受け入れる宿泊施設が不十分であったためであった。実際、1990年以前のモンゴルには2つのホテルと4つのツーリストキャンプ場しかなかった。1950年頃より外国（旧ソ連連邦国）からの観光客が増えてきたため、モンゴルでは観光客を受け入れる政策を初めて策定し、モンゴル政府は、観光分野に注目するようになった。モンゴルと各国との関係が深まるにつれ、外国からの来客や通過する人が増えることで、鉄道や航空の利用数が増加し、外国へ行くモンゴル人も増えた。1955年12月24日には外国人観光客にサービスを提供する機関が設立され、その結果、外国観光客の入出国の際、列車や飛行機のチケットを提供できるようになった。旧ソ連との好関係も深まり、15人の観光客が1956年に初めてモンゴルを訪れた記録もある。その後、1957年に旧ソ連、中国、北朝鮮、旧チェコスロバキア、アルバニア、ルーマニア、インド、インドネシア、英国から合わせて4,392人、旧ソ連からは1960年に2,184人、1961年に532人、1963年に202人、1965年に3,900人の観光客がモンゴルを訪れた。

モンゴルにおける旧ソ連の影響は、65年間続いたが、1989年になって、旧ソ連軍が撤収した。その背景には、1980年代末、旧ソ連や東欧諸国の変革の影響を受け、モンゴルにおいても民主化運動が高まり、1990年以降は社会主義から市場経済への体制移行が進むと同時に、旧ソ連への全面的依存体質からの脱却を実現するなど、内政や外交政策の両面において大きな変化に遭遇したことがある。モンゴルは急進的な移行政策を採用し、財政、金融、貿易など多方面で民営化、私有化を伴う移行政策を実施した。

社会主義経済体制に組み込まれていたモンゴルは、平和的革命で共産主義者の支配を脱し、市場経済化に向けた計画を実施した。市場経済への移行にともない、モンゴルの旅行業は急速に発展し、2000年にモンゴル初の観光に関する法律が成立し、2002年には団体旅行のビザ（J級）を発行した（モンゴル自然環境観光省 2006年）。2004年には外国人観光客を誘致する事業を行い、2005年には外国人観光客向けの交通インフラやインフォメーションセンターなどを整備するなど、モンゴル政府も外国人観光客誘致に力点を置いた。モンゴルを訪れる観光客の人数は年々増える傾向にあり、観光産業は1990年の民主化後の12年間に急速な発展を遂げた。図4によれば、モンゴルを訪れた観光客数は、1990年前の社会主義時代の1957年には4,392人だったが、民主化後の1990年に入ってから2007年には、45万1,492人が訪れるまでとなった。これは、1990年における市場経済への移行に伴い、1991年には民営化法が成立し、モンゴルの観光業も民営化されることによる（D. Gantumur 2003）。

2006年において、観光産業は、モンゴルにおけるGDPの18%を占め、旅行会社の数は450社を超えた（モンゴル自然環境観光省 2007年）。そのうち59社が海外から投資を受けており、日本、フランス、イギリス、ドイツ、そしてアメリカ合衆国など先進国から観光客を受け入れている。2006年の観光客総数は40万8,500人だったが、2007年には約45万4,800人まで増加し、前年比約11.3%の増加率を示した（モンゴル自然環境観光省 2008）。毎年、モンゴルを訪れる観光客の数は15%から20%増加し、2011年には、外国人観光客の数が45万7,514人に達している。外国人観光客の推移を示した図5によると、アジアからモンゴルを訪れる主要な国は韓国（2011

年現在で 4 万 3,994 人)、日本 (1 万 4,988 人) で、欧米からの観光客の主要な国はアメリカ合衆国(1 万 5,423 人)、ドイツ(8,545 人)、フランス(7,570 人)、イギリス(7,120 人)、である。この結果、2011 年の観光部門の総収入は 222 万米ドルとなった (モンゴル総計局 2011)。図 5 は、モンゴルにおける主要送出国からの観光客の推移をグラフで示したものである。そのなかで、ロシアと中国については隣国でありビジネス、就労目的の入国が多いことから除外した。図 5 によれば、モンゴルを訪れる地域別の割合では、中国を除く東アジアからの入込みが伸びている。

2.6 民主化による観光業の変化

モンゴルにおける観光の発展過程は、1990 年以前の社会主義時代とそれ以降の民主主義時代の 2 つに大きく分けることができる。

モンゴルは 1921 年の建国以来、旧ソ連邦の政治や経済圏内に組み込まれ、旧ソ連に次ぐ社会主義国として知られていた。社会主義時代の観光に関与する機関といえば国営旅行社「ジョールチン」しかなく、観光客用の小型キャンプ場はウムヌゴビ、テレルジ国立公園、ホジルト (ウブルハンガイ県、カラコルムエルデネゾー寺院) という 3 か所しか観光キャンプがなかった。観光に関与する機関やそれに関わるホテル、リゾート地なども国が立地する限られた空間にしか及ばなかった (写真 2)。そうした状況下で 1964 年に、国営旅行社「ジョールチン」がハンティングの目的でウムヌゴビ県に 10 個のゲルを建て、一時的なキャンプ施設を設置した事例が小型ゲルキャンプの最初の例といえる。

1980 年代末、旧ソ連邦や東欧諸国の変革の影響を受け、モンゴル

においても民主化運動が高まり、1990年以降は社会主義から議会制民主主義市場経済への体制移行が進むと同時に、旧ソ連への全面的依存体質からの脱却を実現するなど、内政・外交政策の両面において大きな変化に遭遇することとなった。モンゴルは急進的な移行政策を採用し、財政、金融、貿易、民営化、私有化など多方面で移行政策を実施した。1990年の民主化運動によって市場経済化へ進む道を選んだことで、1991年、モンゴル政府は飼っていた家畜を遊牧民全員に均等に配布し、国営企業の民営化を行った。これにともない、それまで社会主義システム下の経営体であった観光分野も民営化され、現在は民間の旅行会社によるゲルキャンプ経営が一般的になった。また上記の政治体制の変化を経る中でモンゴル文化が再評価されるようになり、それにともなって小型ゲルキャンプが順調に発展を続けている。現在ではモンゴル人だけでなく外国人が経営する小型ゲルキャンプ場もみられるようになった（写真3）。

17世紀初め、満州がモンゴル東部で蜂起し、中国に清王朝を樹立し、1636年、南モンゴルを従属させ、約半世紀後には北のハルハモンゴルが支配下に置かれた。この時期、仏教が積極的に奨励され、モンゴルの各地に寺院が建てられた。そのため、ラマ教に理解を示していた清王朝のチベット・モンゴル仏教優遇政策により、モンゴルにおけるチベット仏教が隆盛となった。20世紀になると、1911年に満州帝国が崩壊、モンゴルが独立を宣言し、チベット人である42歳のジェブツンダンバ・ホトクト8世を皇帝とするボグド・ハーン（聖皇帝）政権が樹立された。しかし、独立は長く続かなかった。

1924年、旧ソ連の支援の下で、社会主義に基づく中央計画経済、政治システムによるモンゴル人民共和国が形成された。その時から

モンゴルは、旧ソ連圏に入り、旧ソ連の影響下にある各国と交流が深まるなか、1950年から観光分野に注目するようになった。その後1956年6月に初めて、旧ソ連の全連邦ツーリスト協会と契約を結び、初めてモンゴルに公式に15人の観光客が訪れた。それをきっかけに、社会主義国の第1回観光機関会議にモンゴル国が代表として参加した。それ以来、旧ソ連邦国以外の各国との交流が深まり、1956年に社会主義国以外の先進国（アメリカ合衆国、日本、フランス、イギリス）からの公式手紙が届くようになった。1961年9月28日に中国と観光協定を結び（中央文書館 X-332、1-59）、1965年にブルガリア・バルナ市で開催された社会主義諸国の観光機関との会議に出席し、1965年10月にポーランドで行われた社会主義諸国の観光機関の会議にモンゴル側の責任者が出席した（中央文書館 X-332、1-139）。

社会主義国以外の各国との関係が深まるなか、モンゴルの観光に携わる人材を社会主義国で養成することとなり、1965年4月から45日間、10名をユーゴスラビアの観光部門で研修させた。1984年にアメリカ合衆国、カナダ、カナダ、日本と観光部門における協力事業の契約を結び（中央文書館 X-332、1-801）、その後、1985年にはオーストラリア、アメリカ合衆国、オランダ、西ドイツ、フランスのハンティング専門旅行会社と共同協力の契約が結ばれた（X-332、1-803）。1987年には、オーストラリア、イギリス、オランダ、ノルウェー、フランス、フィンランド、旧西ドイツ、スイスの観光会社と観光部門における契約を結び、1987年8月21日に、日本のエンタープライズ社と観光部門における契約を結んだ（X-332、1-830）。1989年12月30日になって、ブルガリア、ポーランドとの観光機関

と契約を結んだ(中央文書館 X-332、1-831)。さらに1990年には、日本旅行会社と観光部門における契約を結んだ(中央文書館 X-332、1-845))。

モンゴル国民は、1990年の民主化運動によって、社会主義から民主主義、市場経済へ進む道を選んだ。そして、1991年にモンゴル政府は国営企業の民営化を行った。これにともない、それまで社会主義システムのもとで行われていた観光分野も民営化された。市場経済への移行にともない、モンゴルの旅行業は急速に発展し、旅行部門は国内総生産の18%を占めるようになり、モンゴル政府も観光部門に力点を置くようになった。また、モンゴルの政治体制の変化にともないモンゴル文化が再評価されたことで、遊牧文化を利用したツーリズムが外国人観光客によって注目されるようになり、遊牧民の生活に触れることのできるゲルキャンプ場へ行くことは、モンゴルを訪れる外国人観光客の観光目的になっている。外国人観光客がモンゴルを訪れる目的を示した図6によれば、モンゴルを訪れる外国人観光客の第1の目的は大草原をみたい(62.6%)、第2には遊牧民の生活を体験したい(59.9%)である。このようなニーズにともなって、外国人観光客数の増加とともに、モンゴル特有の宿泊施設であるゲルキャンプ場が急増し、モンゴル各地に分布するまでに発展した。

2.7 モンゴルの観光部門における運輸部門の役割

運輸部門はモンゴルにおける観光の発展にとって架け橋のような重要な役割を果たしている。モンゴルは広大な国土と比較して人口が少ないという特徴がある。モンゴルの運輸は、道路輸送、鉄道輸

送、航空輸送、水上輸送の4種類の部門から成る。

以下の内容はモンゴル国土交通省 2010年のデータよりまとめたものである。

モンゴルのように海と接しておらず、かつ2つの国（ロシアと中国）としか接していない国では、先進国からの外国人観光客の入込の増加に空港ルートが重要な役割を果たしている。モンゴルでは、航空輸送の嚆矢として、ロシアのアエロフロート社からの支援を受け、1956年7月にMIATモンゴリア社が設立された。当時はモンゴル国内だけで就航していたが、1986年に国際線をはじめて開設した。現在、MIATモンゴリア社は、国際便の98%以上を運航しており、ウランバートル市のチンギスハーン国際空港からモスクワ、北京、ソウル、東京、ベルリンおよびイルクーツクの6つの路線に飛行機を飛ばしている。観光シーズン（5月～9月）は外国人の観光客が急増するため、民間航空会社が、地方都市への臨時便、ゲルキャンプ場へのチャーター便を飛ばしている。しかし、国内便は強風や砂嵐、大気汚染による視界不良などのため、空港が閉鎖される場合が多いため、旅行会社はゲルキャンプへ行く計画においてバスや車の利用を選択することが多い。そのため、観光客が目的地に至る中継地としてゲルキャンプを使うようになっており、ゲルキャンプ場のもつ役割が増えている。

モンゴルにおいて、周辺諸国に接続する道路はひとつしかない。近年、モンゴル政府の積極的な整備が進められているものの、舗装道路は国道全体の20%にしかすぎない。しかし、冬季の厳寒による凍結から道路および鉄道による陸上輸送は十分に機能していないのが現状である。モンゴルの国道は、総延長11,200kmで、そのうち約

1,500kmの舗装道路、約1,440kmの砂礫道、約1,346kmの舗装道路は、約6,900kmの自然道がある（国土交通省 2010）。さらに21のアイマグ（県）の中心部から周辺地域を結ぶ地方道路網は、総延長38,000kmであり、そのうちわずか400kmが舗装道路で、500kmが砂礫道、残りの37,100km（全体の約98%）が自然道である。そのため、ウランバートル市から地方を観光する際の交通手段としては、まず同市からバスで出発し、目的地となる県に着いたらジープを利用してゲルキャンプへ行くのが一般である。

モンゴルは内陸国であるため、国内の鉄道は重要な交通手段である。モンゴル鉄道は、隣国である中国（フフホト、北京）、あるいはロシア（イルクーツク、モスクワ）を經由しながら、東アジアおよび東南アジア、あるいはヨーロッパとモンゴル各都市を結ぶ。モンゴル鉄道はロシア政府が50%、モンゴル政府が50%出資し、1949年に設立され、現在では公社のモンゴル鉄道(MR)によって運行されている。運行を開始してから、モンゴルにおける観光の発展にも非常に貢献してきた。モンゴルの鉄道網は総延長1,815kmの広軌で、そのうち、1,100kmはロシアと中国を結び、239kmは東部地方の別のネットワークでロシアの鉄道と連結している。残りの477kmは幹線からの支線である。

しかし、ゲルキャンプの開発に関連するインフラは、全般的に未開発、未整備なものが多い。モンゴルにおける観光開発を優先的に進めるには観光客の安全確保に必要なインフラ整備をしなければならない。たとえば、地方空港へのアクセス道路はほとんど砂利や土であるため、夏期の雨によるぬかるみや地盤軟化によって使用できなくなるケースが多い。また、草原上、道路のないところを走る快

感は魅力的だが、草原の面積が広いと、方角を失ったり車に何らかの問題が生じた場合、それが命の危険につながりかねない。加えて、オフロードの走行は環境破壊にもつながる。

第 3 章 モンゴル国におけるゲルキャンプ場の諸類型

3.1 ゲルキャンプ場の数とその推移

本研究では、モンゴル国のゲルキャンプ場の現状、さらにゲルキャンプ場の諸類型を研究するために、モンゴル国におけるゲルキャンプ場の分布のみならず、ゲルキャンプ場の諸類型やウランバートル市からの距離を観光行政に関わっている方々から聞き取り調査を行った。まず、モンゴル自然環境観光省からゲルキャンプ場を経営する会社名の登録リスト、県別におけるゲルキャンプ場の数のデータを入手した。そのデータをもとに登録されているゲルキャンプ場の位置やウランバートル市からの距離、さらにゲルキャンプ場の規模や諸類型を把握するために、ウランバートル市近郊のテレルジ国立公園、ブルガン県、セレンゲ県、アラハンガイ県、ウブルハンガイ県に現地調査として訪れ、ゲルキャンプ場が設置されているところで実施した。それ以外のゲルキャンプ場の不足したデータを観光会社や観光業に携わっている方々のオフィスを訪問し、聞き取り調査を実施した。

1990 年までは国営 Juulchin 社が独占的に観光業を行い、ホテル（ウランバートルホテル、バヤンゴルホテル）、ゲルキャンプ場（ウムヌゴビゲルキャンプ場、ホジルトゲルキャンプ場、ウンドルドブゲルキャンプ場）などを所有していた。つまりモンゴルでは、観光客を受け入れる宿泊施設は 2 つのホテルと 3 つのツーリストキャンプしかなかった。また、外国からの観光客を受け入れていただけなく、モンゴルにおける観光政策も担当していた。しかし、1990 年の

市場経済への移行にともない、Juulchin社が民営化された。旅行会社の運営が一般に開放されることによって多くの旅行会社ができ、モンゴルの観光部門が急速に発展した結果、外国からの観光客の数は45万人を超え、それにもなって、外国人観光客を受け入れる宿泊施設も年を追うごとに増加した。表2によれば2006年には、約200社のツアー手配業者、320のホテル、182人の公式ガイドをもつに至っている。さらに、2011年現在、700を超えるツアー手配業者、350のホテルと375のツーリストキャンプ、65の世界の評価基準を満たすホテルが存在するまでになっている。そのなかで、モンゴルにおけるゲルキャンプ場数の推移は図7のとおりである。図7によれば、ゲルキャンプ場の数は1990年までは3か所にしか設置されていなかったが、1999年になると63か所に、2000年には75か所に、2001年には108か所に、2005年には160か所、2008年になると314か所までに増加した。つまり、1990年代の民主化によって、観光客用の宿泊施設などへの投資が進み、ゲルキャンプの数などが大きく増えていることが図7で示されている（モンゴル自然環境観光省、2008）。

ゲルキャンプ場急増の背景には、モンゴルを訪れる観光客の目的が変わったことが挙げられる。1990年以前は旧ソ連の影響が強く、1935年から1938年にかけてモンゴルの各地で当時の知識人である2,000人以上の上級ラマ僧が処刑された。加えて、モンゴルの文化遺産といえる寺院がうちこわされ、5,000余りの寺院が破壊された。こうした破壊の背景には、独裁体制による国家権力のもと、モンゴルの伝統は時代遅れのものとされたことがあった。そのため、モンゴルの国民はお正月も祝うことができない状況であった。しかし、

1990年以降の民主化にともない、モンゴル文化が再評価されることになり、モンゴルの文化や歴史に興味のある観光客が訪れるようになった。

社会主義時代の外国人観光客はソ連のグループツアーが多く、ツアーの目的はウランバートル市内見学に留まっており、自然博物館やレーニン博物館など決まった場所の見学しか許されていなかった。しかし、1990年代に入ると、そのような制限が撤廃され、観光行動が自由になり、モンゴルの自然や文化に興味をもつ観光客が多く訪れるようになった。モンゴルを訪れる外国人観光客の主な目的ではモンゴルを代表する景観である大草原とそこに住む遊牧民に触れることである。そのため、モンゴルの遊牧民のゲルを宿泊施設として利用するゲルキャンプ場の果たす役割も高まってきた。

ゲルキャンプツーリズムによる地域振興は、モンゴルを訪れる外国人観光客がゲルキャンプツアーに参加し、自然環境や遊牧民の伝統文化について理解を深めること、体験することで遊牧民にも雇用が生まれることを目的としている。このため、ゲルキャンプツアーの実施により、顧客満足度が向上し、モンゴルへの観光客数が増加し続けているのが重要である。ゲルキャンプ場での宿泊や活動（ゲルキャンプツーリズム）はモンゴルの主な観光目的になっている（写真4）。

ゲルキャンプ場は人材育成とソフトの開発が基本かつ肝要であり、従来の観光開発にみられるような大規模な施設開発や初期投資が不要である点において、ゲルキャンプは経営者にとって、比較的容易に取り組むことができる宿泊施設となっている。一般的に観光客はゲルキャンプ場に宿泊しながら遊牧民地を訪問し、その自然と文化、

遊牧民との交流を楽しみ、かつ費用が割高なリゾート地での滞在とは違い、比較的安価にゆったりと過ごすことができる。基本的にゲルキャンプは宿泊施設（ゲル）を中心とした活動である。

遊牧民が使用する伝統的な移動式のモンゴルゲルは、草原地帯での利用に適している（N. Ganbat 2007）。写真 5 のモンゴルゲルは、ハラハ族が利用するゲルで、モンゴル全国の 95% 以上が利用する伝統的な移動式住居である。ゲルは円形で 2 本の柱によって支えられた骨組みをもち、屋根部分には中心から放射状に梁が渡される。骨組みの外側はフェルト（羊毛製）で包み、屋根や壁に相当する覆いとなっている。写真 6 はハラハ族のゲル内側の様子を示している。寒いときはフェルトを二重張りにし、夏の暑いときはフェルトの床部分をめくり、風通しをよくするつくりになっている。写真 7 はアラハンガイ県におけるゲルキャンプ場内のゲルに風通しをしている様子。ドア（正面）は南向きに立てられ、ドアに向かって左側が男性の、右側が女性の空間で、ストーブは東側を正面にするように置かれており、女性の側から扱いやすいようになっている。ゲルの正面には仏壇が置かれる。ゲルは、移動のたびに分解してラクダの背やトラックに乗せて運ぶことができる。解体や組み立ては共に遊牧を行う家族が共同で行い、数十分から 1 時間程度で組み立てることができる。内部は、直径 6.1m から 6.2m で、面積は 31 m²（5 ハナタ・壁）になっている。

ゲルキャンプ場の発展にともなってゲルのサイズも変わってきている。一般の遊牧民が使用するゲルは 5 ハナタ（31.15 m²）の面積だが、キャンプ場のゲルには現在 4 ハナタ（22.05 m²）から 20 ハナタ（254.34 m²）の大きさのゲルもみられるようになった（写真 8）。

表 3 では、モンゴル遊牧民の利用するゲルのサイズとゲルキャンプの注文で製造するゲルサイズを示している。ゲルキャンプの発展とともに、さまざまサイズのゲルを製造するようになっていくことがわかる。歴史を遡ればモンゴル帝国時代の 13 世紀頃までは、車輪をつけ牛を使って長距離を移動できる大型のゲルが存在したことが当時の旅行記に記されている。現代の大規模なゲルキャンプ場で使われている大型ゲルは、移動こそしないが当時の形を再現し、レストランなどの施設として利用されている。写真 9 は、ウランバートル市近郊のゲルキャンプ場における車輪付きゲルの写真である。

近年モンゴルでは宿泊施設等への投資が進み、ゲルキャンプ場の数も増加している。これには 2 つの要因が考えられる。第 1 の要因は外国人観光客の増加である。モンゴルへの外国人観光客は 2009 年現在、41 万人に増加している。そして同年、200 以上のツアーオペレーターと 320 のホテル、182 人の公式ガイドが営業を行っている。第 2 の要因はモンゴル人観光客の増加である。2009 年の 1 年間でモンゴルの特別保護区にあるゲルキャンプ場を訪れた観光客数のうち、外国人観光客の 3 万 5,242 人に対しモンゴル人観光客数は 12 万 1,268 人になっている（モンゴル特別保護局 2009）。外国人観光客およびモンゴル人観光客双方のニーズに対応するかたちで、ゲルキャンプ場は増えていると考えられる。

3.2 モンゴルにおけるゲルキャンプ場の分布

ここでは、ゲルキャンプ場の分布を明確にするため、モンゴルのアイマグ（県）を西部、森林帯、中央部、東部の 4 つに分ける。ゲルキャンプ場の分布パターンを確認する。調査方法としては、モン

ゴル自然環境観光省や総計データを分析した上で、観光会社が利用しているデータに組み合わせてゲルキャンプの位置を明らかにし、各県の自然環境の特徴からゲルキャンプの分布を考察した。

西部は、国土の 26.6% を占めるが、全ゲルキャンプ場の 9% を占めるに過ぎない。森林帯は、国土の 24.5% であるが、全ゲルキャンプ場の 40% を占めている。中央部が国土に占める面積の割合は 30.6% である。全ゲルキャンプ場数の 35% を占めている。東部は、国土の 18.3% であるが、水が少ないため全ゲルキャンプ場の 6% を占めるに過ぎない。

図 8 から、モンゴル全国におけるゲルキャンプ場の分布をみる事ができる。アイマグ別にみると、ゲルキャンプ場が一番分布しているのはウランバートル市とトゥブ県で 80 か所、次にフブスグル県 54 か所、ブルガン 35 か所、アラハンガイ県 22 か所である。一番低いのはゴビアルタイ県、ザブハン、オルホン県でそれぞれ 1 か所となっている。これにより、国の中央部は他地域よりもゲルキャンプ場が集中していることがわかる。ゲルキャンプ場の分布パターンが比較的高いウランバートル市を含む中央県、フブスグル県、アラハンガイ県の 3 つがゲルキャンプ場が集中する核心部であることがわかる（図 9）。また、表 4 には、ゲルキャンプが主に分布する 3 つの地域（アイマグ）の特徴を示している。これらの 3 アイマグに全ゲルキャンプの約 3 分の 1 が分布している。ゲルキャンプ場の多くがウランバートル市近郊に集中していることは、最終的にウランバートル市から違い距離と遊牧民の放牧地に位置しているとみられる。この分布図 9 には 314 か所のゲルキャンプ場の位置を示した。

モンゴルの森林地域は、海拔が 1,800m から 2,000m と高く積算温

度は低く、乾湿度は高い。土壌は、山岳性の森林土、黒土などモンゴルではもっとも肥沃な地域である。ここでは森林草原を利用し、牛を飼育するのに適している。牛は主に搾乳用、または食用として飼われている。牛車用にも用いられる。牛の総称はウヘルで、牛の子はトガル。種牛はボホ、雌牛はウネーと呼び分けている。また、森林草原地域に位置するフブスグル地区は、標高も高く、冬積雪量が多く、夏も冷涼であり、ツンドラやタイガが存在する。フブスグル地区はモンゴルのスイスといわれ、そこに位置するフブスグル湖は、モンゴル最大の淡水湖である。その湖から流れ出る川は北にあるバイカル湖に注いでいる。針葉樹に囲まれた湖の透明度は20m以上ともいわれ世界第2位である。標高は海拔1,645mで南北に長い形をしており、長さは136km、幅は36.5km、最大水深は262mになる。フブスグル湖は、モンゴルの淡水の70%、全世界の淡水の0.4%を占める。湖はフブスグル県の北部にある。このため寒さに強いヤク、ツンドラを好むトナカイ飼育に適している。フブスグル地区は、ウランバートル市から遠く離れているためインフラがなく、道路も整備されていない。車が通らない道も多くほとんど馬を移動手段として利用している。そのため、大きな建物や施設が建てることができず、宿泊先として移動可能で組立可能なゲルキャンプを利用している。山岳性草原地域は、山地部と平地部にはっきり分かれ、その比高は1000mにもなる、高度が下がるごとに降水量が減るに対し、積算温度は高くなる。土壌は山岳性ツンドラから砂漠性土まで分布している。そのため、様々な牧地景観がみられるが、特に山岳性草原を利用し、羊や山羊、馬飼育に適している。平原地域の北部は湿潤、南部は乾燥の影響を受けている。平均高度1,200mから1,500mの平

原を利用し、羊や馬の飼育に適している。ウムヌゴビ地域は、積算温度は高いが、水が少ない。大部分を砂漠性土壌が占め、砂漠性草原を利用し、ラクダや山羊飼育に適している。

上記の3つの地域には、モンゴルの遊牧民の生活を体験しに観光客が主に訪れる。この地域の遊牧民は、その年の雨の量や自然の状況によって移動するため、移動可能なゲルキャンプが多く設置されている。モンゴルは気温の年較差が非常に大きく、また乾草地帯が多いため、特定の地域に定住して家畜を飼養することは困難である。このため、5種類の家畜を草原において草の生育状態に応じ移動放牧している。放牧地は季節や地域ごとに大きく異なっており、その季節に最も適した放牧地で家畜を飼養する。一般的には年3～4回移動するが、春から夏にかけては比較的標高の高い草原、夏から秋にかけては最も栄養価の高い草原、冬から春にかけては草が豊富で厳しい寒さを凌げる場所が選定される。冬季には厳しい気象条件から家畜を守るため、簡易畜舎が設置される。

3.3 ゲルキャンプ場における観光資源

ゲルキャンプにおける観光資源として、モンゴルの自然(草原、砂漠)や文化が挙げられる。加えて、遊牧民の文化、すなわち、乗馬、ラクダ乗り、遊牧民ゲルの訪問、ナーダム祭、馬乳酒、ヨーグルトなど)がある。また、遊牧民地への訪問、乗馬などの活動に加えて、ハンティング、釣りなどもできる。以下で、ゲルキャンプにとって観光資源として利用可能な要素について挙げてみる。モンゴル各地にはその価値ある資源が豊富にある。

① 伝統的な自然保護精神

モンゴルの伝統的な宗教であるシャーマンの考えとして、さまざまな事物や事象には精霊が宿っており、言葉そのものにも霊力があると信じられている。自然と共に暮らしてきた遊牧民は、自然に対する深い畏敬の念をもっている。オボーと呼ばれる標柱（山頂の高所に石で建てられる標柱であり、この地域を通る際に道中の安全を祈って、オボーの周りを3周、時計回りに回るという習慣がある）もモンゴル人にとっては見慣れた存在であるが、遊牧民の文化として外国人観光客にとっては非常に興味深いものである（U. Erdenetuya 2009）。（写真 10）。

② 遊牧民生活

遊牧民は家畜を財産とし、大切に扱っている。そして、肉や毛などを産物としている。遊牧民の1日の始まりは早く、早朝から家畜の世話をする。その日の天候や風向きを考えて放牧に出かけ、良い草が生えている場所を選び、日没前に家畜とともに家に戻ってくる。家畜を育成させるための基本は、良質の草をたくさん与え、適度の運動で健全な体形を作ることである。このような遊牧生活と物質的に豊かで便利な生活を送る外国の都市住民の生活とは文化的に大きく異なり、遊牧民生活を体験するゲルキャンプツアーは外国人観光客をターゲットとした大きな商品価値をもっていることをが現地調査でわかった。

③ ゲル

モンゴルの草原に暮らす遊牧民たちはゲルに住んでいる。ゲルはモンゴル語で「家」を意味し、現在では遊牧民の住む家を指す。ゲルは柳の木などをドーム状に組み上げ、その上に羊の毛でできたフ

フェルトをかぶせた一種のテントとも考えられる。モンゴルの伝統的な移動式住居のゲルは、主にモンゴル草原に住む遊牧民が使用している。ゲルは必ず南側をむいて扉がつけられる。扉は昔フェルトで作っていたが、今は木材のドアで作っている。中央にはストーブがあり、ドアから一番奥の北側が主人の位置で、入って右側は女性や子供の場所で台所にあたる。左側が男性やお客様の場所で馬具などがおかれている。モンゴルゲルを歴史的にみると、ゲルを立てるのに、一般的に床を使っていなくて、土の上に直接立てる習慣があった。これは、家畜の子をゲルの中に入れることに関係している。春早く生まれたばかりの家畜の子を寒さから守るためにゲルの中に入れるためであった。遊牧民の飼っている羊の毛でフェルトを作る体験や、ゲルを解体してまた組み立てる引っ越しの体験はゲルキャンプツアーとして人気がある。写真 11 には、観光客が宿泊しているゲルを解体し、遊牧民の指示に従ってみんなで力を合わせながら組み立てていることがわかる。

④ 伝統的生活に根ざしたルール

火（ストーブ）・水・馬など生活に必須な資源や家畜と共存する知恵、馬乳酒・蒸留酒の客人への供し方など伝統的なおもてなしの心に基づいたルールがある。ゲルの中だけでもその小さな空間にさまざまな作法があることは観光客にとって興味深い。遊牧民のゲルを訪問する観光ツアーはすでに国内各地で行われており、ゲルキャンプの発展によってより良い観光資源になっている。写真 12 には、観光客が遊牧民のゲルを訪問し、通訳を通じて話をしていることがわかる。

⑤ 食文化

モンゴルの遊牧民の料理は伝統的に、赤い食べ物と呼ばれる肉料理と、白い食べ物と呼ばれる乳製品に分けられる。モンゴル人は、主食として小麦や米を食べられるが、量的には肉が主食並みの量を占める。モンゴルの伝統的な食事は乳製品と肉料理である。肉料理は羊肉が中心で、煮る料理と、ホルホグ（石焼）などの蒸す料理が中心であるが、ボードグやショルログのように焼く料理などもある。生食は一部の例外を除いて、ほとんど行なわない。モンゴルの肉料理は世界の民族料理と比較して、香辛料をほとんど使わないのが特徴である。モンゴルは寒冷な気候のため、肉の保存や消臭用の香辛料を必要としなかったと言われている。牛肉ではボルツという干肉に調理する。馬肉は冬期に利用する。ラクダの肉はゴビなどの地域で主に食べられるが、豚肉や鶏肉は、草原で放牧する家畜でなかったため、モンゴル料理にはあまり用いられない。魚は、モンゴル国北部では燻製にする。また、狩猟によってタラバガやシカなどの野生動物を食する。モンゴルの山羊や羊の屠蓄は血を1滴もこぼさずに行われる（写真 13）。また、肉は骨を折らずに解体し、鍋でゆでたり、焼き石と共に蒸したりするのが一般的で（写真 14）、その調理方法もユニークである。

モンゴルはインド、西欧（コーカサスが中心）と並んで、世界3大乳文化国であるとされている。モンゴルでは他の乳文化国で製法を成し得なかったアルコール飲料（蒸留酒）の文化を持っている（越智猛夫 1981）。

モンゴルでは5種類の家畜と呼ばれる、ウシ、ウマ、ラクダ、ヒツジ、ヤギ、およびヤクから、それぞれ搾乳される。地方によって異なるが、乳製品は一般的には牛と羊や山羊の乳を中心に生産され

る。ウマの乳は発酵させて、馬乳酒や乳製品として利用される。伝統的には生乳を飲むことは少ない。乳製品は、加熱、攪拌、静置、分離、濾過、発酵、成型、乾燥などのプロセスを通じて加工される。モンゴルの乳製品には多くの種類がある。家畜の解体や調理、馬乳酒等の乳製品加工を含めた体験プログラムはツアー参加者の印象に残るものであり、人気のある観光商品である。

⑥ 乗馬体験

モンゴル馬の特徴は体高が低い、持久力があっておとなしい性格をもっているところにある。モンゴルのゲルキャンプツアーの観光資源として、乗馬体験は必要不可欠のプログラムである。乗馬経験の豊富な遊牧民の子供たちは、それぞれの馬の性格を知り、その扱い方を熟知している。また観光客にあって馬を提供してくれる。馬を単なる道具としてではなく同朋として扱い、観光客がその世話まで行うツアーが催行されている。外国の観光客の中には初めてモンゴルで乗馬を体験するものが多い。そして乗馬は危険を従うスポーツでもある。馬は動物であるので、恐怖感をもつ人もいる。ヨーロッパでは乗馬をスポーツとして乗る為に両手で手綱をもっているがモンゴルの馬を乗る際には必ず片手でもっている。モンゴル鞍の特徴として足を乗せる鐙が鞍の真ん中に位置している。従って、馬が走り出すと鐙の上に体重をかける状態になるので立ち上がって乗る。これは馬上で弓を射るときに騎乗者の頭がもっとも揺れない乗り方なのであり、騎馬民族の乗り方なのである。遊牧民の暮らしと文化を学ぶゲルキャンプツアーとして非常に興味深い(写真 15)。

⑧. モンゴルの伝統的な祭り「ナーダム祭」

モンゴル国内の各地域で毎年7月11日(革命記念日)、12日にナ

ナーダム祭が開かれており、この祭りを体験するために各国から大勢の観光客が訪れている。ナーダムとはモンゴル語で「遊戯」という意味で、モンゴル人にとってこのナーダム祭は盛大な祭りであり、男の3つの祭りとも呼ばれている。その3つの遊びというのはモンゴル相撲、競馬、弓（アーチェリ）で、スポーツと文化を合わせた独特な習慣のある祭りである。1921年7月11日モンゴルの革命以降、この日がモンゴルの革命記念日になりナーダム祭の日となった（ウランバートル市役所 2010年）。

ナーダム祭りの一番人気はモンゴル相撲である。スポーツと文化を合わせたのがモンゴル相撲の特徴である。モンゴル相撲のルールは体のどこかが土についたことで負けとみなされる。モンゴル相撲には年齢制限や体重、身長制限がないため、自分より力をもっている者をに勝てるのつことでモンゴル相撲の技がどれだけあるかを証明できる。512人の力士が参加するのが普通で、特別な記念行事がある年は1024人の力士が参加する場合もある。力士が5回勝てばナチン、6回勝てばハルツァガ、7回はザーン、8回はガリダ、9回はアルサラン、アルサランをもらったものが優勝すればアワラガになります。これらがすべてがナーダム祭に関する規則に基づき、大統領から勲章、記念品を与えられる。一番上の力士から取り組みの相手を選ばれる。モンゴル相撲の衣装は絹で作られており、色鮮やかで丈夫である。力士それぞれがザソールチ（呼び出し）と一緒に3, 5, 7回のラウンドに出る。ザソールチによってその力士の成績をたたえ、励ますのがもうひとつの特徴である。

ナーダム祭りの1つである乗馬に全国から調教師が集まり、自分の調教した馬の速さを競い、乗っている子供の知恵を調べる。モン

ゴル競馬の特徴は、参加する子供の年齢の低いこと、5歳から12歳までの子供たちの知恵と勇気と忍耐力のすべてがこの競馬で把握できる大きな体験となる。馬の年齢によって6つの級に分けられる。約500頭の競馬用の馬が参加し、距離は年齢によって異なるが、一番長い距離は30から35kmである。優勝した馬、準優勝した馬、など先頭から5頭が入賞され得る。調教師には大統領から勲章が与えられ、馬に乗った子供にも記念品が与えられる。調教師と騎手を喜ばせた名誉ある馬の壊と汗は、それを触ったものに一年間幸運が訪れると言い伝わっている。モンゴルは馬を大切にする国で、馬を国章に刻んでいる世界唯一の国である。

モンゴル人は弓を引く人（アーチェリ）を大事にし、マトがあたるようにと挨拶をする。モンゴルアーチェリの特徴では革製品の丸い形の的を、それを地面に「ハナ」、「ハサ」として並べられる。ハナというのは360個の革製品の丸いテキを4メートルの幅で広さ40から50センチの高さで重ね、男性は75mの距離から40本の矢、女性は60mの距離から20本の矢をはなす。「ハサ」というのは4mの広さ幅の真ん中に30個の的を並べ、男性だけが20本の矢をはなし、争う。テキをに当たったスコアで入賞しが決まり、大統領から勲章が与えられる。

ウランバートル市で開かれる全国規模のナーダム祭とそれ以外に地方で開かれる小規模なナーダム祭が同時に行われているほか、各地のゲルキャンプでも外国人観光客向けにナーダム祭をが各地で行われている。地方のナーダム祭は国全体のナーダム祭と比較して、その規模とにぎやかさは劣るものの、迫力や面白さでは決して劣っていない。国全体で行われるナーダム祭はスタジアムやコンサート

ホールで行われており、出席者は見学するだけにとどまっているが、例えばアラハンガイ県で開かれる地方のナーダム祭は、観光客の参加も認められており、地方ならではの祭りの体験を味わうことができる人気ツアーになっている（写真 16）。

3.4 ゲルキャンプ場の分類

一口にゲルキャンプと言っても、その規模や性格は多様である。ここでは、モンゴルにおけるゲルキャンプ場を分類することにする。調査方法としては、自然環境観光省のデータと総計データを分析した上で全国のゲルキャンプ上の位置と登録されたゲルキャンプを営む会社の情報を明らかにした。得られたゲルキャンプの情報をもとに旅行会社からゲルキャンプ場の連絡先や各地に位置するゲルキャンプのウランバートル市からの距離や規模の情報を収集した。旅行会社には把握していないゲルキャンプの情報については、直接電話するなど各県の市役所からデータを収集した。

モンゴル国内にあるゲルキャンプ場のゲルの棟数を集計した結果、一番多かった地域は都市周辺の中央県、次いでフブスグル県、アラハンガイ県の順であった。しかし、ゲルキャンプ場の規模、すなわち、ゲルキャンプ場内に設置されているゲルの棟数によって分布に違いがみられる。図 10 は、モンゴルにおけるゲルキャンプ場のゲルの棟数による規模の割合を示している。図 10 によると 10 棟以下のゲルが設置されているゲルキャンプ場が全体の 52% を占めている。ゲルキャンプ場のゲルの棟数が 11 棟から 20 棟以下のゲルを設置されているゲルキャンプ場は 28%、21 棟から 30 棟以下のゲルを設置されているゲルキャンプ場は 10%、31 棟から 40 棟のゲルを設置さ

れているゲルキャンプ場は7%、41棟以上のゲルが設置されているゲルキャンプ場は3%である。つまり、ゲルキャンプ場内に設置されているゲルの棟数が少ないゲルキャンプ場が一番多く分布していることがわかる。こうした10棟以下のゲルキャンプ場は、遊牧民の利用するゲルを観光客の宿泊施設として利用するもので、小型ゲルキャンプ場として分類する。小型ゲルキャンプ場は、組立や移動が可能で、地元の遊牧民との関係も深く、自然や文化、遊牧民のライフスタイルを観光資源とするなどの共通点がみられる。

31棟以上のゲルキャンプ場は独立したリゾート地になっており、大型ゲルキャンプ場とする。大型ゲルキャンプ場は、地元との関わりがほとんどなく独自で営業を行っていることや地元を体験するのではなく、リゾート地内がテーマパークになっているなどの共通点がみられる。残りの11～30棟のゲルキャンプ場は中型ゲルキャンプとする。小型ゲルキャンプの体験プログラムに入っている乗馬体験など、小型と共通点もあるが、サービス面では大型ゲルキャンプと共通点もある。

本研究では、以上の3つにゲルキャンプ場を分類し、それぞれの分布をみていくこととする。図11によると、ウランバートル市からの距離によってゲルキャンプ場の規模や分布が異なっていることがわかる。すなわち、都市部周辺に、ゲルの棟数が多い大型ゲルキャンプが分布しているのに対して、ゲルの棟数が少ない小型ゲルキャンプ場は全国に広く分散して分布していることがわかる。

3.5 小型ゲルキャンプ場の分布と特色

小型ゲルキャンプ場は、モンゴルにおけるゲルキャンプ場の約

52%を占めている。図 12によると小型ゲルキャンプ場はモンゴル各地に分布しており、付属施設を含めた全体の規模も比較的小さく、利用費用も低料金となっている。その理由は、小型ゲルキャンプは大規模な投資が不要で短期間に組立て、営業を営むことができることにある。また、モンゴルの遊牧民は定期的に栄養のある放牧地を求めて移動するため、ゲルキャンプを移動させる必要がある。そのため、小規模で組立が簡単にできる施設がなければならない。そこで、小型ゲルキャンプ場では移動に適する現在の遊牧民の使用されているハラハ族のゲル（6ハナタ）が使用されている。モンゴル民族誌（1987）によると、モンゴルのゲルは、ハラハ族のゲルとそれ以外のゲルとに分類される。それ以外のゲルといえばカザフ族ゲルを挙げることができる。カザフ族のゲルの特徴は、天井と柱が高くハラハ族の使用するゲルよりハナタ（壁）が多く、8ハナタのゲルを使用している。ハラハ族のゲルは天井が低いため、草原地帯の厳しい風に強く、ゲル内は広く住める空間になっている特徴がある。カザフ族はモンゴルの総人口の5%に満たない。しかし、ハラハ族はモンゴルの総人口の80%以上を示しているため、モンゴル各地ではハラハ族のゲルが多く使用されている。小型ゲルキャンプ場の場合、中・大型ゲルキャンプ場と比較して、ゲルの大きさを遊牧民の利用するゲルの規模を5ハナタ以下に抑えている。なお、ゲルの大きさはこのハナタの枚数で決まる。ハナタとは、ハナと呼ばれる折りたたみ式の壁を意味する単位である。そのハナを1つずつ円を描くようにして広げて紐で繋ぎ合わせていくものである。

モンゴルの遊牧民はかつて、自らゲルを製造していたことが現地調査で明らかになった。ゲルの木材の骨組みからゲルを巻くフェル

トまで全部自分たちで作っていたが、1990年代に入ってからハラハ族のゲルを製造する工場や個人でゲルを作って市場で販売する人も出てきた。そのため、遊牧民もゲルの主な材料となる木材の部分をウランバートル市にある工場から購入するようになった。小型ゲルキャンプがハラハ族（ゲル）を使用しているもう1つの理由は、このようにゲルを作る工場ができたことにより、安いコスト購入できるようになったからであることがヒアリング調査でわかった。ヒアリング調査で現地の工場に行った際に、小型ゲルキャンプ場向けに、一般にハラハ族のゲルを製造していることがわかった。

近年、ゲルキャンプが急増したため、ゲルキャンプ用のゲルの注文が多く、そのゲルキャンプの特徴や注文をするお客さんのニーズに合わせて特別注文のゲルを製造している。しかし、特別注文のゲルは、一般のゲルを製造するより何倍も高くなっている。また、特別に注文して作るゲルはインテリアにこだわっているため形が良い反面、本来のモンゴルゲルのもつ機能となる組立や移動することができなくなっている。

小型ゲルキャンプ場に設置されている1つのゲルの中において、4つのベットがあるのが一般的で、1棟のゲルに最大4人を受け入れることができるようになっている。小型ゲルキャンプは他のゲルキャンプと違って夏の暖かい時期に限って営業を営んでいる。小型ゲルキャンプを訪れる観光客はモンゴルの遊牧民の生活を体験しに来ることが1つの理由であるが、モンゴルの冬は-40℃以下になることも多く、冬季には外国人の観光者があまり来ないからである。また、小型ゲルキャンプは、遊牧民の夏営地に分布している。その理由は、遊牧民らは複数の家族で遊牧を行っているが、冬の時期には

別々の冬営地に移動しており、夏の時期だけ、みんなが同じ場所で近い距離を保ちつつ夏営地を設置している。その夏営地にゲルキャンプを設置することで、唯一の遊牧民家族に負担がかからず、また、すべての遊牧民の参加が可能になるからである。そのため、小型ゲルキャンプにとっては、夏の時期が一番大事な時期である。

遊牧民の特徴は、数家族からなる小規模な家族単位で生活し、ゲルという羊のフェルトでできた宿泊施設に住んでいることである。

小型ゲルキャンプ場の特徴は遊牧畜産と関係している。モンゴルの遊牧民は、季節に合わせて住む場所を移動するため自由気ままな生活に思えるが、その本質は家畜を育成させることであるため、草原では最適な放牧方法である。遊牧民は1か所に定住することなく、気候の変動や家畜の状況に合わせて、季節ごとに決まった春営地、夏営地、秋営地、冬営地に移動しながら牧畜を営んでいる。冬は厳しい寒さを家畜に乗り越えさせるため、栄養のある草の生えた放牧地へと移動させるなど、季節ごとに放牧に適した地域へと移動を繰り返す。遊牧民の冬営地は、山中の風が通らない南斜面で陽あたりのよい場所に設営する。春営地は、山中の冬営地と川や湖の中間地点に近い場所に設営し、冬営地では風が通らない山の南斜面を拠点にすることが多い。小型ゲルキャンプの場合は、遊牧民が多く設営する夏営地に多く分布する。遊牧民の夏営地では、山中から川や湖の水源を求めて遊牧民たちが集まってくるからである。

モンゴルにおける小型ゲルキャンプ場は国土全域に広がる大草原ステップをはじめ、北部地域の森林地帯、南部地域のゴビ砂漠、西部地域の山と湖、東部地域の草原地帯等、広大な範囲に分布する。山、砂丘、森林、泉、大草原、砂漠と様々な景観がひろがる場所で

あり、その雄大な地形自然に生きる遊牧民がいる。草原はモンゴル国全体の約 130 万 km² を放牧地が占めている。

以下の内容は現地調査で得られたデータによりまとめたものである。

遊牧民は、移動の際には宿泊施設の分解や組み立てを行う。1 時間ほどで組み立てできるフェルトでできた移動式ゲルを利用している。小型ゲルキャンプ場で使われるゲルはホテルと違ってプライバシーが守られないため、宿泊する観光客はみな男女別に分かれて泊まることが多い。またゲルキャンプの宿泊料金は、1 人当りではなく、ゲル 1 棟ごとに料金が設定されている。したがって、ダブルルームの場合、シングルルームとの差額はわずか数ドルであり、4 人で泊まっても 2 人で泊まった場合とほとんど同じ料金になっている。写真 17 に示している小型ゲルキャンプ場は、モンゴル遊牧民の移動式ゲルをそのまま宿泊施設として利用していることがわかる。小型ゲルキャンプは従来の観光開発にみられるような大規模な施設開発や初期投資を必要としない。

3.6 中型ゲルキャンプ場の分布と特色

中型ゲルキャンプの分布はウランバートル市近郊に比較的によく分布している（図 13）。その理由は中型のゲルキャンプは、ウランバートルから日帰りする観光客を中心に営業を営んでいるからである。そのため、高級料理の提供や家族連れの観光客向けのサービスを多く行っている。小型ゲルキャンプ場の宿泊料金はゲルを一泊で精算をするが、中型のゲルキャンプの場合は、日帰りの観光者が多いため、ゲルをレンタルするかたちで 1 時間当たりの利用料金設定

を行っている。中型ゲルキャンプは、観光客を引き寄せる1つの観光資源としてモンゴルゲルを立てることが多く、ゲルキャンプ場内のゲルに宿泊することができるが、宿泊から利益を出すのではなくレストランにおける料理の提供を中心に営業を行っている。

中型ゲルキャンプの例として、テレルジ国立公園でアメリカ人が営業を営むゲルキャンプを取り上げる。このゲルキャンプの特徴として、アメリカ農村の雰囲気味わえる料理、サウナとビリヤードなどの設置が挙げられる。宿泊施設としてアメリカによくみられるハウスがあり、そのなかにレストランやサウナ、ビリヤードが設置され、宿泊できるデラックス部屋などもある。しかし、その建物の周りにモンゴルのゲルを設置している。その理由は、外国からモンゴルを訪れる外国人観光者はモンゴルゲルの体験を期待するからである。外国人観光客は、どこにもあるリゾートよりモンゴルの伝統や文化に興味をもってモンゴルを訪れるので、ゲルに宿泊して乗馬や遊牧民を訪問することを目的とする。そのため、外国人向けにゲルを設置することで、こうした外国人観光客を引きつけようとしている。一方、モンゴル人観光客は、リゾートの雰囲気や快適さを求めるため、レストランやデラックスルームを利用するものが多いことがわかった。

さらに、中型ゲルキャンプの特色は小型ゲルキャンプと違って1年中営業を行っていることにある。そのため、ゲルは冬の時期に寒いので、ウランバートル市の近郊ゲルキャンプはほとんど営業していない。中型ゲルキャンプは、モンゴルゲル以外に建物も立てているので、ホテルのように冬の時期でも快適に過ごすことができるようになっている。中型ゲルキャンプの場合は、モンゴルのゲルの形

をした宿泊施設が多くみられる。宿泊施設をセメントなど断熱性のある素材でモンゴルゲルの形に造り、冬の寒い時期に営業を行っている。小型ゲルキャンプにみられない窓付きのゲルやゲル内にトイレも設置されているゲルもある。中型ゲルキャンプは、インフラの整っている都市近郊に分布するため電気線も通っている。中型ゲルキャンプは、レストランやシャワー、ライティングなど電気を利用することが多いため、小型ゲルキャンプのようにモンゴル全体に設置することは不可能である。ゲル数が11から30からなる中型ゲルキャンプ場では遊牧民の生活を体験できないが、乗馬やモンゴル料理などモンゴルの伝統文化を楽しむことができる。また、アメリカ人や日本人が経営しているゲルキャンプもあり、世界各国の料理を楽しむことができる（写真18）。中型ゲルキャンプでは、モンゴルの文化を体験したい外国人観光客のために用意された乗馬・民族コンサートなどのセットプランが多く、旅行会社で用意されている観光地のツアープランでも、中型ゲルキャンプ場の利用を取り入れたものが人気である。中型ゲルキャンプ場は、ウランバートルに近い場所の中でも、テレルジ国立公園など、観光地として人気のある地域に分布している。そこでは、広大な丘陵地に森林や花崗岩の奇岩が広がっており、雄大な山並みを映す景観が広がる。

3.7 大型ゲルキャンプ場の分布と特色

モンゴルにおける大型ゲルキャンプ場は、ウランバートル市近郊に分布する（図14）。特に、テレルジ国立公園に集中している。テレルジ周辺は1993年に、国立公園として保護の対象となった。テレルジ国立公園は、モンゴルの首都ウランバートルより北西75kmに位

置し、遊牧民の位置する平らな草原地帯とは異なり、奇岩や樹木が目立つウランバートル市から一番近い静かな保養地である。テレルジ国立公園までは舗装路で、ウランバートル市から車で約 2 時間で日帰りできる山と緑の風光明媚な保養地である。また、テレルジ国立公園は、自然にできた奇跡といわれる珍しい形をしている岩山や高さ 15m の亀石などで人気のある観光名所である。現地のモンゴル人だけではなく、外国人観光客がこの風景を楽しみに来ている。観光客は、自然のなかでの乗馬体験とハイキング、山歩き、亀石に登ってみることもできる。テレルジ国立公園内には、ゲルを建てているいくつかの大型キャンプがあり、オールシーズン、観光客が泊まることができる。

ウランバートル市から離れている大型ゲルキャンプの中に、カラコルムに位置するドリーム・ランドがある。ウランバートルから 380 キロ離れたカラコルム地区オルホン川の隣に設置されている。ウランバートルから約 7 時間かかる。デラックスルーム 4 室、スタンダードルーム 7 室、デラックスゲル 15 戸、スタンダードゲル 10 戸あり、ゲルの中にはエアコンも設置され、モンゴル遊牧民のゲルを現代化したスタイルに特徴がある。また、ウランバートル市内の高級レストランのカリフォルニアが当キャンプの食事を任されている。大型ゲルキャンプと小型ゲルキャンプは過ごし方が異なり、それに対応する観光資源も異なっている。大型ゲルキャンプでは、レストラン、会議、結婚式場、各セミナー、ダンスなどのイベント開催可能なホールがあり男性用と女性用の洋式個別トイレ、サウナ、シャワーなどが準備されている。また、プロの料理人が調理したモンゴルやヨーロッパの 高品質の美味しい料理、モンゴルブランド品と

なる冷たいビール、ジュースの提供もしている。これに対して小型ゲルキャンプでは馬、牛、ヤク、羊、ヤギが青々とした草原で放牧している風景をみて安らぎを感じ、自然の素晴らしさを観察できる。

中型と大型ゲルキャンプ場は、インテリアなどにもこだわっており、アメリカやヨーロッパのスタイルをとりいれている。ゲルキャンプ場内は自然を活かしたつくりになっており、落ち着いてキャンプが楽しめるリゾート地になっている（写真 19）。四季に営業するため、施設も清潔に管理されているが、レストランとして利用する木造建物や、コンクリートでできた床暖房付のゲルもあり、それらのゲルは移動不可能となっている。キャンプ場内にはビリヤード場やサウナ、バスケットコートも設置されている。

大型ゲルキャンプ場の宿泊料金はゲルにおけるサービス料等の費用が含まれているため、小型ゲルキャンプよりも高めとなっている。政府やVIPのモンゴル訪問なども大型ゲルキャンプ場で行われることが多い。旅行で大型ゲルキャンプ場を利用する場合、フロント受付終了後には係員が、重たい荷物を部屋まで運んでくれ、食事もゲル内で食べることができ、お土産などもゲルキャンプ場内のアンティークショップで購入することができる（写真 20）。VIP客にとっても使いやすいように色々な工夫がなされている。大型ゲルキャンプは、単一ないし複数の経営組織の元で、観光客に対して、さまざまなレジャーライフが提供されているリゾート地になっている。大型ゲルキャンプにおいて具備された要件はまず、日常性を越えた施設と環境をもっていることである。小型ゲルキャンプのゲルのなかには、4から5台のベットがあり、中央には薪ストーブ、テーブルと椅子があるのに対して、大型ゲルキャンプでは、観光客用のゲルと隣

接してレストランやトイレ、シャワー室などの施設のある別棟が附属している。

第 4 章 アラハンガイ県・ウギー湖における小型ゲルキャンプの存立形態

4.1 事例小型ゲルキャンプ場の選定

前章では、それぞれのゲルキャンプによって規模や設備の充実状況が異なることが明らかとなった。図 10 によれば、1 棟から 10 棟のゲルを設置されている小規模ゲルキャンプが最も多く存在しており、設置されたゲルの棟数が多い大規模ゲルキャンプ場ほど開業期間が少ない。また、規模ごとの特徴をみてみると、大型ゲルキャンプ場は、レストランやバー、洋式トイレ、サウナなどの設備があり、サービスの充実度は高いが、地元住民（遊牧民）との関係性は低く、リゾート化された施設として機能していることがわかる。つまり文化や自然、地域性を感じることもよりも、施設内のサービスを楽しむことが活動のメインとなっている（表 5）。

一方、表 5 によると、小規模ゲルキャンプは、設備・サービスの充実度は低いですが、地元住民との関わりが深い。例えば、乗馬や乳製品の加工など、より遊牧民の生活に密着した体験が可能である。モンゴル自然環境観光省 2006 年の報告書によると、小規模ゲルキャンプの雇用者の 73% が地元住民であり地元住民の働く場としても機能していることから、地域の活性化や雇用促進にも貢献することがわかる。また、モンゴル自然環境省のデータ 2006 によると、小規模ゲルキャンプのほうが自然環境への負荷が少ない。大規模ゲルキャンプの面積は平均約 4ha で全体を施設として利用しているのに対し、小規模ゲルキャンプの施設面積は 0.5ha～1ha でキャンプ場全体のわずか 6% を占めるに過ぎない。

上述した理由から、遊牧民の生活と自然環境に適合した小規模ゲルキャンプに着目し、小規模ゲルキャンプの実態と地元住民との具体的な関わり合いを把握をするために、アラハンガイ県・ウギー湖にあるゲルキャンプ場を選定した（図 15）。ウギー湖は、ウランバートル市から車で 6 時間以上（約 450 km）の移動時間を要する草原地帯にある。ウギー湖は夏の時期、遊牧民の夏営地として知られており、遊牧民にとっての放牧の中継地であると同時に、観光客にとっての休養地として人気がある。主要な観光資源はウギー湖、鳥類、草原であり、ハラホリン（カラコルム）観光のついでに立ち寄る観光客が多く、遊牧民地を体験する連泊が多いことから選定に至った（写真 21）。

4.2 アルハンガイ県・ウギー郡における観光資源としての自然と歴史

アルハンガイ県はウランバートルの真西約 450km、ハンガイ山脈の北側に位置し、平均海拔は 2000m を超える。総面積 55,300 平方キロで森林が 15.7%、草原が 75%、畑が 1.5% である。アルハンガイ県の総人口は約 9 万 3,000 で、県中心部の県都ツェツェレグで約 1 万 8,000 と、モンゴル全体の 16% を占めている（モンゴル国家総計局 2011）。アルハンガイ県は、1923 年にツェツェレグ・マンダル・オール県として制定され、1931 年からアルハンガイ県と改称された地域であり、県内には 19 のソム、99 のバグがある。

アルハンガイ県は酪農が盛んで、モンゴル国で最も美しい地域といわれる。アルハンガイ県には豊富な、魚が生息するタミリーンゴル川、火山や火山湖、また広範な森林、ヤクが生育する草原など目

を見張るような景色が広がっている。古代の王国の遺跡もいくつかあり、モンゴルでも主要な観光地と言える。その1つは、ハルバルガスの北東20kmのモンゴル帝国の前のトルコ人の碑である。これらは古代文字と中国文字で碑文が刻まれた3mの高さのもので紀元732年に建立されている。アラハンガイ県に住んでいる主な部族は、ハイハ族とウルド族である。

この県は山や平野が多く、海拔平均高度は2,414m、最高地点は万年雪で覆われたハララグタイの頂きが3,539m、最低地点はオルホン河とタミル河の合流地点1,290mである。ハンガイの北側を意味する通り、アルハンガイの殆どの部分は、ハンガイ山脈の北の斜面に位置している。ハンガイ山脈は、アルハンガイ県の西部から南部へ約700km、オトゴン・テンゲル山(4,021m)を擁する大きな山脈である。この山脈はモンゴル第二の高さがあり、ハンガイ山、ノヨンハンガイおよびタルバガタイン山国立公園として保護されている。また、火山爆発の跡である美しいホルゴ、渡り鳥の聖地でありラムサール条約に登録されるテルヒーントツァガンノール湖やウギ・ノール湖、山に挟まれた広大な草原が広がる(モンゴル自然環境観光省、2009)。

アラハンガイ県の野生動物には、野羊、野ヤギ、山猫、野生ジカ、野生ブタ、オオカミ、キツネ、リス、タラバガン、野ウサギなどが、鳥類には、七面鳥、ハゲワシ、ワシ(、ハクチョウ、コンドル、フクロウ、オオタカ、ライチョウ、キツツキなど約300種類が、河川や湖沼には、多くのモンゴル固有種を含む40種類程度の魚類が生息している。樹木は、スギ、シラカバ、ハルモド、ニレノキ、ポプラ、ヤナギ、サクラの一種(ヤラガイ)などの50種類以上が、果実はブ

ルーベリー、グズベリー、クランベリー、松のみ等々が自生している（モンゴル自然環境観光省、2009）。

アルハンガイ県には、モンゴルの古都カラコルムがある。カラコルムは、モンゴル高原中央部のウランバートル市から西へ約 440km、アルハンガイ県のオルホン河畔に位置する。カラコルムは、チンギスハーンの息子オゴデイハーンによって 1235 年に建都された。仏教やイスラム教、キリスト教が共存するだけでなく、モンゴル民族以外にも、ヨーロッパなどの複数の民族が同居する国際的な都市にまで発展していた。現存しているカラコルムの代表的な遺跡はチベット仏教寺院エルデニゾーであり、2004 年に文化的景観として世界遺産に登録された。108 個の白い仏塔で囲まれ、400m 四方の敷地の中に建設されている（写真 22）。

アルハンガイ県は、馬乳酒で知られる地域もあり、牧畜景観が広がっている。その典型はカラコルムから北へ約 70 km の地点のウギー湖周辺にある（写真 23）。ウギー湖の面積は、25km² の面積をもち、長さ 7.4km、幅が 5.3km、平均深度 15.3m、容量が 0.171km³ で、14 種類の魚が生息し、ハクチョウやアネハヅル、タンチョウヅルなどの 106 種類の鳥が生息する。生息する鳥のうち 87% は渡り鳥であり、渡り鳥の中継地としてラムサール条約（1971 年）にも登録された（ウギー湖におけるエコシステムを保護するプロジェクト研究調査報告書 2007）。ウギー湖の水資源とその周辺の栄養豊富な草を餌とする家畜はよく育つため、遊牧民が夏営地として過ごす場所となっている（写真 24）。

4.3 アルハンガイ県・ウギー郡における観光資源としての遊牧文化

アルハンガイ県の中心に位置するツェツェルレグ市から約 100km の地点にウギー・ノール郡がある。2010 年現在、ウギー・ノール郡の総人口は約 3 千で世帯数が 836 世帯である。家畜数は、16 万 3313 頭で、主な五種類の家畜の内訳は、ラクダ（352 頭）、馬（12 万 690 頭）、牛（10,096 頭）、羊（7 万 8,093 頭）、山羊（6 万頭）となっている（モンゴル自然環境省 2010）。この地域は、ハンガイ山脈中の海拔 1,700 から 2,040m の高地に位置し、地形は山がちであり、面積の 82% を草原が、14% をカラマツなどの森林が占める（モンゴル総計局 2012 年）。気候は、最も寒い 1 月の平均気温は約 -20°C であり、最も暖かい 7 月の平均気温は約 17°C である。年間の平均降水量は約 400mm で夏に集中する（モンゴル自然環境観光省 2010 年）。

ウギー郡のホト・アイル共同体は、牧民運動団結といえ、その規模は平均 3 家族から 5 家族、多くて 10 家族である。近隣のホト・アイル共同体とは 10km も離れている。しかし、羊やヤギの搾乳する時期に 2、3 の近隣ホト・アイル共同体が、共同でその仕事に当たる。

モンゴルにおける放牧の仕方は、半集約と集約的方式と 2 つに分けることができる。半集約方式は春から夏にかけて放牧する方式であるが、集約的方式は一年中放牧しないで舎飼いする方式である。1960 年代以降、都市住民への畜産物の安定供給を目的として国営農場方式による大規模な集約的畜産農場が設立された。しかし、1990 年以降は国有財産の私有化と国営農場の民営化にともない、そこで飼養されていた家畜が個人農家に配分された。現在のモンゴルの酪農は、半集約的方式を中心に行われている。アラハンガイ県のウギー郡東部に位置するウギー湖の遊牧民は、四季を通じて移動循環す

る半集約的方式で家畜を飼育する。アラハンガイ県の草原は草生量が少ないため、ウギー湖周辺の草地を放牧用地として重点的に利用している（図 16）。また、モンゴルの遊牧民は、山羊、羊、牛、ラクダ、馬を総称する言葉としてタワン・ホショー（5 畜）と言っているが、それぞれに生態上の制約があって、これらを 1 つにまとめて放牧することができない。そのため家畜の種類によって放牧地も異なっている。

以下の内容はアラハンガイ県ウギー郡で実施した現地調査によりまとめたものである。

ラクダは 5 畜の一種として遊牧民の歴史の中で重要な役割を果たして来た。特に、ゴビや砂漠に住む遊牧民の生活に欠かすことのできない家畜である。ラクダの 1 頭から、平均 6 kg の毛が取れる。10kg 以上の毛が取れるラクダの種もいる。ゴビ地域では、牛の代わりにラクダが乳を提供し、それを様々な乳製品に加工し利用している。含有物の点では山羊の乳と変わらないという。また、ラクダの体重は平均 480kg である。らくだの特徴は、放牧地で草を噛む時間が他の 5 畜より短い。馬の場合は、1 日に 70% の草をはむのに対し、ラクダは 35%、8 時間で食べ終わる。ラクダは余分のエネルギーを消費せず節約する特徴をもっているからである。そのため、ラクダはゴビやゴビステップのように草の植えないところでも適応して生きて行ける家畜である。ラクダの最適地はウムヌゴビ県に一致する。この地域では、自然の条件から他の家畜を飼うことが難しいため、ラクダの価値が高い。しかし、近代化の波、自動車の普及による利用数が減ったが、アラハンガイ県のウギー郡では、ラクダを交通や輸送手段と小型ゲルキャンプの観光資源の家畜として飼われている。

その理由は、外国人観光者の中でラクダの人気もあり、搾乳期間も、15 から 16 か月と長く、平均 160ℓの乳が出ることにある。そのため、観光客のための乳搾り体験やラクダに乗って体験することがプログラムに入っている。写真 25 は小型ゲルキャンプの観光客がウギー湖周辺の遊牧民訪問の際にラクダを体験している様子を示している。

馬は肉や乳、革を提供し、輸送手段、またはモンゴル人の友となる重要な家畜である。馬肉には、タンパク質が平均 20%と多く、ミネラルや塩分が豊富であるため遊牧民は冬期に食料として利用する。馬の利用法には地域による違いがみられる。ボルガン県、中央県、アラハンガイ県、ウブルハンガイ県、ドルノゴビ県、ドンドゴビ県では、モンゴルの中で特に、馬乳酒が美味しい地方として知られており、馬乳酒の製造に力を入れている。また、ヘンテイー、ドンドゴビ、ウブルハンガイ県の郡では競走馬の育成に力を入れている。

アラハンガイ県のウギー郡に位置する小型ゲルキャンプは夏の時期に美味しい馬乳酒を飲むために都市からモンゴル人の観光者が多く訪れる。上述べたようにアラハンガイ県は馬乳酒で知られているからである。また、馬乳酒は生産地で飲まないとも味が変わるので、現地に行って飲むしか方法はない。そのため、小型ゲルキャンプは何百リットルもの馬乳酒を周辺の遊牧民たちと協力して用意し、観光客を待っている。モンゴル人の男性の場合、馬乳酒が生産される時期に 1 日で平均 10ℓも飲む。なぜなら、馬乳は栄養価が高く牛乳の 10 倍のビタミン C を含んでいるからである。馬 1 頭から、平均 70ℓの乳が搾られる。この乳で発酵させた馬乳酒は薬として、夏の重要な飲料水の代用としてだけではなく、遊牧民の生活や小型ゲルキャンプに欠かすことのできない観光資源になっている。

羊と山羊は衣食住のすべてを満たす、モンゴルの遊牧民の生活手段となっている資源である。小型ゲルキャンプでは、外国人観光客に乳搾りの体験として利用されている（写真 26）。理由は、大型家畜より安全に乳搾りの体験ができるからである（写真 27）。また、搾った乳で乳製品を作ってもらったり、羊肉でモンゴルの伝統的な料理を作ってあげるなど観光資源として利用されている（写真 28）。

4.4 小型ゲルキャンプ場における設備・調度品

アラハンガイ県ウギー郡における小型ゲルキャンプ場で宿泊施設として提供されるゲルは元来遊牧民の移動生活に適しているものを使用している。そのため、持ち運びしやすい軽量のベッドやテーブルなどの家具を基本的設備として備えている（写真 29）。移動式ではない大型ゲルキャンプ場においては当たり前の設備であるエアコン、テレビ、冷蔵庫といった比較的高級なものは小型ゲルキャンプ場のゲルには設置されていない（写真 30）。柱（バガナ）、屋根棒（オニ）、床（シャル）とゲルを覆うフェルト、縄と撚り紐でできている。遊牧民は本来的に床の上にゲルを建てるのではなく土の上に建てる習慣があった。これは家畜の子をゲルの中に入れることに関係がある（している）。しかしゲルキャンプ場のゲルは観光客に快適に過ごしてもらうため、木製製の床を敷いている。写真 31 には、遊牧民は夏営地にゲルを立てる時に、床を敷かないことがわかる。その理由は、床は重く持ち運びにくいからである。床など大きい家具などは、冬営地に置いて移動するのが一般的である。

小型ゲルキャンプを組み立て時間は、ゲルキャンプ場内に設置されているゲルの棟数によって異ことなる。10 棟がを設置する場合は、

ベットやテーブルの組み立て時間を含めて1日ほどかかる。1棟のゲルを組み立てるには、5人で約1時間、分解にも同様の時間を必要とする。荷ほどきしたら、ハナと呼ばれる折りたたみ式の壁を取り出し、1つずつ円を描くようにして広げて紐で繋ぎ合わせていく。ゲルの大きさはこのハンナの枚数で決まる。遊牧民地内にハナを繋いで建てる場所が決定したら、その中心にトーノという天窓を置き、ドアから入れることのできないベッドやテーブルなどの大きな道具も予め入れておく。

そして遊牧民の習慣と同じように南の方角が入口となるよう壁に繋ぎ合わせ扉を取り付ける。小型ゲルキャンプの一般的なゲルは五枚のハンナからなり、室内の直径は約8メートルになる。扉を取り付けて壁が出来たら、一人がバガナという二本の柱で天窓を持ち上げ、オニと呼ばれる屋根棒を天窓の穴に差し、ゲルの四隅から壁に取り付けていく。この時、天窓の四隅からも壁に紐を結んでおく。屋根棒の末端にあるザガラダガと呼ぶ輪っかをハンナの上端にかけて屋根と壁の骨組を完成させていく。扉の枠に固定された二本の紐が、壁の骨組みを圧迫するようにして張りを出させる。この時、天窓から壁に結んであった紐で屋根の傾きなどを修正しておく。内で天窓を支えていた人は扉から出て外を手伝う。

ゲルの骨組が完成したら室内の内側に布を被せていく。その布の外側からフェルトを被せていくのだが、布を必要としなければ直接フェルトを被せていくこともある。天窓から手で引っ張って屋根や壁にかけた布は、屋根に被さるようにしてハンナに結んでいく。そしてフェルトを被せて保温ができるように工夫するのである。壁にかけるフェルトにも紐で結んでいく。ゲルには紐をよく用い、服のよ

うに重ねて保温につとめるのである。

フェルトを被せ終えたらゲルを1つに包むガドールブレースと呼ばれる布を被せ、三本の紐で壁の外側を固定する。天窓にはウルフと呼ばれる布をおおい、半分折り返して明かりを入れる。また営業が始まればストーブを設置して、天窓から煙突を出す。中央にストーブが置かれ、その手前に家畜の糞や薪の入った燃料箱が置かれる。鏡や棚などは壁に沿って置かれていく。

小規模ゲルキャンプにおける観光資源としてまず、①モンゴルの自然(草原、砂漠)や遊牧民の文化、乗馬、ラクダ乗り、遊牧民ゲルの訪問、ナーダム祭、馬乳酒、ヨーグルトなど)をテーマにしたツアーが多い。②先進国となる欧米、日本からのグループツアーが多い。グループツアーでは遊牧民地への訪問、乗馬などの活動があらかじめプログラムとして設定されている。③ゲルキャンプでの乗馬、ハンティング、釣りなどを目的に来訪するリピーターの個人旅行者が多い。④自然や文化に関する観光商品を売りものにしたツアープログラムが多い。観光目的を決めてプログラムをつくり、説明を行うツアーになっている。⑤観光振興と自然保護を結びつける仕組みが充実している。つまり、地域社会やゲルキャンプ経営者は自然保護に取り組んでおり、観光振興と組み合わせた仕組み作りを実現している。

4.5 遊牧民の活動の季節的变化におけるゲルキャンプの運用

モンゴルの自然環境は季節性が強く、遊牧民はこれを、春、夏、秋、冬という四つの季節として区分していることを第2章で述べた。ここでは各季節のウギー湖周辺の放牧環境とゲルキャンプとの関わ

りについて検討する。ウギー湖周近に位置する遊牧民は、年間3～4回移動を行っている。ゲルや家畜囲いを解体してトラックに載せ、新しく設置する場所に移り、そこでこれらを組み立てる。遊牧民の移動回数は、世帯のもつ家畜の頭数により異なるが、季節の変わり目に当たる時期に移動する。ウギー湖周辺における放牧地や家畜の群れを小型ゲルキャンプと協力するドライさんの世帯を事例に示す。図16では、放牧に際しては、羊や山羊の群れ、牛、馬は、それぞれ移動速度や採食リズムが異なるため、各家畜の放牧地が別々に管理されていることがわかる。また、家畜の群れの分け方は1日の中でも搾乳の前後などで異なる。夏営地では、新生仔や母畜の一部が、区別して管理される。子牛は、生後数日間、放牧地に出されず遊牧民の設置した夏営地と小型ゲルキャンプのあいだの囲いの中にとめおかれる。なぜなら、狼の襲撃と寒さから守るため、また、母を夏営地に連れ戻すためのおとりとして利用するからである。加えて、勝手に哺乳することを防いで搾乳量を確保するためである。

冬営地は山中の南斜面に選定される。冬営地では従来の農場で一般的に用いられるようになった大規模な固定畜舎はなく、冷たい北風から家畜を守るために畜糞で固められたフルゼンという木材と石状のものを積み上げて囲った家畜置場がある程度である。冬営地から3～5km離れた場所に位置するウギー湖の草地に夏営地が設置されている。冬営地と夏営地の途中に春営地を設置し、夏営地から冬営地に戻る途中に再び秋営地として利用することもある。このような冬営地－春営地－夏営地－秋営地の遊牧循環を毎年くりかえしている。ウギー湖の遊牧民は10月になると夏営地の湖から離れ、山中の冬営地に移動する。遊牧民たちは家畜置場の防風壁を設置し

たり、燃料となる畜糞や薪を運び入れたり越冬の準備をする。家畜置場がある遊牧民地のサイトをモンゴル人は「ホト」といい、このホトを囲むようにしてフェルトを2枚以上重ねた冬用のゲルを配置する。冬営地では羊と山羊の全個体が1群として放牧される。冬期には、ゲルキャンプは解体され、ゲルキャンプ場を保管させている夏営地を遊牧民が管理する以外はほとんど関わっていない。

そして4月初めに春営地に移動する。5月に入ると馬、牛、ラクダの子が次々と生まれてくる。子牛は春営地から遠く離れた放牧地で生まれて、母やほかの群れと一緒に行動する。ウギー郡の遊牧民は、馬を数日間、春営地に戻さないで自由に遊動させるため、馬の子の誕生に気づかないことがある。ヤギの毛を刈る作業も同時に行われる。

この時期に小型ゲルキャンプの経営者がウランバートル市から訪れ、ゲルキャンプを設置する場所を遊牧民と一緒に話し合った上で決め、ゲルキャンプの組立作業が行われる。また、外国からゲルキャンプを体験しにくる観光客の数やスケジュール、体験プログラムについて話し合う。寒い冬を越した馬や家畜の様子をみて、乗馬に利用する馬とゲルキャンプに訪れる観光客の数を合わせて、冬越しに疲れた細い馬を乗馬に利用せず他の遊牧民の馬を利用するなど遊牧民の間で話し合っただけで決めるなど、ゲルキャンプを経営する人にとって大切な時期になっている。

6月になると夏営地に移動する。夏営地では、子羊や子ヤギと子牛がゲルキャンプ周辺で草を食べるようになる頃、羊やヤギの搾乳が始まり、羊とヤギの子はゲルキャンプ周辺で、母は離れた場所で放牧される。さらに6月から7月はじめにかけて、羊毛を刈り取る

作業が始まり、8月はじめごろには終わり、フェルト作りがはじまる。7月から9月まで乳製品は夏営地で加工され、冬季用に保存されることから、この時期にゲルキャンプに宿泊する観光客にとってモンゴルの食文化を体験できる絶好のチャンスとなる。9月初旬は秋営地に移動し、厳しい冬に備えて、家畜に体力をつける作業をおこなったり燃料用の畜糞を集めたりする忙しい時期である。10月から11月の間に、冬営地に移動し、厳しい冬が始まる。

地方によっては、冬営地や春営地に対しては所有する証明証が交付されているが、現地の調査地のウギー郡では、設置する場所に対する権利の文書化は行われていなかった。アラハンガイ県ウギー郡における季節ごとの牧地利用と小型ゲルキャンプの実態を明らかにするため2010年の夏の間ヒアリング調査を行った。これによって各家畜のベースとなる放牧地の分布とゲルキャンプの土地利用を正確にマッピングすることができた(図16)。この図16から遊牧民地とゲルキャンプの分布、それ以外の5畜の放牧地の分布と牧地利用に大きな差異があることがわかる。夏には、遊牧民たちはウギー湖の平野部に集中して夏営地を設置する。その中心あたりにゲルキャンプが設置されている。

4.5-1 ゲルキャンプの営業期間

図17は、モンゴルにおける観光シーズンを示している。図17によれば5月から9月の間に外国人観光客がモンゴルを訪れるシーズンになっており、特に7月には外国人観光者の数が一番多く訪れていることがわかる。そのため、ゲルキャンプの営業期間は気候が安定している5月上旬から開始し、9月中旬にゲルキャンプの解体事業に入るのが一般になっている。

以下の内容はアラハンガイ県ウギー郡における現地調査よりまとめるものである。

ゲルキャンプの作業は大きく3つに分けられる。5月上旬から5月の中旬まではゲルキャンプ組み立て作業、6月から9月中旬までは本格的に観光客を受け入れ営業を行う、9月中旬から10月の間は、ゲルキャンプ解体が行われる（図18）。モンゴルの遊牧民は、日常生活用品を手に入れるためを家畜と製品を物々交換するため、遠く、都心部の人に畜産品や毛皮を売って日常品を得ていた。しかし、ゲルキャンプと遊牧民が協力して営業を行うことにより、遠くへ行かずに、肉や乳製品をゲルキャンプに提供するようになった。また、自分の生活を体験させることにより、利益を得るようになった。

ゲルキャンプにおいて遊牧民は、夏と秋は通常の場合、家畜からしぼったミルクを原料とする自家製の乳製品、冬と春は家畜の肉に依存している。図18で示したように、2月から3月には羊や山羊の出産が始まり牧畜の作業が本格的に始まる。3～4月に家畜の出産が終わるとゲルキャンプの組み立て作業が始まり、その間、年間に春と夏に2度の毛刈り、5月上旬に子牛の出産と乳搾り作業が重なる。ウギー湖の遊牧民は、6月から9月中旬までのシーズンは、乳搾り、馬の慣らし、乳製品の加工、子馬の出産、フェルトづくりなどの作業が重なっており、本格的な遊牧民生活を体験できる時期である。

地元の遊牧民は、冬期に肉を中心とした食生活で過ごすため、夏营地では原則的として肉を食べない。6月中旬は馬乳酒を発酵させる時期である。モンゴル馬の乳は、乳糖に富み、アルコール醗酵により馬乳酒ができる。馬乳酒はアルコール分が少なく、ビタミン類

を豊富に含んでいる。そのため、子供から老人までが食事代わりに飲む。モンゴルゲルのドアのすぐ左側の壁面にフフル（牛革製の袋）がつるしてあり（写真 32）、この中に馬乳酒を入れて木の棒で 2 日間から 3 日間攪拌すると馬乳酒が出来上がる。遊牧民は、生乳を火で加熱濃縮しながら、表面にできる乳川を 1cm 以内の厚さにしてウルム（クリーム）を作る。そのウルムを加熱してシャラトソ（モンゴルバター）を作る。また、生乳でタラグ（ヨーグルト）、ビヤスラグ（酸凝固チーズ）、アールツ（軟質チーズ）、アーロール（硬質チーズ）、ツツギー（発酵クリーム）などを作るほか、馬乳酒を蒸発してつくるシミーンアルヒ（蒸留酒）を作る。このように夏季は厳しい冬を乗り越えるために乳製品等が加工・製造され、食料を備蓄する大事な時期である。9 月中旬から 10 月の間は、ゲルキャンプ解体が行われると同時に、10 月末の羊の交尾など、夏のわずかな期間を除いて、ゲルキャンプの経営と遊牧民の冬の準備を整える忙しい時期が終わる。

4.5-2 ウギー湖周辺のゲルキャンプサイトの分布と特徴

遊牧民は、その土地の地形にみられるさまざまな特質を利用しながら四季を通じて移動循環することによって家畜を飼育し、放牧厚を可能な限り小さくすることによって大草原をそのままに維持している。アラハンガイ県の遊牧民は四節ごとに、春・夏・秋・冬営地などの定期的に訪れる土地をもっていることが一般的で、例年気候の変動や家畜の頭数の状況にあわせながら春・夏・秋・冬それぞれの営地を決まったルートで巡回している。アラハンガイ県の草原牧地は分布面積や草生量においても良い牧地である。しかし、良い牧地の条件は、草生量だけでは決まらない。ウギー湖周辺は、春早く

ヤラグイが咲き、アギが出芽する牧地である。夏は涼しく、湖や牧草が豊かな牧地。秋は黄変しない草が散在する牧地。冬は風を避ける山々があり、乾草が残る牧地になっている。ウギー湖周辺の遊牧民は、季節や天候の微細な変化を感じ取り、牧草の草生量や栄養分、地形、湖や夏営地との距離など、様々な条件を判断し、その結果、家畜がよく肥えた放牧地を選び家畜の種類に合わせて放牧させる。地元住民の遊牧民が夏営地として利用する地域に小規模のゲルキャンプが位置している。ウギー湖におけるゲルキャンプも植生への負荷による環境劣化や地元住民への影響を避けるため、1カ所に長年とどまることをせず定期的に移動している(図19)。図19によると、2000年から2002年までウブルハンガイ県に、ゲルキャンプ場の営業を始め、その後2003年には、ゲルキャンプ場をアラハンガイ県のツェツェレレグ市の近郊に移動し2004年までゲルキャンプの営業を行い、2005年から現在までアランハンガイ県のウギー湖周辺にゲルキャンプ営業を行っている。又、遊牧民の移動によってウギー湖周辺に3回ほどゲルキャンプ場の移動した位置を図19で示している。

4.6 ゲルキャンプ場における一日の観光行動

表6では、ゲルキャンプでの観光者の1日の行動を示している。

ゲルキャンプ場では地域の地元住民とゲルキャンプの経営者が協議して、資源管理、安全確保、地域振興のためのルールづくりを行っている。実際の乗馬では常に危険が伴うものである。たとえ遊牧民が飼いならしている馬であったとしてもツアーに参加する観光客にとっては初めての乗馬体験であることも多いので、鞍がゆる

んだり、馬の後ろを通る際に蹴飛ばされたりすることがよくあり、最悪の場合には骨折事故に繋がることも起こり得る。そこで下記の安全対策を、遊牧民と通訳者の間で共有している。図 20 では乗馬を体験する観光客のために 3 つのルートを作っている。初めて乗馬を体験する観光客をまず、ゲルキャンプ周辺を回るルートをつくり、馬をゆっくり歩かせながら乗っている観光客を馬に慣らさせる。この際に、馬を乗る時のコツを教え、左右に曲がる際にあぶみをどの方向に向けるかなど馬を乗る方法を教える。観光客がある程度、馬を乗れるようになったら遊牧民のガイドが馬に乗っている観光客から離れ、用意した別の馬で観光客の後ろから様子を見ながらついて行く。観光客が馬を乗れるようになったら、ルート 2 に変更し、ゲルキャンプ場から離れたルートで乗馬ツアーに参加させながらゆっくり走る。観光客が乗馬ツアーに慣れてくると本格的なルート 3 にし、長距離乗馬を行う（表 7）。

ルート 3 に観光客を参加させる際にはまず、出発する前に、乗馬ツアーに参加する観光客の体調や馬の状態を確認する（乗馬中も確認する）。乗馬する観光客の服装（靴、ジャケットなど）を点検し、馬が驚くような派手な服装の着用を避けてもらう。乗馬中の観光客の様子をチェックしながら（必要であれば休む、もしくは戻る）、安全なコースの選択をする（どうしても、危険な箇所を通過する必要がある場合は、サポート体制をしっかりとる）。また、馬の走るペースを急がせず、ゆっくりとしたペースになるようにコントロールする。万が一、馬から落ちた場合は、むやみに体を動かさず、容態の確認後、最低限の応急処置を行う（救急箱を常に持参）。必要であれば、病院に連絡する（常に連絡が取れるように無線を持参）。また、川の

増水等により通常のコースが通行できない時期がある。コースの状況は天候や季節によって大きく変化するので、それに対応してコースやトピックを変更することが必要となる。主催者側でツアーの時間を3時間と決めていても、客の都合により短くしたり長くなったりすることがある。対応できる複数のコースとガイドンストピックを準備しておくことが必要である。

アラハンガイ県で催行可能なゲルキャンプツアーのうち、ガイドン付き乗馬ツアーについてはまず、テーマとしてこのツアーを通じて参加者に伝えたいことをウギー湖と自然の素晴らしさとゲルキャンプの経営者と遊牧民の間で決めている。ツアーのスケジュールと主要なガイドンはまず、9時から9時15分までは遊牧民ガイドと乗馬に参加する観光客の自己紹介、乗馬の注意、トイレを済ませたこと、脛あて、鞭、鞍などの装備の安全を確認する。9時30分から9時50分には近くの丘に登りオボーに行き、そのガイドンを行う。実際に時計回りに3回まわる。また集落を見降ろししながら地域の地形、放牧地、冬営地などを話す。10時から10時30分には、ウギー湖に行き、遊牧民にとって湖が如何に大切か説明する。そのあと馬にのったままでの周辺を走る。10時40分から11時には、山の近くの羊と山羊の群れをみに行き、五畜やについて、活用法などを含めてガイドンする。11時10分から11時30分までは、ゲルを訪問し、遊牧民と協力して、馬のロープワーク、牛糞の利用方法、ゲルでの作法、仏壇の参り方等をガイドンし、参加者に茶か馬乳酒を飲んでもらっている。11時40分から12時の間は、乗馬の初心者には基本的に引き綱で移動するが、帰路には希望に応じて独りで乗馬してもらう。ゴールのゲルキャンプ場前広場に近い場所でツアー

を締めくくる。地域の環境問題を話し、参加者から感想を聞く。

4.7 小型ゲルキャンプ場の土地利用に関する権利関係

以下の内容はモンゴル自然環境観光省に対するヒアリング調査および同省のデータによりまとめたものである。

小型ゲルキャンプ場の場合、ゲルキャンプを経営するために一定規模の土地を利用するにあたり法律上の土地利用権が必要である。それを取得するためには、希望者（ゲルキャンプの経営者）が一定の条件を満たして地方自治体である県に申請し、認められた場合に利用が許可される。また、ゲルキャンプ場に関わる土地利用権の契約期間はゲルキャンプ場の規模によって異なっている。本論文で分類した大型ゲルキャンプ場の場合、契約期間は最長で60年間、小型ゲルキャンプ場の場合は、遊牧民の移動によって場所が変わることから最長で20年間となっている。契約前にゲルキャンプ用地の設計図を国の機関に提出し、審査を通過した後、土地利用申請を現地の郡役所に提出する。そのため、一定の土地を利用する使用料を支払わなければならない。申請が承認されると、ゲルキャンプの経営者（土地利用者）と県知事との間で土地利用に関する契約が結ばれる。その契約には、ゲルキャンプ場の設置期間中の土地利用に関する諸条件、契約期間終了後の原状復帰条件などが書き込まれている。土地利用にあたっては、地元住民との共通理解や自然環境に配慮する義務が、ゲルキャンプの経営者に課せられている。また、ゲルキャンプの設営地を含め、モンゴルの土地所有権は、牧草地、政府による公用地を除き、モンゴル国民のみが保持している権利である。

モンゴル自然環境観光省の報告書 2010年によると、小規模ゲルキ

キャンプの敷地内に分布するゲルや建物が設置された敷地面積はゲルキャンプ総面積の約 6%を占めているに過ぎない。つまり、ゲルキャンプの敷地内で利用されておらず、自然のままであるという土地が全体の約 94%を占めている。これはゲルキャンプ場の設置に関する条例が防火対策、静かな環境の保持、ゲルキャンプの宿泊客の快適性の向上という目的から、ゲルとゲルの間の距離を 5m 以上に保つよう定めていることが背景にある。したがって、小型ゲルキャンプ場に利用される規模のゲル（5 ハナタの大きさ）の周囲からそれぞれ 2.5m 以上離れて設置しなければならない、計算上は 1 つのゲルの敷地とそれを含む用地全体の面積が 121m²になり、ゲルの平均敷地面積の 4.3 倍の用地が最低限必要である。このようなことからゲルキャンプ場で利用されていない敷地面積が多いということは自然への影響が少ないということを示している。

4.8 小型ゲルキャンプ場のステークホルダーによるプログラム企画

下記の内容は現地調査により明らかになったものをまとめたものである。遊牧民が主体となるゲルキャンプ場の体験プログラムの計画手法について、その役割、観光資源の探し方、ツアーのつくり方、効果的なガイドンス技術、それらの評価について説明する。

モンゴルのアラハンガイ県にあるウギー郡に住む遊牧民は、現在、ゲルキャンプ場経営者と共同で、地元住民主導型の観光ツアーを行っている。アラハンガイ県に住む遊牧民は、以前より、その地域には多くの資源があるにも関わらず、遊牧民がその価値に気づかず、過放牧を行っていたことを問題視しており、遊牧民が直接ゲルキャンプの経営に関わることで、地域の環境保護、地域住民の経済安定

を目指した。ゲルキャンプの経営者は実際に外国人観光客を現地に連れて行き、それに地域の遊牧民を同行させた。これがきっかけで、遊牧民が集まり組織をつくり、組織運営の指導、ガイドの指導など行ってきた。

現在は、ゲルキャンプの経営者の主導で遊牧民の組織の管理運営や、ツアーが行われ、現地のライフスタイルなど遊牧民の観察ツアーが人気となっている。また、彼らは観光客のコメントから、自分たちの地域文化の価値にも気づき、乗馬や乳製品加工、ものづくり体験プログラムなども開発し、国内外からの宿泊をとまなう観光ツアーも実施し、持続的な地域振興を目指している（写真 33）。遊牧民同士でゲルキャンプツアーと成り得る観光資源を出し合うことで、地域の資源の価値に遊牧民たちが気づく（表 8）。小型ゲルキャンプ場の経営者が加わり、その価値について遊牧民の方々に気づきを与えながら話し合いをしている。ウランバートル市からアラハンガイ県における小型ゲルキャンプに観光客を送る旅行社がその役割を担い、共同でゲルキャンプツアーを開発している。地元の遊牧民がゲルキャンプツアーガイドとなり、旅行社やゲルキャンプ場の経営者が、現場では通訳ガイドの役割を担うという、両者の合意形成後にゲルキャンプツーリズムを実施している。ゲルキャンプ場の経営者と遊牧民たちの話し合いにはで例えどんなものでも、観光資源と成り得ると考えられるものを出し合う。例えば、湖、放牧地、家畜、ゲル、食事などできるだけ多くのものを出し合う。様々な地域の行事、習慣など幅広く観光資源を定義する。この話し合いは、観光資源についての情報交換、確認作業をする良い機会である。そのため、決して相手の意見を否定することなく、多く書きだすことに集中す

ることが大事である。話し合いで挙げられた観光資源の中から、1つを選び、時間をかけて共に調査し、情報を集める。方法として、ひとつ対象物を見つけたら、それについて各々が知っている知識を出し合うことである。例えば、放牧地の草を1つとってみても、植物の名前、咲く時期、葉としての効用、他の生き物（昆虫、野生動物、家畜など）、伝説、環境問題など、その放牧地の背後にある様々な情報を得ることができる。その後、現場で集めた情報をカテゴリーに分けて整理する。例えば、ゲルであれば、遊牧民の価値観、知恵、ゲルのつくり方や材料、訪問時のマナーなどのカテゴリーで整理することができる。さらにウギー湖周辺の花や渡鳥であれば何月にみられるのかスケジュールに書き込んでいくとゲルキャンプツアーの計画づくりに役立つ。アラハンガイ県のウギー郡におけるゲルキャンプ場の遊牧民の生活体験ツアー計画においてはガイドンスプログラムづくりが最も重要な部分となっている。ゲルキャンプツアーと一般の観光ツアーとの大きな違いは、「自然環境と文化の保全に貢献する」という明確な目的がある。そこでガイドンスプログラムの中でテーマを観光客に確実に伝えることが大切になっている。一般的な多くのツアーは、「湖があるから、釣りを体験させよう」、「馬がいるから乗馬をさせよう」という流れでプログラムが作られている。これでは、ツアー参加者に伝えたいメッセージが伝わるはずがない。地元住民のガイドがガイドンスを行うことにより、ツアー参加している観光者に「気づきを与える」ことが重要であり、それがゲルキャンプツアーの核の部分となっている。

以下の内容はアラハンガイ県ウギー郡に2009年6月から2012年7月の間に実施した現地調査によりまとめたものである。

アラハンガイ県の地域住民の観光への関わりとしては、ツアーの柱となる遊牧民の生活の素晴らしさを伝えるために、その地域を良く知る地域住民自らが観光客のツアーガイドとなり、観光客に対してガイドンスをしている。観光客が遊牧民のゲルを訪れた際、その地域で先祖代々守られてきた自然、文化、そこに住む人々の価値観や知恵を体験やガイドンスを通して地域住民が伝え、観光客に「気づき」を与えられることがゲルキャンプのツアーの特長である。

まず観光客がその地域の価値を知ることで、地域の環境や文化に配慮した責任のある行動をとるようになる。また、地域住民もツアーガイドとして関わることで、自分たちの地域の価値を再認識し、誇りを持ち、伝統的文化や自然資源の保護に積極的に関わるようになる。そうして観光客のツアーを案内する遊牧民が環境や文化に配慮する意識をもって適切にツアー参加者をコントロールすることにより、環境に対する負荷を軽減できる。さらに遊牧民がツアー参加者に対して、良質で価値あるガイドンスや体験を提供することで、集客力を向上させ、競争力のあるツアー商品をつくることができる。地元における日常、すなわち遊牧民のライフスタイルそのものがゲルキャンプ場における「観光資源」として活用できる。ツアー開発は、その地域に埋もれている（地域住民がその価値に十分気が付いていない）資源を再度掘り起こすことから始まっている。例えば、モンゴル人が馬に乗って放牧に行くことは日常であるが、外国人観光客にとっては全く未知の体験である。同様に健康に良いといわれて白い馬の乳を生で飲むことも、乳搾り後の乳製品を作る過程も、すべてが非日常である。遊牧民のライフスタイルが観光資源となり、モンゴル各地にはその価値ある資源が豊富にある。

第 5 章 モンゴルにおける小型ゲルキャンプ場の意義

5.1 小型ゲルキャンプ場における地域資源の活用

アラハンガイ県の小型ゲルキャンプ場の観光資源は、観光に活用できる資源はその地域に住む遊牧民の日常であることがわかった。たとえ地域住民にとって日常であったとしても、ゲルキャンプツアーがターゲットとする観光客にとっては非日常であることである。ゲルキャンプツアーの開発は、遊牧民がその価値に十分気が付いていない資源を再度掘り起こすことから始まる。例えば、遊牧民が馬を乗って家畜を放牧することは日常であるが、外国人観光客にとっては、未知の体験である。乳製品の加工やゲルの組立てをすることも、ゲルに入る時に右足から踏み入れるルールも、すべてが非日常である。アラハンガイ県にはその価値ある資源が豊富にある。小型ゲルキャンプ場の土地利用はどのような地域であっても強い誘客力が発揮できる。リゾート地、別荘地など、観光資源に過度に依存した従来型の観光とは異なり、小型ゲルキャンプでは、地元地域の生活を商品化し、観光客を誘致している。

小型ゲルキャンプ場は、従来型の観光資源をもたない地域であっても、地域固有の自然や伝統文化、生活スタイルなどを生かしたプログラムを商品化することで、強い誘客力を発揮している。小型ゲルキャンプと一般的な観光キャンプとの大きな違いは、遊牧民の生活場所とゲルキャンプ実施場所が同じ場所であるため、遊牧民の魅力を発見し、体験できるようになっていることである図 21(写真 34)。観光客は、ゲルキャンプでの体験を通して、自然や遊牧民の生活スタイルや伝統、文化に興味を抱き、それらの保全に対する意識が芽

生えることが期待できる。このような意識の変化が、ゴミの削減や分別、エネルギーの節約など、日常生活の中でのこまめな環境保全につながる。つまり、ゲルキャンプツーリズムによる自然環境保全とは、ゲルキャンプを訪れる観光客の日常生活の中での環境保全に対する意識を高めることである。

同様に、ゲルキャンプツーリズムは、地域資源の保全に対する地元住民の意識を高めることにもつながる。ゲルキャンプを体験する観光客が地元の素材に触れ、それらに関する知識を得ることを通じて、興味・関心を抱く等の反応を、地元住民が目当たりすることで、地元の自然や遊牧文化の価値を再認識する。さらに地域の自然や文化を大切にし、今後も保全していきたいという意識の芽生えと行動につながっている。ゲルキャンプ場が各地で展開され、ゲルキャンプ場の利用経験者が増加することによって、より多くの人々の意識改革と地域の自然環境に配慮した行動につながる（図 22）。

5.2 小型ゲルキャンプの運営による経済効果

モンゴルの総人口に占める遊牧民の人口比率が低下している原因の 1 つに、遊牧民の現金収入の少なさがある。遊牧民の人口比率の低下を抑制するために遊牧民が自らゲルキャンプの経営に関わり乗馬ツアーガイドとして遊牧民を雇用するなど、ゲルキャンプツーリズムに参加し、利益を得る仕組みづくりを通じて、遊牧民の現金収入を増やすことができる。小型ゲルキャンプ場による地域活性化の実態を探るため、アラハンガイ県・ウギー湖で 2012 年に実施した現地調査結果にもとづき、ゲルキャンプ経営の費用対効果に着目しながら、経営費の使用内訳について検討する。

現地調査を実施したアラハンガイ県ウギー郡の小型ゲルキャンプの場合、2010年には年間397万8598トグリク（モンゴル銀行為替レート1円＝15トグログ）の費用がかかっていた（図23）。これは主に4種類（ゲルキャンプ場の開始準備、活動費用、解体、保管）の支出から構成される。

まず、ゲルキャンプ地の開始準備（設営）の支出には、ガソリン代、ゲルの組み立て代、食事代、運転手代などの費用が含まれる。図24に示したように、開始準備の段階で全支出の11%つまり42万3,150トグリクが支出され、うち14万6,250トグリク（開始準備にかかる支出の35%）はガソリン代、7万8,000トグリク（18%）はゲルの組み立て費用、6万2,400トグリク（15%）は食事代、3万9,000トグリク（9%）は運転手代に使われたことがわかる。つまり小型ゲルキャンプは大型ゲルキャンプ場と違って、組立や移動するなどゲルキャンプの営業以外の支出が出ている。

次にゲルキャンプ場の営業中の費用として合計202万4,360トグリク（全支出の51%）がかかった。ゲルキャンプでの食事代に71万5,000トグリク（営業中にかかる支出の35%が使われ、以下、発電機の燃料・オイルに13万トグリク（6%）、食事を作る人（料理人）への給与として19万5,000トグリク（10%）、遊牧民地へ行く観光客の交通費が6万5,000トグリク（3%）、遊牧民へのお土産代として6万5,000トグリク（3%）、薬代に1万9,500トグリク（1%）、乳製品に1万9,500トグリク（1%）、羊に3万2,500トグリク（1%）、道路の手数料として1万9,500トグリク（1%）、通訳代が60万6,060トグリク（30%）、ゲルキャンプからカラコルムへ行く交通費で3万9,000トグリク（2%）、観光客の乗馬する費用が5万3,300トグリク（3%）、

ヘルパー代で 6 万 5,000 トグリク (3%) に使われた (図 25)。

さらにゲルキャンプの解体・保管の支出として合計 61 万 1,650 トグリク (全支出の 15%) が使われた。14 万 6,250 トグリク (解体・補完費用合計の 53%) は交通費 (ウランバートル市からゲルキャンプへ行くガソリン代)、食事代に 6 万 2,400 トグリク (10%)、ゲルや器具の解体作業代に 7 万 8,000 トグリク (13%)、ゲルキャンプサイトの警備員に 32 万 5,000 トグリク (53%) 使われた (図 26)。

最後にその他の費用にはワゴン車のレンタル費用 (67 万 2,438 トグリク)、運転手代 (13 万トグリク)、ジープ代 (11 万 7,000 トグリク) などが含まれる。これらの費用の合計は 91 万 9,438 トグリク (全支出の 23%) になっている (図 26)。

なお、全支出のうちで地元住民 (遊牧民) に対して 83 万 3,300 トグリク (全支出の約 17%) の利益が還元されていたことがわかる (図 27)。

現地調査の際に訪れたウランバートル市近郊に位置する大型ゲルキャンプ場の場合は、地元への経済効果がほとんど見られない。大型ゲルキャンプ場では、レストランやホテル、サウナ、インターネット環境などさまざまなサービスを提供しているが、そこには地元の遊牧民がほとんど関わっていない。大型ゲルキャンプ場は、小型ゲルキャンプ場と違って、地元の遊牧民から肉や乳製品などの食材を購入せず、ゲルキャンプ場で使われるものを全てウランバートル市から取り寄せているため地元住民に経済的な利益を得ていない。モンゴルでは、遊牧が観光資源であるにもかかわらず、大型ゲルキャンプでは宿泊している観光客に供される朝食のチーズやバター類は外国製である。外貨を獲得するための大型ゲルキャンプにおいて、

明らかに不要なまでに外貨を支出している。大型ゲルキャンプの観光資源は、ゲルキャンプ場内に設置されている高級料理のレストラン、サウナやスパ、ビリヤード、スポーツ施設、ゴルフ場などになっているため、遊牧民の生活や文化を観光資源としていない。

小型ゲルキャンプでは地域住民がゲルキャンプの運営に参画することはもちろん、そのみの関わりには限定されない。ゲルキャンプツーリズムにより観光客が増えれば、ゲルキャンプツーリズムを提供する観光会社、その案内をするツアーガイド、観光客を泊めるゲルキャンプ、食事を提供する地域住民、ゲルキャンプを案内するドライバーなどが必要となり、これらのサービスの提供にともない地域経済への波及効果がある。

ただし、自然環境や文化が存在するだけでは観光客が訪れることはなく、地域経済への恩恵も期待できない。地域振興をその効果・便益の1つとして掲げるゲルキャンプは、遊牧民の生活を体験することを通して、観光客から収益をあげることが運営の基本となっている。つまり、ゲルキャンプツーリズムとは行政からの経済的支援を受けて運営されるものではない。またゲルキャンプは、直接的な金銭面での利益を得る地域住民だけでは成り立たない。地元住民のみが自然を保護していても、観光客が環境を破壊すれば、持続的な観光活動は実現されない。観光客にゲルキャンプツーリズムを理解してもらい、様々な形で参加をしている。小規模ゲルキャンプでは地域住民が参加することは不可欠である。ゲルキャンプツーリズムにより観光客が増えれば、それを提供する観光事業者、観光客を泊めるゲルキャンプ、その案内や食材を提供する地域住民、ドライバーなど地域経済への波及効果がある。

5.3 小型ゲルキャンプ場の開設による地域活性化

ゲルキャンプツーリズムではゲルキャンプの経営に地域住民が一員として参加することはもちろんであるが、それだけの関わりに終わってないことを現地調査でわかった。ゲルキャンプツーリズムにより観光客が増えれば、それを提供する観光会社、その案内やガイドランスをする地元のツアーガイド、観光客を泊めることや、食事を提供するゲルキャンプ、ドライバーなど地域経済への波及効果がある。現地調査の際には、ゲルキャンプツーリズムでは地域住民は重要な関係者であり、積極的に関わることが期待される。ただ、特殊な自然環境や文化があるだけでは、観光客が訪れることはなく、地域活性化も期待できない。地域活性化をその効果や便益の1つとして掲げるゲルキャンプツーリズムは、行政からの経済的支援で運営されるものではなく、ゲルキャンプツアーを通して観光客から収益を活用することが基本となっていることを現地調査でわかった。そのためにも、ゲルキャンプが母体となり、しっかりとした仕組みづくり、ルールづくり、ガイドの人材育成などを行う必要がある。

地域活性化に向けて地域住民（遊牧民）自身がゲルキャンプ場の経営に関わる場合、その経営活動は地域交流のための「共同社会活動」となる。モンゴルのグリーンツーリズムはゲルキャンプ場を中心として、地域住民、ゲルキャンプの経営者などの多様な人々と連携して推進しており、「共同社会活動」を基本方針に地域住民が観光客のツアーを企画・実施していることが現地調査でわかった。現地調査では、ツアーの多くは住民参加により実施され、参加料金も非常に低額に設定されている。ビジネスとしての観光振興よりも、地域の自然をみつめなおし保全するとともに、観光客との交流を通じ

て地域への誇りを育み、地域の活性化につなげていくことに重きを置いていることがわかった。そして、ゲルキャンプと遊牧民の交流は、人口が減るばかりでコミュニティの維持が難しくなっている農村社会にとって、新しい収入源とゲルキャンプ場の経営に関ることにより雇用が生まれることであるため「地域活性化」につながる。

「共同社会活動」は、農村地域での共同生活を営む上で不可避免的に要請される共同作業であり、いわゆる「共同出役」のような活動を意味する。そして地域社会的な活動は、人口減少や社会的接触の希薄化にみられるような地域の社会的活性の弱体化に対して、地域住民が社会的に新たに結集する機会を創造する。本研究で問題とするゲルキャンプ場と地域住民の主体性の発揮の場としての「住民参加活動」は、住民同士の交流活動として、「共同社会活動」のような役割を果たすとともに、地域の社会基盤を維持するための「地域活性化」に貢献する。

現地調査で訪れたウランバートル市近郊の大型ゲルキャンプ場では、観光対象となる文化が過度に商品化され、その真正性が失われる可能性がある。大型ゲルキャンプが観光収入を確保するために、13世紀のモンゴル帝国の風景を再現したリゾート施設などを定期的に演じることによって文化の真正性が失われかねない。観光客を一度に収容可能な大型ゲルキャンプ場を営むには、莫大な資金が必要とする。また、大型ゲルキャンプ場の開発後に立派なホテルやゲルが建ち並び、観光客があふれる様子を見ると、地元の求めていた地域の発展が成功したようにみられるかもしれない。しかし、観光化による利益が地元ではなく、企業を介して外へ還流している現状がある。乳製品や肉製品、毛皮製品などいわゆる畜産物についてあ

らゆる角度から生産化し、観光資源として活用しなければ地元の地域活性化にならないのである。小型ゲルキャンプの観光商品を進めることは、モンゴルにおいて圧倒的に不足している都市と地方における遊牧民との産業的・文化的つながり、意味的連関を確立することにもなる。

したがって、大型ゲルキャンプ場の弊害として指摘されている主な内容を踏まえれば、小型ゲルキャンプ場には、観光による環境への負荷を軽減し、観光地の文化を守り、観光地の人々の伝統的価値観を尊重し、観光が大規模な投資に頼らずビジネスとして成立し、かつその収入が適切に遊牧民に還元されるような地域活性化になる仕組みが求められる。

ゲルキャンプ場をモンゴルで持続可能なものにできれば、牧畜業をはじめとした第一次産業と販売サービス主体の第三次産業、雇用促進、環境保全、地域活性化などの効果は期待できる。また、農村の住民がかもし出す特徴ある伝統性、有機的連関をもったゆっくりした成長がみられるグリーンツーリズムのように、目の前だけの効果だけをみるのではなく、時間をかけて進めることが、ゲルキャンプツーリズムの発展を促すのではないだろうか。

5.4 小型ゲルキャンプ場における自然環境の保全

ゲルキャンプの実施地域では、やはり話し合いにもとづきゲルキャンプの関係者と遊牧民それぞれの立場から協力して環境保護を実施している。ウギー湖地域の乗馬ガイドをする遊牧民のヒアリング調査の結果、表9のようなルールをゲルキャンプの経営者と参加する遊牧民の間に設定していることがわかった。自然や文化などの観

光資源において、ルールのないままゲルキャンプに多くの観光客が来ると、資源は劣化してしまい、その場所での継続的なゲルキャンプの実施が不可能になる。このため、ゲルキャンプの経営者と地元住民が話し合い、地域の現状、観光資源、課題、目標等を明らかにする作業を行っている。これにより、ゲルキャンプの経営者と遊牧民の間で地域に関する認識が共有されている。ウギー湖の地域でのゲルキャンプの経営者と遊牧民からなる関係者の 2010 年のワークショップでは、表 10 のような課題が明らかになり目標が設定されている。

以上のような話し合いを通じ、この地域のツアーは地域の課題を克服し、目標を達成しながら計画・実施されている（図 28）。

世界各地でのグリーンツーリズムの成功事例をみると、行政主導型のツーリズムよりも地域から草の根運動として進められた地域主導型のツーリズムの方が成功している。ただし地方行政は地域で観光分野が持続的に行われるための支援役、調整役として重要な役割を担う必要がある。例えば環境負荷や地域文化への負担を最小限にするためのガイドラインの策定やそれらの調査、地域ガイドの人材育成などが該当する。モンゴル自然観光環境省の自然保護対策では、環境負担を軽減する目的で環境保護区を設定し、環境保護に取り組んでいる。そのため、環境が保護される地域ではゲルを宿泊施設として利用する小型ゲルキャンプ場の経営許可は与えられているが、ホテルや娯楽施設などを建てるリゾート開発は禁止されている。

モンゴルの自然環境、動植物の保護に関しては古い歴史がある。ウランバートル市に位置するボグド山が、12 世紀から 13 世紀以来神聖な山として保護されてきた。現在のような自然保護区が設定さ

れるようになったのは 1778 年からで、環境保護地区は厳正保護区 (Strictly Protected Area)、国立公園 (National Park)、自然保護区 (Nature Reserve)、および 4) モニュメントの 4 つに分けられる (図 29)。環境保護地区は、2000 年の時点で合計 48 か所、約 20 万 km² が指定されており、各地に自然環境観光省所管の事務所を設置し、自然環境保護を行っている。また国内の湖沼は合計 11 か所がラムサール条約に登録されている。敷地数の 73.1% に、ゲルキャンプが分布し、場特別保護区の土地を利用している。モンゴルにおける特別保護区は 55 か所あり、その総面積は約 2.9 万 k m² (モンゴル全国土面積の 13.4%) である (モンゴル自然環境観光省特別保護区事務局 2010 年)。

第 6 章 結論

1990 年の民主化以前のモンゴル観光は、旧ソ連からの観光客しか訪れていなかったため、その限定されたターゲットに対応していた。そのため、その観光資源にもかかわらず未開発の状況に置かれていた。しかし 1990 年以降の民主化にともなう自由市場経済化の過程で、観光部門を独占してきた国営旅行会社が民営化されたことで、民間資本による観光資源開発が本格化し、旧ソ連以外の各国からの観光客が増加したことによってゲルキャンプ場も増えてきた。この論文では、新しいグリーンツーリズムのあり方としてのゲルキャンプの誕生から現在に至るまでをみてきた。ヨーロッパと日本のグリーンツーリズムの展開をみていくことで、ゲルキャンプツーリズムは、地域資源を活かし、地域の活性化だけでなく、自然保護にもつながる持続性のある観光形態であることがわかった。小型ゲルキャンプにおける普段できない体験は、外国人観光客にとって、魅力的であり、地域の遊牧民にとっても地域の再発見、失われつつある文化の継承にもつながる。小型ゲルキャンプの観光資源の創出は、ゲルキャンプツーリズムを成功させるための重要なポイントであるといえる。しかし、モンゴルの地方における小型ゲルキャンプのもつ問題としてまず、季節性の問題が挙げられる。ゲルキャンプツーリズムは構造的に夏に観光客が偏っている。6 月から 9 月にかけて、つまり夏の季節に集中し、冬から春にかけてゲルキャンプのほとんどが営業を行われていない。理由は、モンゴルの冬は厳しい寒さであり、夏同様のゲルキャンプによった自然や地元の遊牧民生活を観光資源とする体験型の観光には向いてないからである。

モンゴル自然環境観光省としてもこの課題に取り組んでいく認識

をもっている。2007年より冬季のラクダポーラなどの観光イベントが行われたが、部分的なものであり体系だった政策はいまだ未整備である。ゲルキャンプツーリズムを促進していく上で季節性をどのように克服していくかが課題となってくる。また、都市部周辺のリゾート地における大型ゲルキャンプによる利益が公正に配分されていないことがヒアリング調査でわかった。しかし、モンゴル全体でそういった状態が起こってない。地域同士で連携して小型ゲルキャンプにおける観光を成功させているところもある。

アラハンガイ県・ウギー郡のホト・アイルから成り立つゲル組織は互いに連携をとって、ゲルキャンプの運営を行っている。例えば、ある遊牧民で乗馬する人数が多くなると、他の遊牧民に回すようにしたりして、利益が常に均等に配分できるように運営が行われている（表 11）。このアラハンガイ県で行われている小型ゲルキャンプツーリズムは、正にモンゴル国が推進している、グリーンツーリズムの先進的地域として成立しているのではないだろうか。他の地域も互いに組織を作り、連携を取りながらゲルキャンプを運営していけば、環境の運営能力を超えるほど観光客が集中することがなくなり、利益が不当に配分されることもなくなるのである（図 30）。現在のモンゴルでは、植林や文化遺産などの自然的・文化的観光資源を自国の技術のみで賄うことができていないからである。そのため、アラハンガイ県のゲルキャンプの運営を参考としたガイドラインの作成も重要となってくる。

ゲルキャンプツーリズムは、単に利益を得ることのみをその目的としているのではなく、これを推進していくことで、モンゴルの自然・伝統文化を次世代に伝えていくことこそが、最も担うべき役割

であるといえる。とくに草原の生態系と遊牧文化は、モンゴルのアイデンティティの根本であり、これがなくなるとモンゴル観光の魅力は大いに損なわれる。自然と遊牧文化を継続的に守っていくための手段としてのゲルキャンプツーリズムは、大きな可能性をもっている。自然と文化を守るための観光、これこそがモンゴルにおける「持続的観光」のかたちといえるのではないか。

モンゴルにおける観光において、大自然とその自然に育まれた遊牧民の暮らしは、十分に活用すべき観光資源である。放牧の場所を一定期間毎に移動する遊牧は、草原という資源を保護しつつ人間が生きていく保全型の生活様式であり、持続可能な自然環境の利用方法の1つである。また、適度な放牧は、草原の生物多様性を高めるという研究結果もある。

現在、モンゴルの観光資源の多くが、自然と遊牧民の暮らしを題材に設定している。これらをゲルキャンプツーリズムの考え方で実施し、モンゴルの自然を守っていくために観光と自然保護をうまく関連づけることで、持続的な観光振興が可能となる。また、地元住民となる遊牧民とゲルキャンプが主体的に自然保護と観光の両面に関わることで、経済効果にもつながり、遊牧民の地域への誇りも生まれる。そのためには、ゲルキャンプツアーのテーマづくりが最も重要である。ゲルキャンプツアーの計画においてはテーマづくりがゲルキャンプのツアープログラムの核となり、最も重要な段階となる。ゲルキャンプツアーと一般の観光ツアーとの大きな違いは、自然環境と文化の保全に貢献するという明確な目的があるということである。ゲルキャンプツアーのプログラムの中でこれらのテーマを参加者に確実に伝えることが大切になってくる。モンゴルで行われ

ている一般的な観光ツアーは、湖があるから、釣りを体験させよう、馬がいるから乗馬をさせようという流れでプログラムが作られている。これでは、ゲルキャンプツアーに参加する外国人観光客にメッセージが伝わらない。そのため、ゲルキャンプのツアーガイドがガイダンスを行うことにより、ゲルキャンプツアーに参加する観光客に「気づき」を与えることが重要であり、それがゲルキャンプツアーの核の部分となるのである。観光客にそのメッセージを伝えるためにはテーマを作らなくてはならない。ゲルキャンプ場におけるテーマとは、ゲルキャンプツアーを実施するその地域や場所、観光資源に関して、遊牧民がターゲットとするゲルキャンプツアーに参加する観光客に最も伝えたいことである。

遊牧民はゲルキャンプツアーに参加する観光客に、自分の地域について、何を理解し、覚えておいてもらいたいかがである。一般のゲルキャンプツアーは、ガイドブックに載っている湖の深さや面積、山の高さや面積などの情報を集めて解説している。それらは基本情報として重要ではあるが、その情報によってゲルキャンプツアーに参加する観光客に気づきを与えたり、感動させたりすることは出来ない。ゲルキャンプツアーに参加する観光客が感動すれば、友人や家族を連れて再度参加することも期待できる。伝えたいテーマが、自然を守る、大切にすることが、モンゴル人の生き方や暮らし方であると設定するのであれば、その地域に古くから伝わる湖や草原にまつわる伝説、活用する生活の知恵、それらを守る人々の思いをゲルキャンプツアーに参加する外国人観光客にガイダンスし体験を提供することで、そのメッセージをゲルキャンプツアーに参加する観光客に伝えることが出来る。また、ゲルキャンプツアーのテーマが

決まると、実際に行うゲルキャンプツアーの内容を決めていくことができる。ゲルキャンプツアー内容の計画手順としては先ず、誰を参加者にしてゲルキャンプツアーを行うのか。つまり、モンゴル人の観光客か外国からの観光客、年齢層、大人もしくは子ども、親子など、できるだけ、具体的にターゲットを想定することで、準備すべきトピックや活動が明確となる。ターゲットに対して、何を伝えたいのかを明確にし、乗馬、ハイキング、バードウォッチング、ゲル体験、伝統の料理体験など伝えたいメッセージが同じものであっても、ターゲットが異なると、ゲルキャンプの活動の内容は異なる。

アラハンガイ県ウギー郡に住む遊牧民の観光への関わり方は様々だが、ゲルキャンプツアーの柱となる地域の素晴らしさを伝えるためには、その地域を良く知る遊牧民自らがゲルキャンプツアーガイドとなり、観光客に対してガイダンスをすることが大事である。しかし、遊牧民だからと言ってすぐに素晴らしいガイドが出来るわけではない。地域住民が、ただ道案内や情報を与えるだけのガイダンスをするのではなく、良質で、ゲルキャンプツアーに参加する外国人観光客に感動、心に残る思い出を提供することができるガイダンスを行わなければならない。外国人観光客がアラハンガイ県を訪れた際、遊牧民から、その地域で先祖代々守られてきた自然、文化、そして、そこに住む人々の価値観や知恵を体験やガイダンスを通して伝え、ゲルキャンプツアーに参加する外国人観光客に気づきを与えられるのがゲルキャンプツアーである。外国人観光客がその地域の価値を知ることで、地域の環境や文化に配慮した責任のある行動をとるようになる。遊牧民がゲルキャンプの経営に関わることで、自分たちの地域の価値に改めて気づき、誇りをもち、伝統的文化、

自然資源の保護に積極的に関わるようになる。ゲルキャンプツアーの地元住民のガイドが環境や文化に配慮する意識をもって適切にゲルキャンプツアーの観光客を担当することにより、それらの負荷を軽減できる。ゲルキャンプツアーガイドがツアーに参加する観光客に対して、良質で、価値あるガイドランスや体験を提供することで、集客力を向上させ、競争力のある観光資源をつくることができる。

遊牧民がゲルキャンプツアーガイドとして関わることで、新しい雇用を創出することができる。ゲルキャンプツーリズムが観光の主流になれば、モンゴルの人々が自然環境と文化を活かしつつ保全していくことにつながる。モンゴル各地において、それぞれの地域の自然と文化を活かしたゲルキャンプツーリズムが盛んになり、環境についての認識が深まることで、美しい自然と独特の遊牧文化が守られることを期待する。

参考文献

「モンゴル語文献」

Өгий нуурын экосистемийг хамгаалах төслийн судалгааны ажлын
тайлан Улаанбаатар хот 2006 х 67

ウギー湖におけるエコシステムの保護プロジェクト研究調査報告書
2006年 ウランバートル市 p.67

Ганбат 2007. Аялал жуулчлалын бүтээгдэхүүн. Улаанбаатар хот х 55

Ganbat 2007年. 「観光商品」 ウランバートル市 p.55

Д.Гантөмөр 2003. Аялал жуулчлалын Үндэс Улаанбаатар хот х 39

D.Gantumur 2003年. 「観光分野の基礎」ウランバートル市 p.39

Э.Гүрэмжав,Т.Дорж,М.Амартүвшин. 2007 Аялал жуулчлалын
маркетингийн менежмент Улаанбаатар хот х35

E.Guremjav,T.Dorj,M.Amartuvshin. 2007年 「観光分野におけるマー
ケティングマネジメント」 ウランバートル市 p.35

Л.Баясгалан 2010.Аялал рэкреацын чадавхийн иж бүрэн
үнэлгээ Улаанбаатар хот х164

L.Bayasgalan 2010年. 「ツーリズムレクリエーションにおける評
価」 ウランバートル市 pp.164

У.Эрдэнэтуя 2009. Монголчуудын байгаль хамгаалах уламжлал
Улаанбаатар хот х 56

U.Erdenetuya 2009年. 「モンゴルにおける伝統的な自然を保護す
る習慣」 ウランバートル市 p.56

Байгаль орчин, аялал жуулчлалын яам, тайлан 2002он (モンゴル自然環境観光省、報告書 2002年)

Байгаль орчин, аялал жуулчлалын яам, тайлан 2003он (モンゴル自然環境観光省、報告書 2003年)

Байгаль орчин, аялал жуулчлалын яам, тайлан 2004-2006 он (モンゴル自然環境観光省、報告書 2004-2006年)

Байгаль орчин, аялал жуулчлалын яам, тайлан 2007-2009он (モンゴル自然環境観光省、報告書 2007-2009年)

Байгаль орчин, аялал жуулчлалын яам, тайлан 2010-2012он (モンゴル自然環境観光省、報告書 2010-2012年)

Монголын үндэсний статистикийн хороо 2005он, Монгол Улсын статистикийн эмхтгэл 2006он (モンゴル国家統計局 2005年、モンゴル国総計年報 2006年, p. 192. p193)

Монголын үндэсний статистикийн хороо 2009он, Монгол Улсын статистикийн эмхтгэл 2010он (モンゴル国家統計局 2009年、モンゴル国総計年報 2010年, p. 192. p193)

Монголын үндэсний статистикийн хороо 2010он, Монгол Улсын статистикийн эмхтгэл 2011он (モンゴル国家統計局 2010年、モンゴル国総計年報 2011年, p.211.p221)

Монгол Улсын статистикийн эмхтгэл 2010-2012он (モンゴル国家統計年報 2011-2012年)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332,1-59 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332,1-59)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332,1-139 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332,1-139)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332, 1-845 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332, 1-845)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332,1-830 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332, 1-830)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332,1-831 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332, 1-831)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332,1-801 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332, 1-801)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332,1-803 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332, 1-803)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332,1-807 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332, 1-807)

Монгол Улсын Үндэсний төв архив ФА : х-332,1-59 (モンゴル国中央文書館 記番号 : X-332, 1-59)

Монголын сүм хийдийн түүхэн товчоон УБ.2009 р.803

ТОГТВОРТОЙ ХӨГЖИЛ БА АЯЛАЛ ЖУУЛЧЛАЛ 2006он р.86 (モンゴルにおける観光部門及び持続的発展、2006年 р.86)

Монголын Гадаад худалдаа, хөрөнгө оруулалтын газар 2007он (外国投資貿易庁 (FIFTA) 2007年)

Зам Тээвэр аялал жуулчлалын яам 2010он (モンゴル国土交通省 報告書 2010年)

Тусгай хамгаалалттай нутгийн удирдлагын газар 2012 (モンゴル観光環境省特別保護局 2012)

БНМАУ-ын УГСААТНЫ ЗҮЙ 1 1987 р.129(モンゴル民族誌,1987)

Улаанбаатар хотын захиргаа2010 2012 Уланбаатор市役所 2012
年

Монголын улсын түүх(5) 2003 (モンゴル史(5) 2003p.209

「日本語文献」

今岡良子 1985. 「人間と自然、そして放牧」. モンゴル研究会 No8
p27, 46

河村能夫 1991. 「農業活性化を考える基本的枠組み」. 農民協会.
p 9.

越智猛夫, 長谷川忠男 1981. 「食の原点」 出版社：第一出版(千
代田区) p. 172

小貫 雅男 1985. 「遊牧社会の現代・ブルドの四季から・」平
文社・印刷 p. 17

小貫 雅男 1985. 「遊牧社会の現代・ブルドの四季から・」平
文社・印刷 p. 48

小貫 雅男 1985. 「遊牧社会の現代・ブルドの四季から・」平
文社・印刷 p. 17

小貫 雅男 1993. 「世界現代史 モンゴル現代史」発行所：山川
出版社 p182

小池恒男 1992. 「地域農業・農村活性化の政策的条件」. 『農林業問
題研究』. 第 101 号, p 25.

富川 久美子 2007. 「ドイツの農村政策と農家民宿」 出版社：
農林統計協会. p. 172

宮崎猛 2002. 「これからのグリーン・ツーリズム」ヨーロッパ型
から東アジア型へ 出版社：家の光協会 p. 225

松村晴恵 1987. 「牧民運動と革命」. モンゴル研究会 No10 p. 10

風戸真理 2009. 「現代モンゴル遊牧民の民族誌」出版社：太洋会社

第 1 発行 p. 255

山口 2007 「モンゴル国のゲルキャンプ開発と景観保全」 経営政策論集 7(1)、87-103

山崎 光博, 大島 順子, 小山 善彦 1993「グリーン・ツーリズム」出版社: 家の光協会 第 1 号

「グリーン・ツーリズムの計画と実践」 地域経営の具体化に向けて : 地域リーダー研修テキスト 塾長 槍垣 鋭太郎 1997. p. 104

安達生恒 1981. 「過疎地再生の道」. 日本経済評論社. p 230.

横山秀司 2006. 「観光のための環境景観学: 真のグリーン・ツーリズムにむけて」. 出版社: 古今書院 p. 47

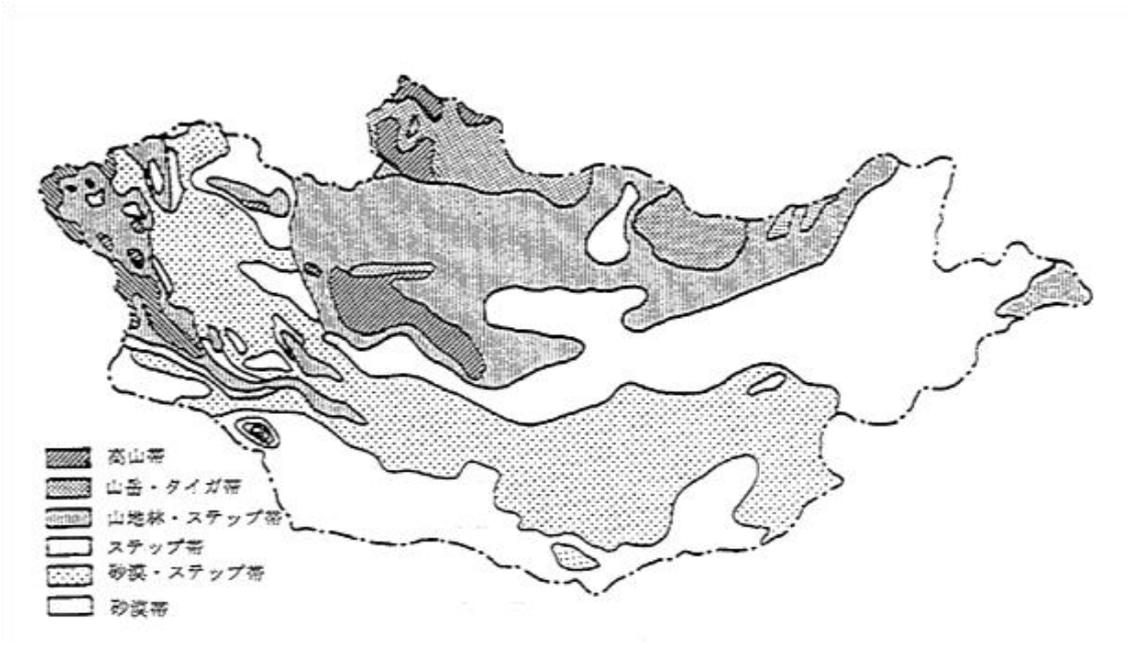


図 1. モンゴルの自然環境
 モンゴル自然環境観光省のデータより引用

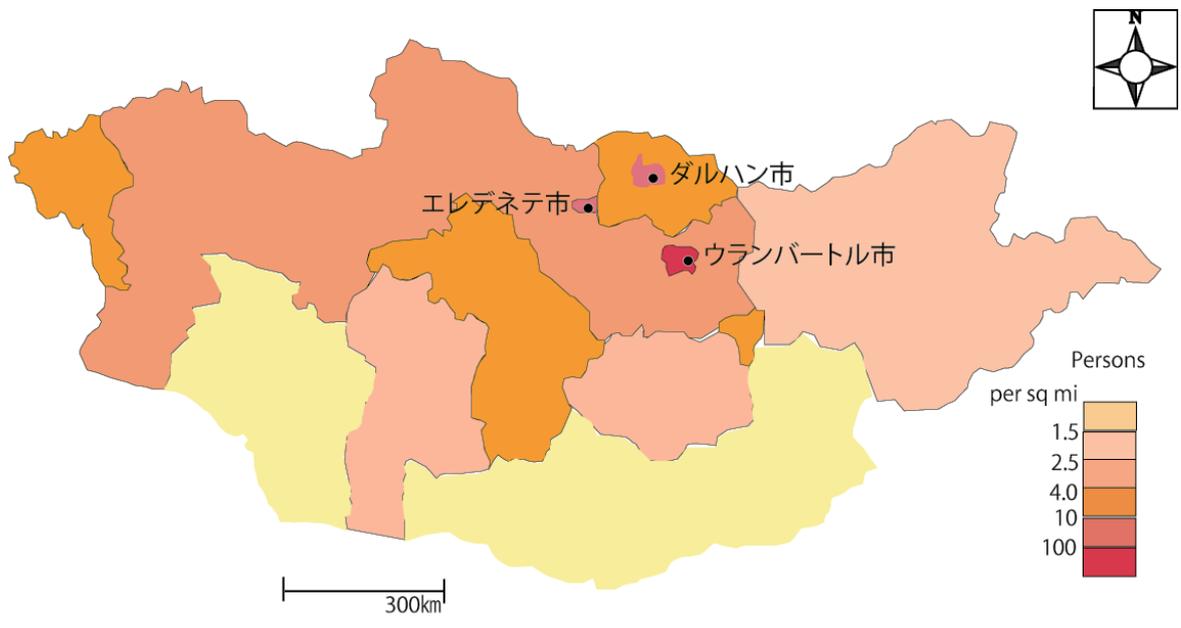


図 2. モンゴルの人口密度
 (Geographic Atlas of Mongolia2004 年より作成)

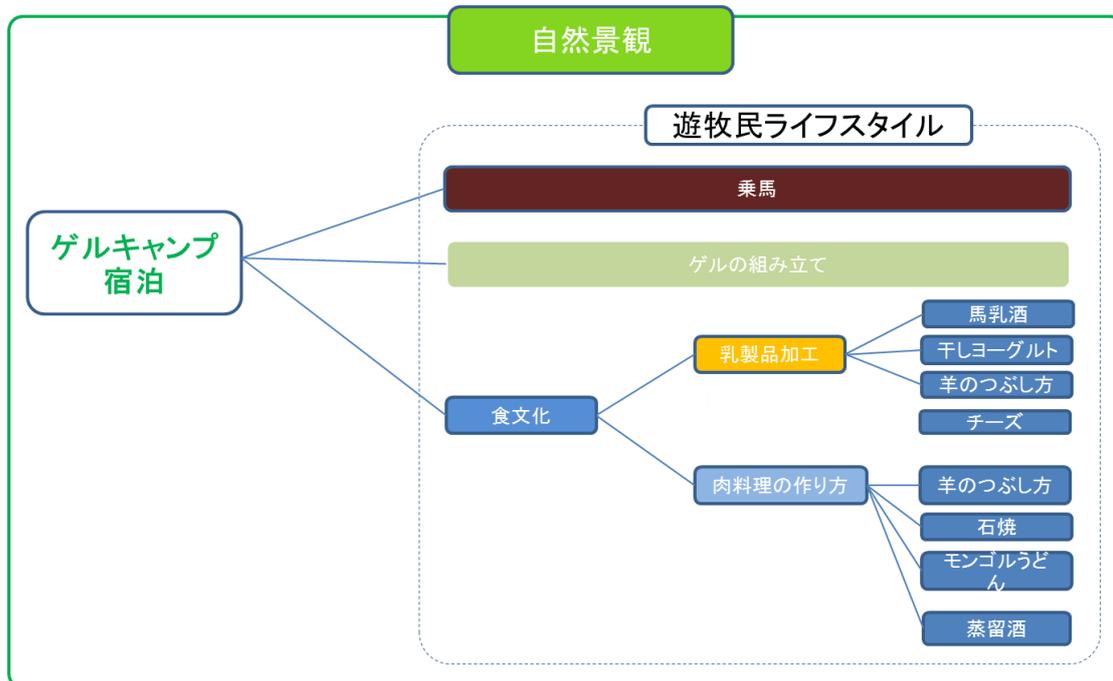


図 3. 小型ゲルキャンプの観光資源

アラハンガイ県ウギー湖における小型ゲルキャンプ場の現地調査より作成 2011 年

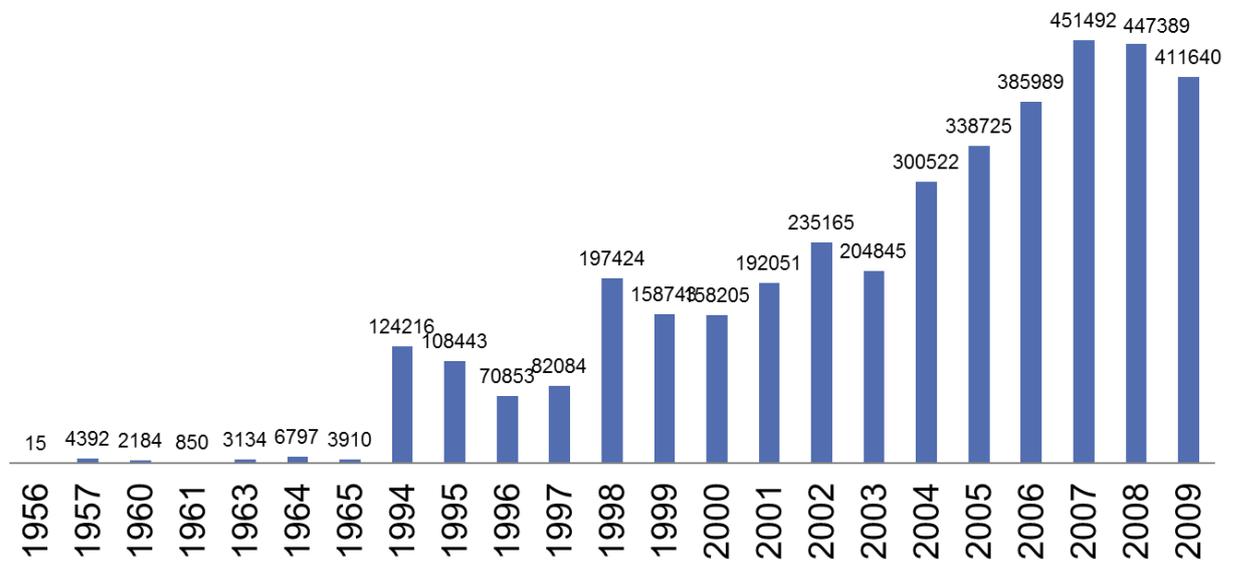


図4 モンゴル国における観光客入込数の推移

モンゴル自然環境観光省の報告書（1994-2009）とモンゴル中央文書館の記録より作成

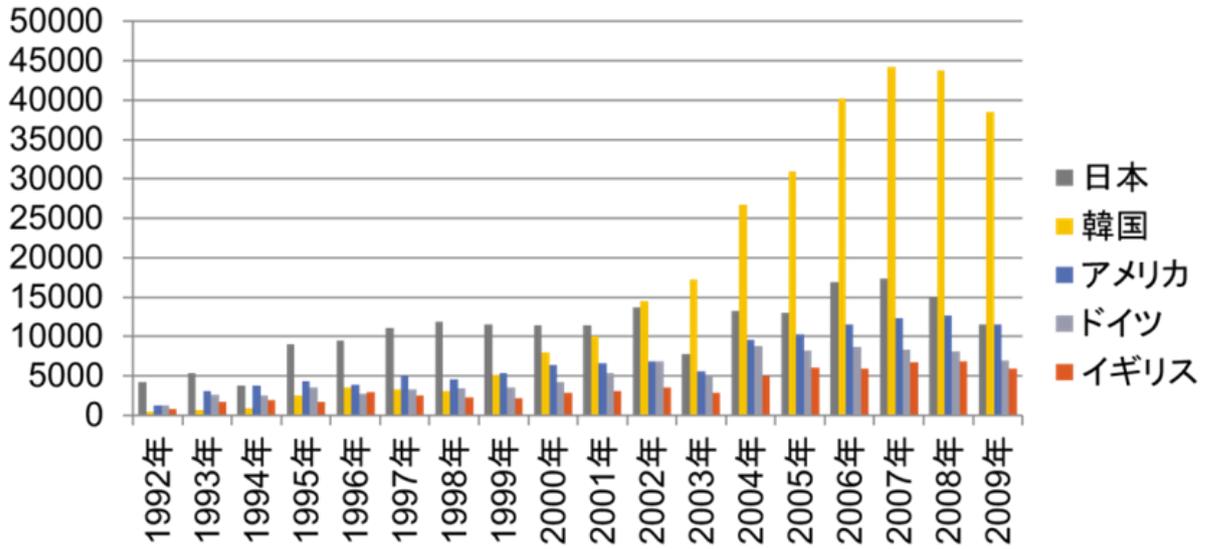


図5 モンゴルにおける主要送出国からの観光客の推移
 モンゴル自然環境観光省の報告書（1994-2009）より作成

モンゴルを訪れる要因として以下のように挙げられている。モンゴルの持つ大草原や遊牧民の生活は観光客をひきつける要因となっていることが読み取れる。

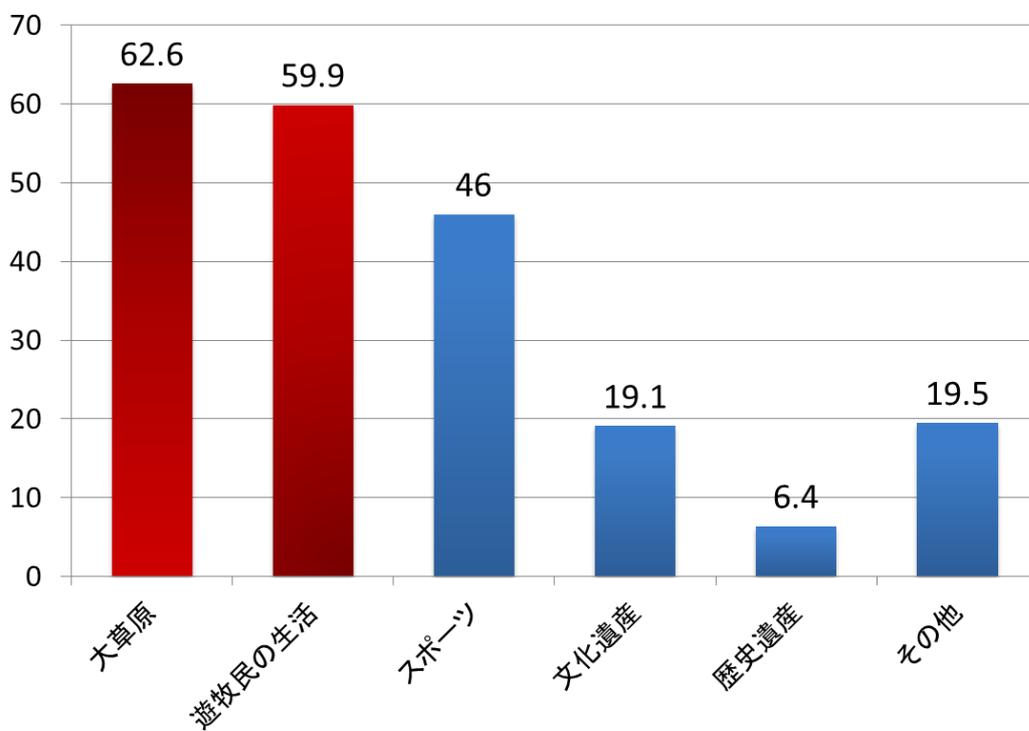


図6 モンゴルを訪れる外国人観光客の理由 2003年
モンゴル観光環境省の報告書 2003年より作成

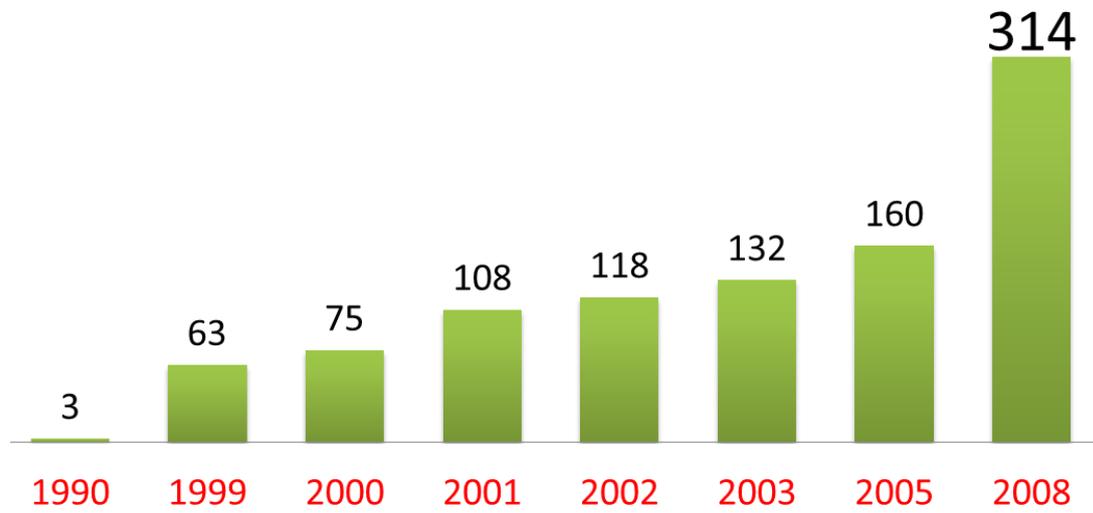


図7 モンゴルにおけるゲルキャンプ場の数と推移
モンゴル自然環境観光省の報告書（2000-2009）とモンゴル中央文書館のデータより作成

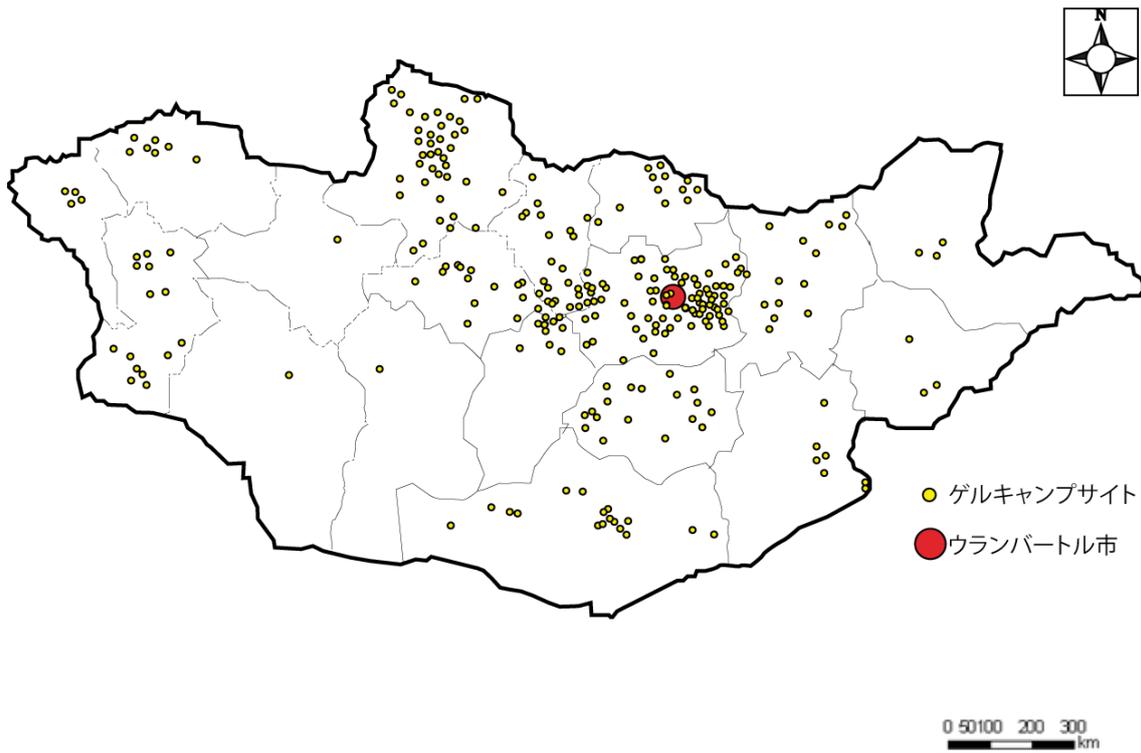


図8 モンゴルにおけるゲルキャンプの分布図
モンゴル自然環境観光省のデータ及び現地調査より作成

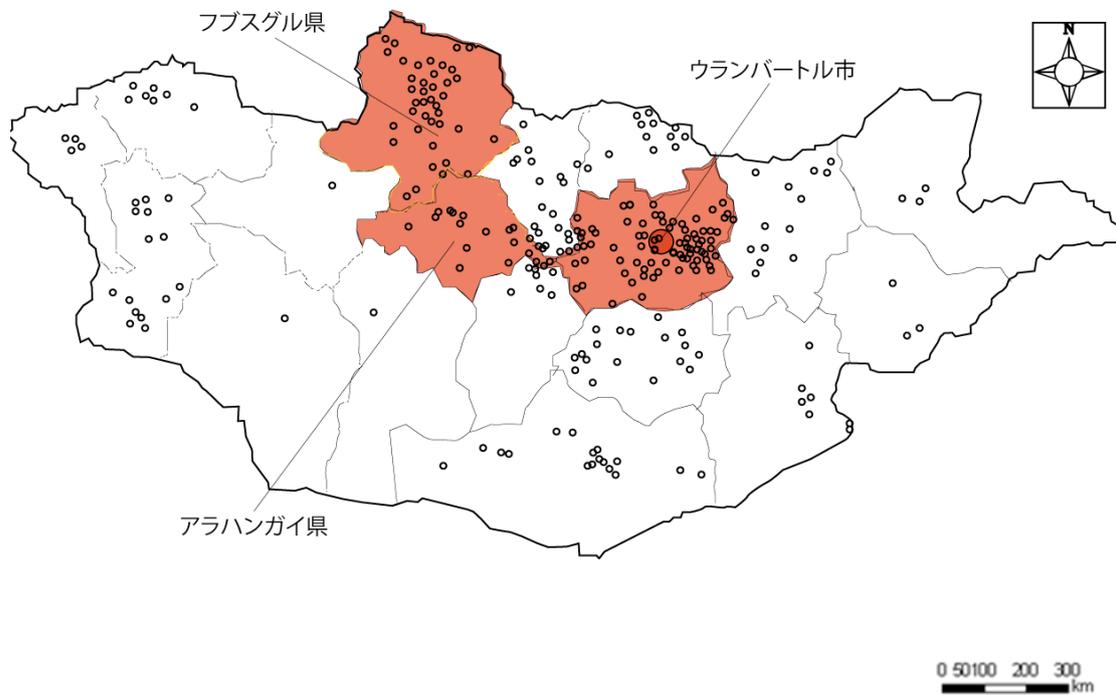


図9 ゲルキャンプの主に分布する地域
モンゴル自然環境観光省のデータ及び現地調査より作成

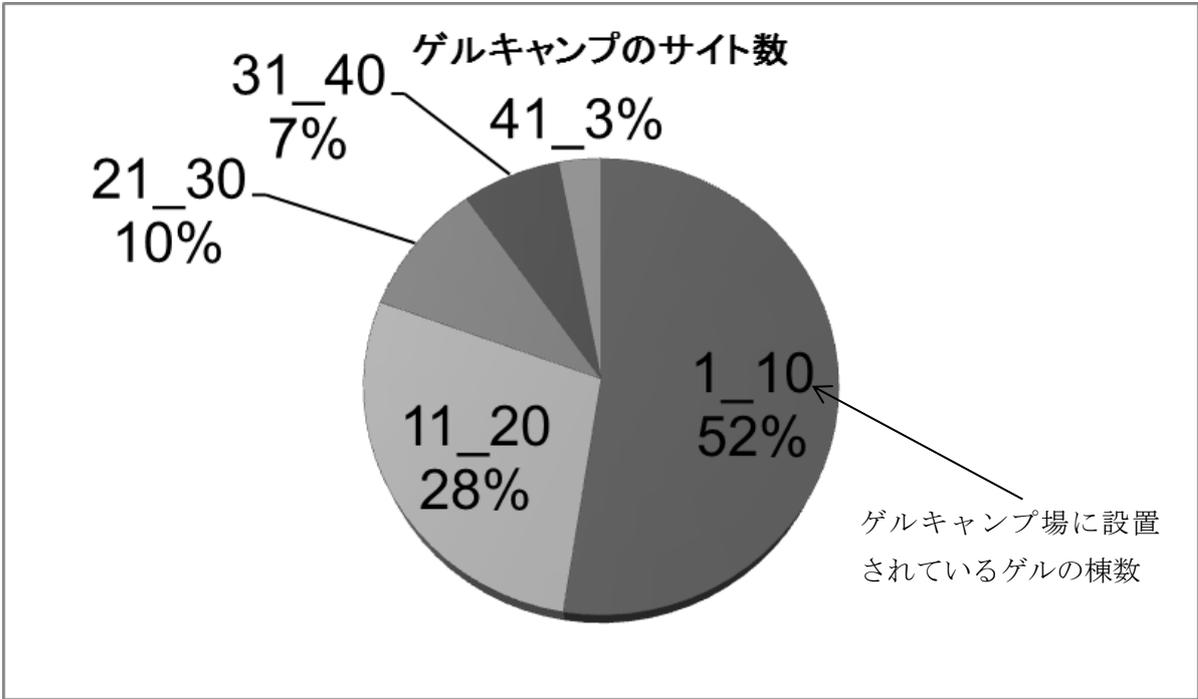


図 10 ゲルキャンプ場の規模による割合（種類型）
 モンゴル自然環境観光省のデータ及び現地調査より作成

距離とゲルキャンプサイトの関係

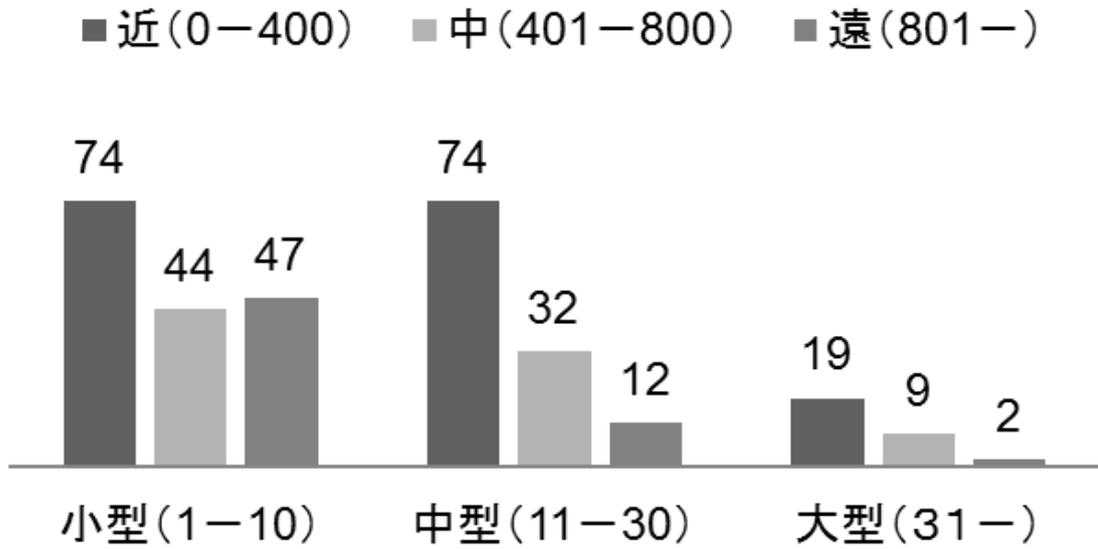


図 11 ゲルキャンプ場の都心部からの距離と規模の関係性
モンゴル自然環境観光省のデータ及び現地調査より作成

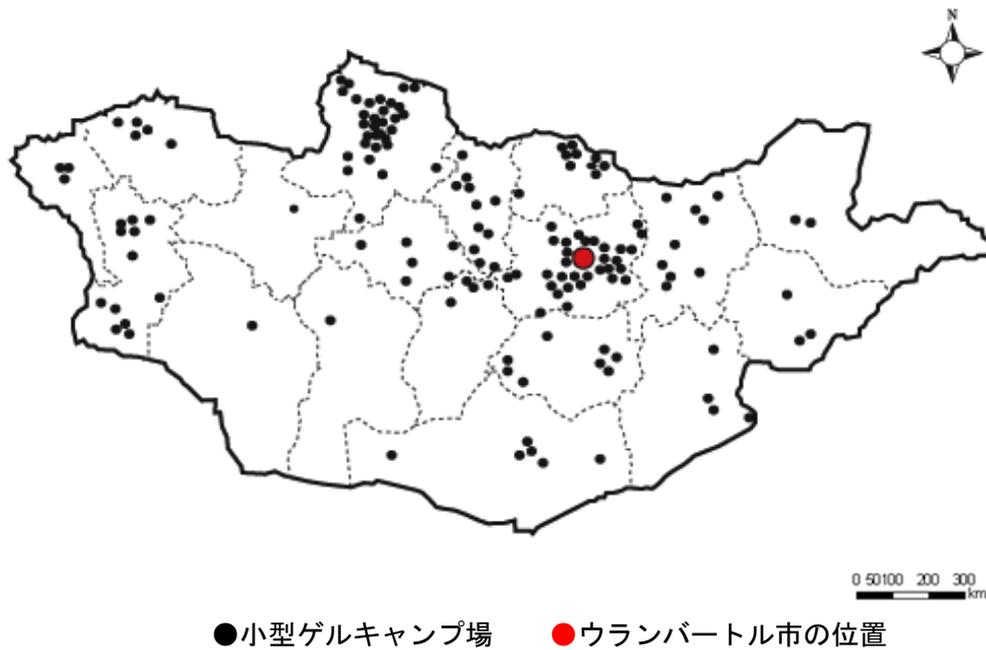
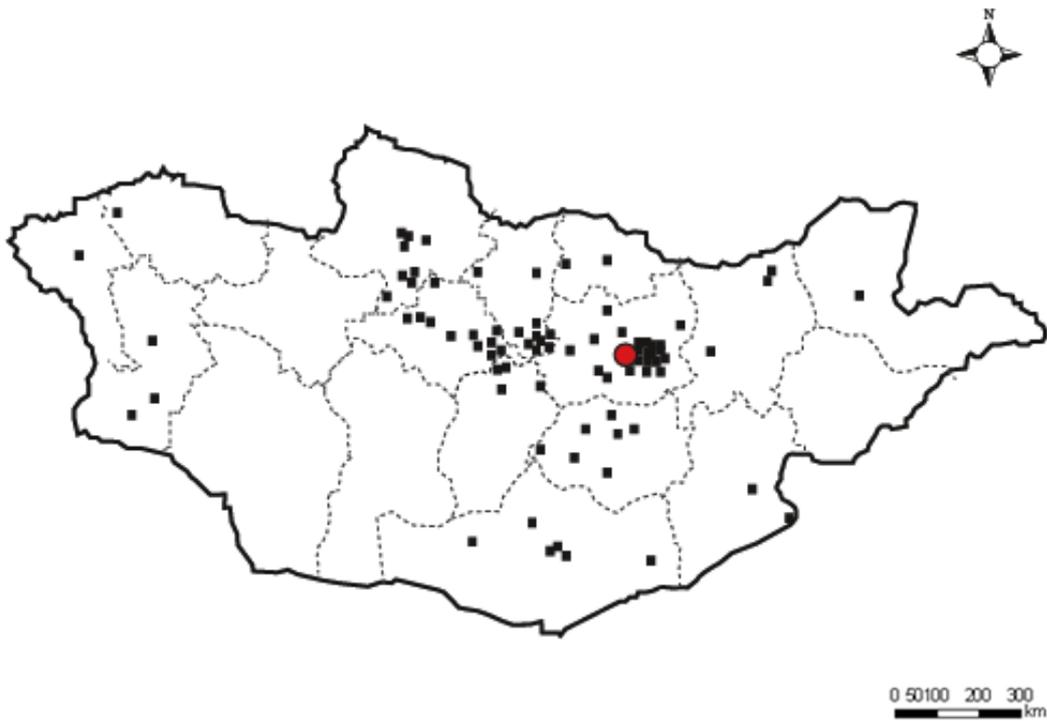


図 12. モンゴルにおける小型ゲルキャンプの分布
モンゴル自然環境観光省のデータ及び現地調査より作成



■ 中型ゲルキャンプ場 ● ウランバートル市の位置

図 13. モンゴルにおける中型ゲルキャンプの分布
モンゴル自然環境観光省のデータ及び現地調査より作成

大型ゲルキャンプの分布



★大型ゲルキャンプ場 ●ウランバートル市の位置

図 14. モンゴルにおける大型ゲルキャンプの分布
モンゴル自然環境観光省のデータ及び現地調査より作成

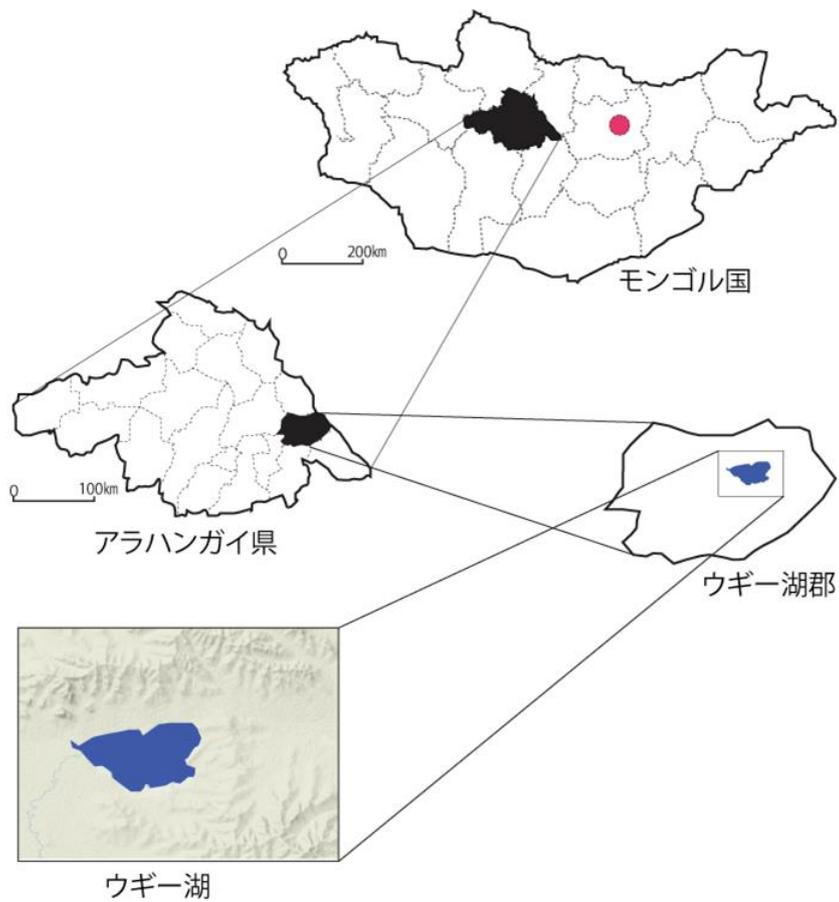


図 15. アラハンガイ県・ウギー湖の位置
アラハンガイ県ウギー湖における小型ゲルキャンプ場の調査より作成

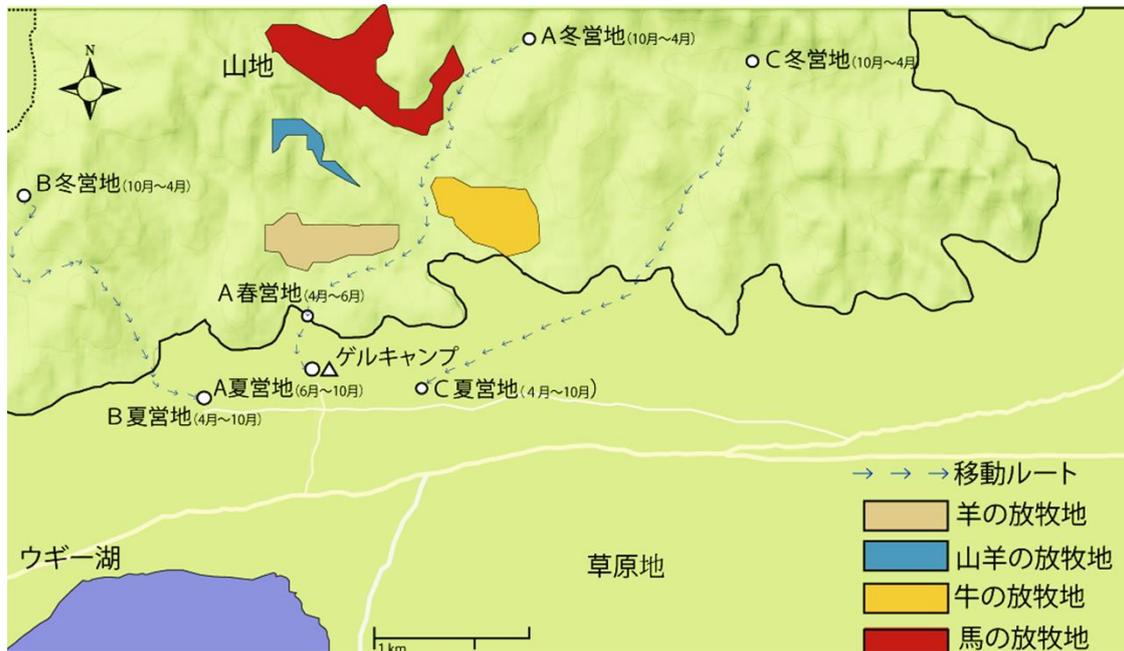


図 16. ウギー湖周辺のゲルキャンプと遊牧民の土地利用
 アラハンガイ県ウギー湖における小型ゲルキャンプ場の調査より作成

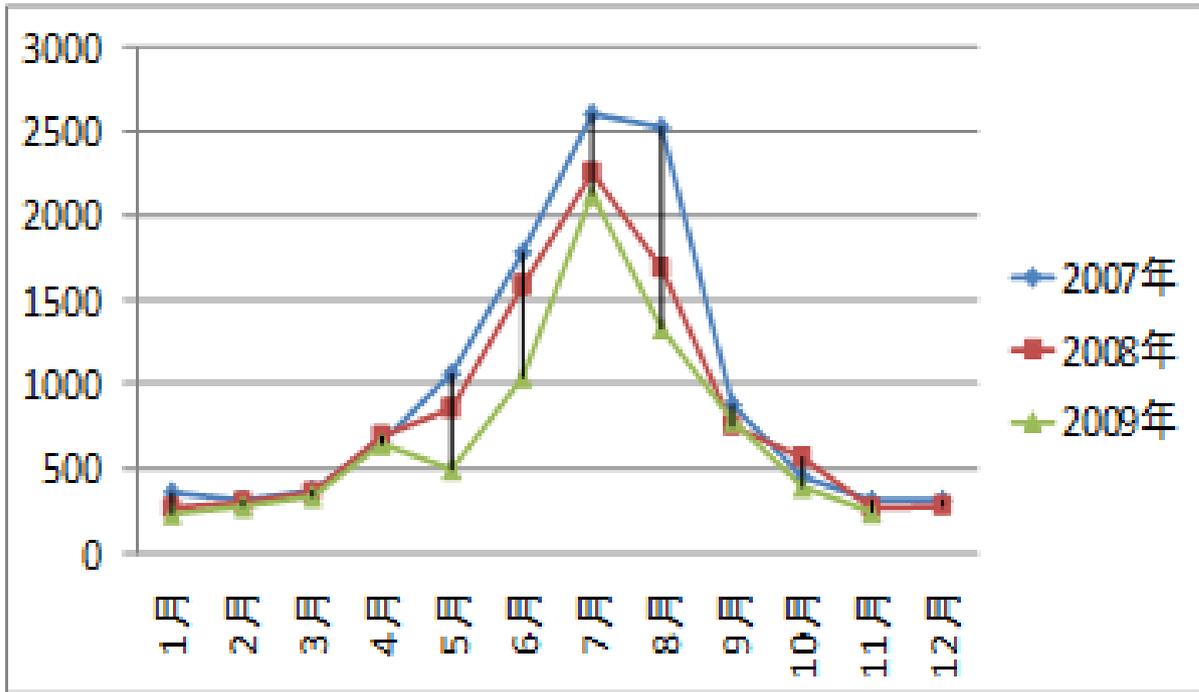


図 17. モンゴルにおける観光シーズン
 駐日モンゴル大使館のデータより作成

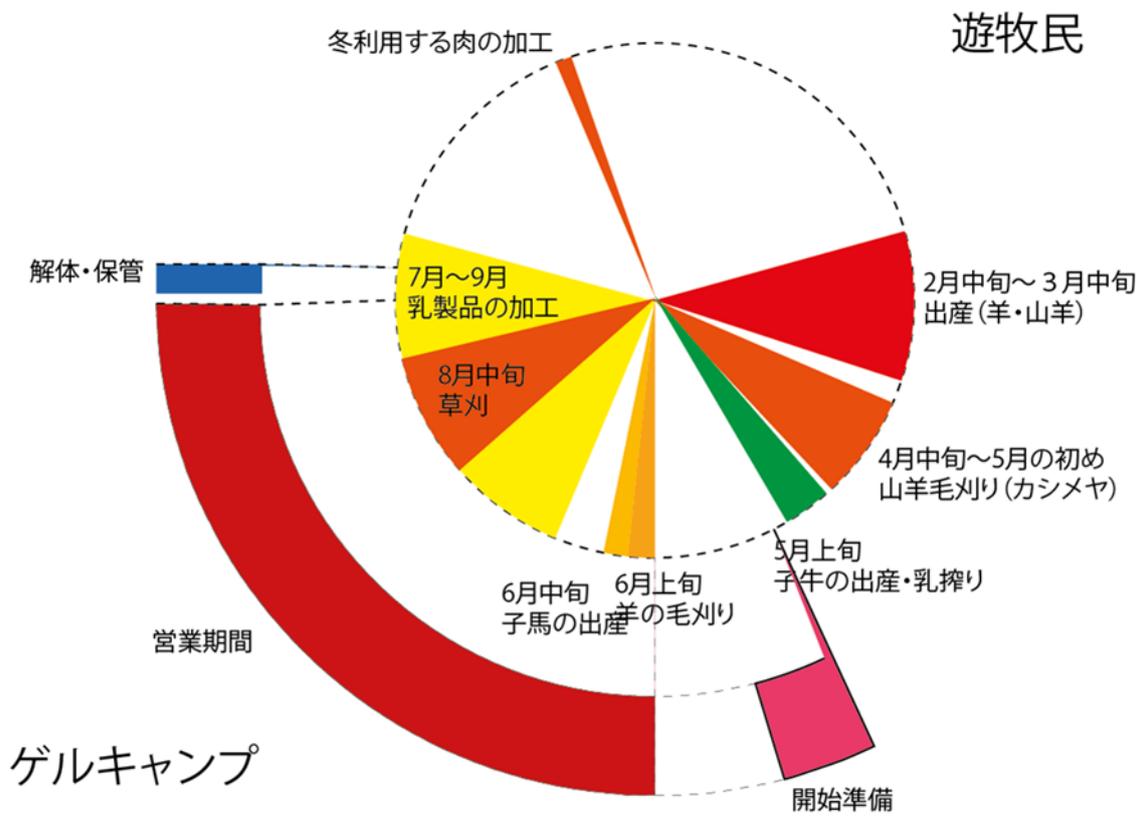


図 18. 小規模ゲルキャンプにおける経営カレンダー
アラハンガイ県ウギー湖における小型ゲルキャンプ場の調査より作成

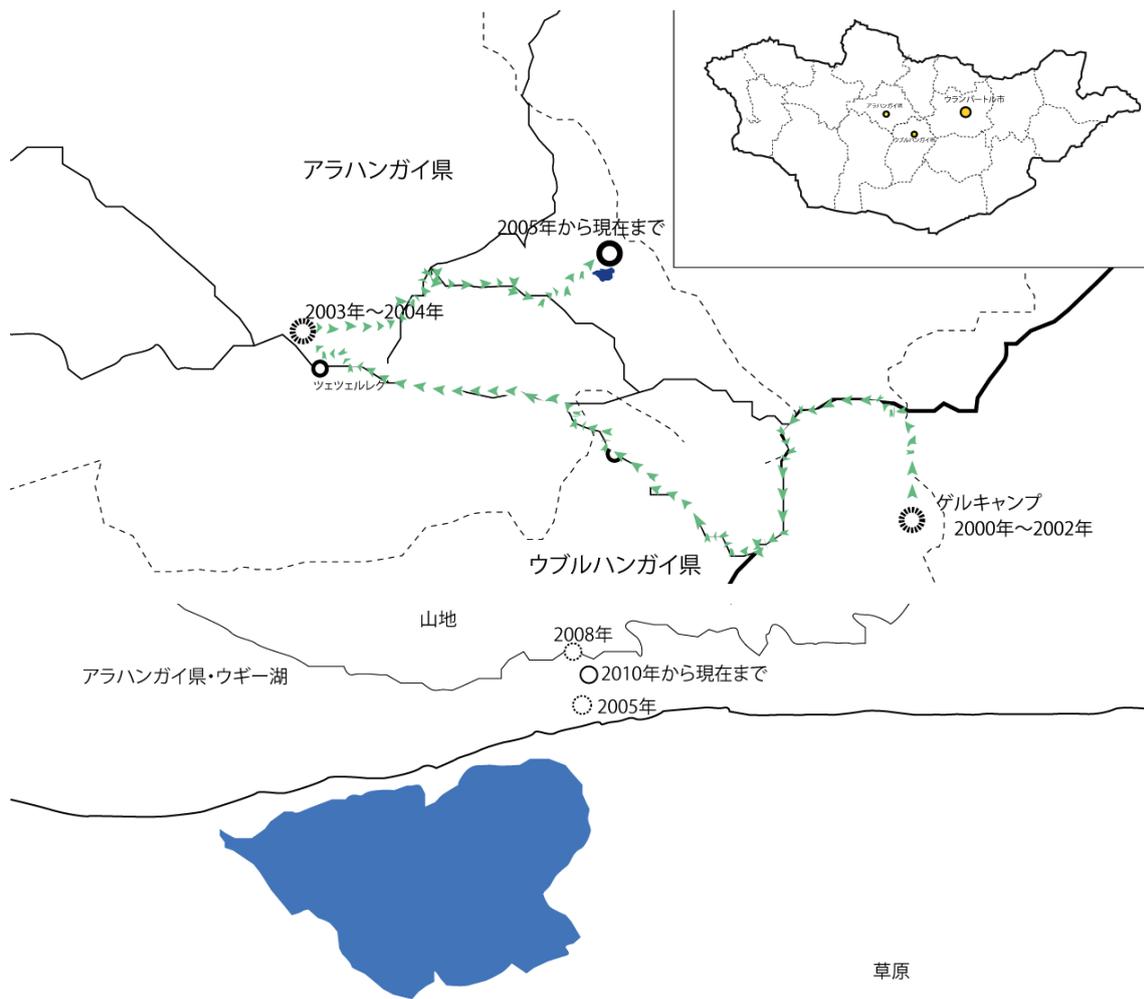


図 19. ウギー湖における小規模ゲルキャンプ場の移動による環境保全
 アラハンガイ県ウギー湖における小型ゲルキャンプ場の調査より作成

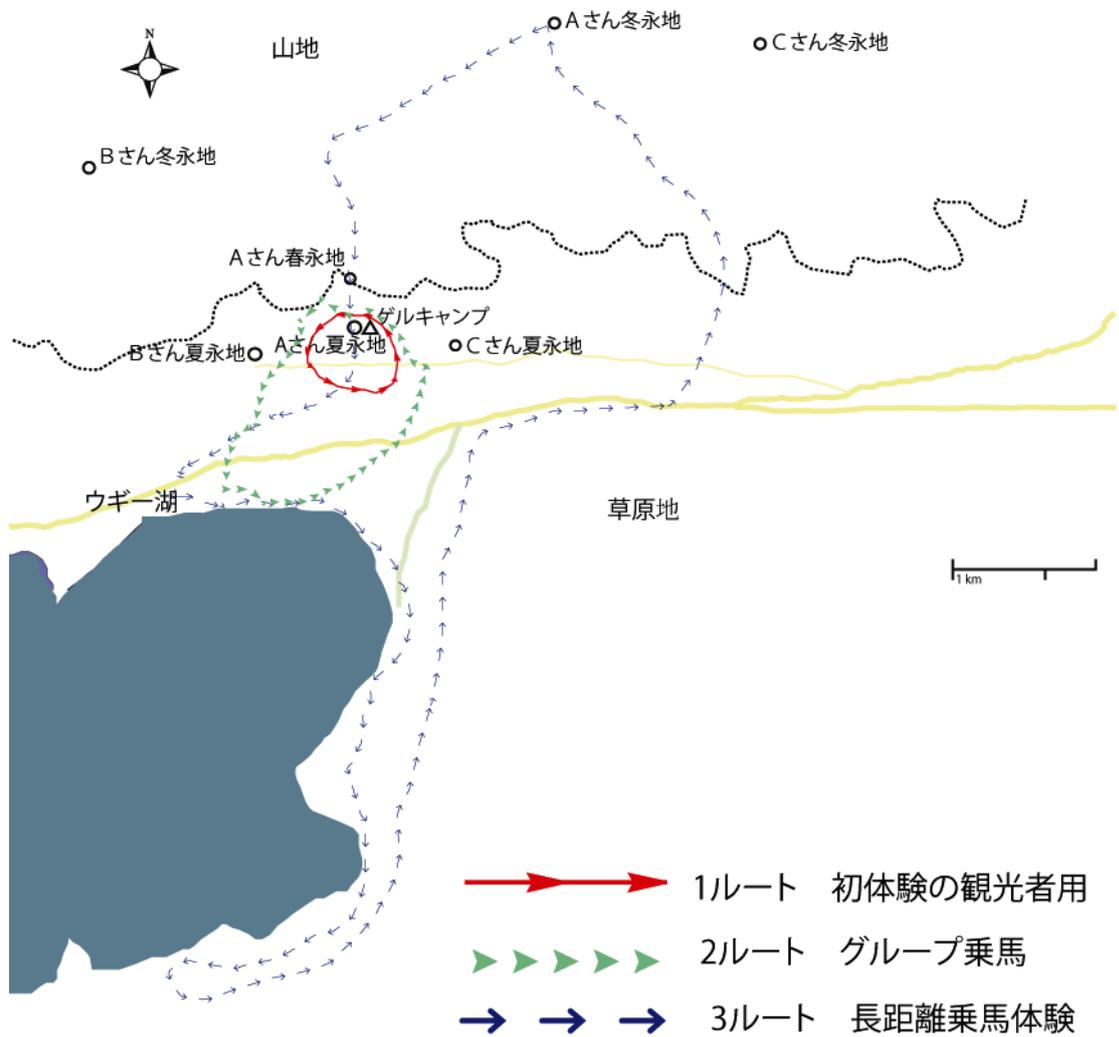


図 20. ゲルキャンプの乗馬ルート
 アラハンガイ県ウギー湖における現地調査より作成

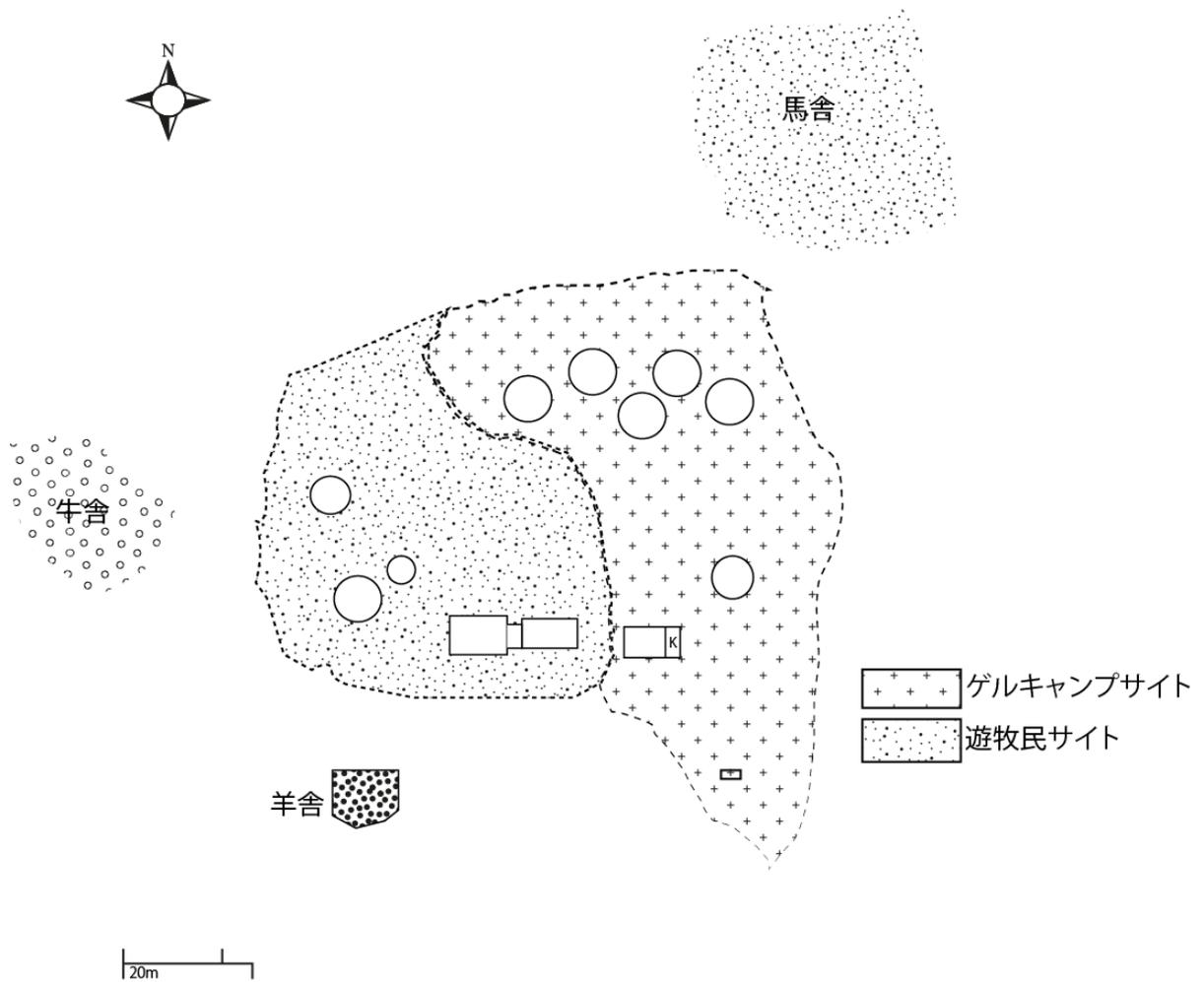


図 21. ウギー湖におけるゲルキャンプ場の分布と特徴
 アラハンガイ県ウギー湖における現地調査より作成

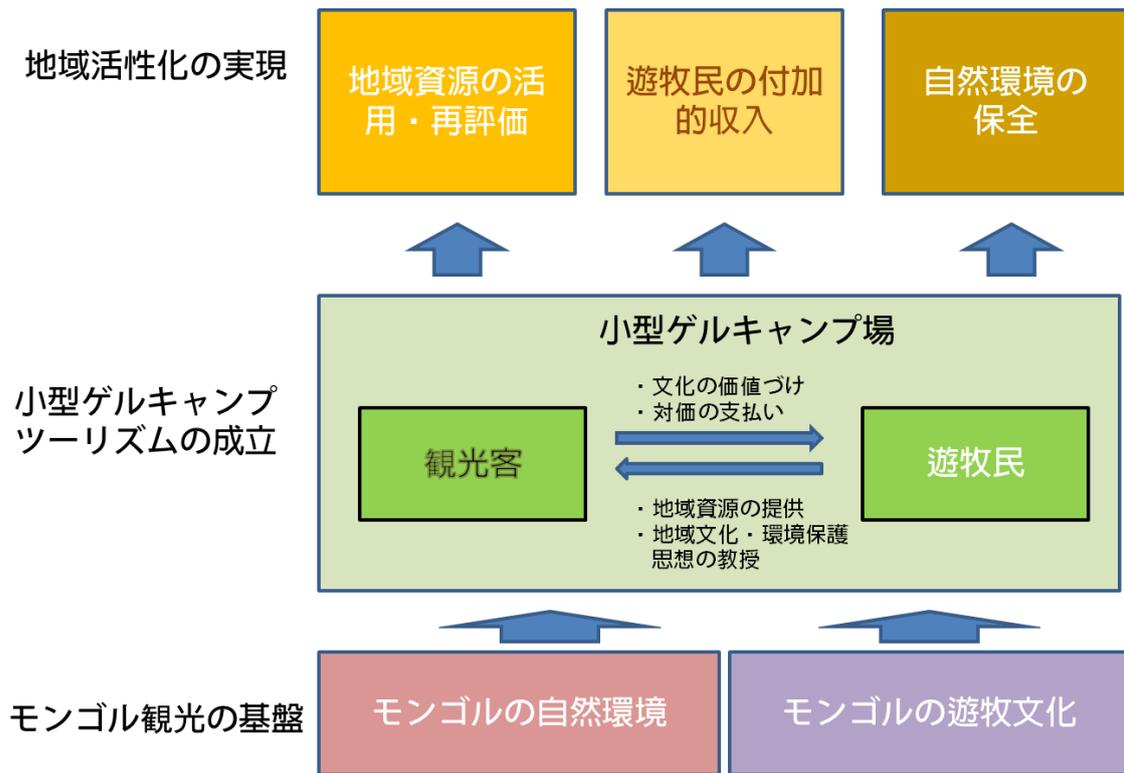


図 22. 小型ゲルキャンプ場と遊牧民の共通理解と保全に関する取り決め
アラハンガイ県ウギー湖における現地調査より作成

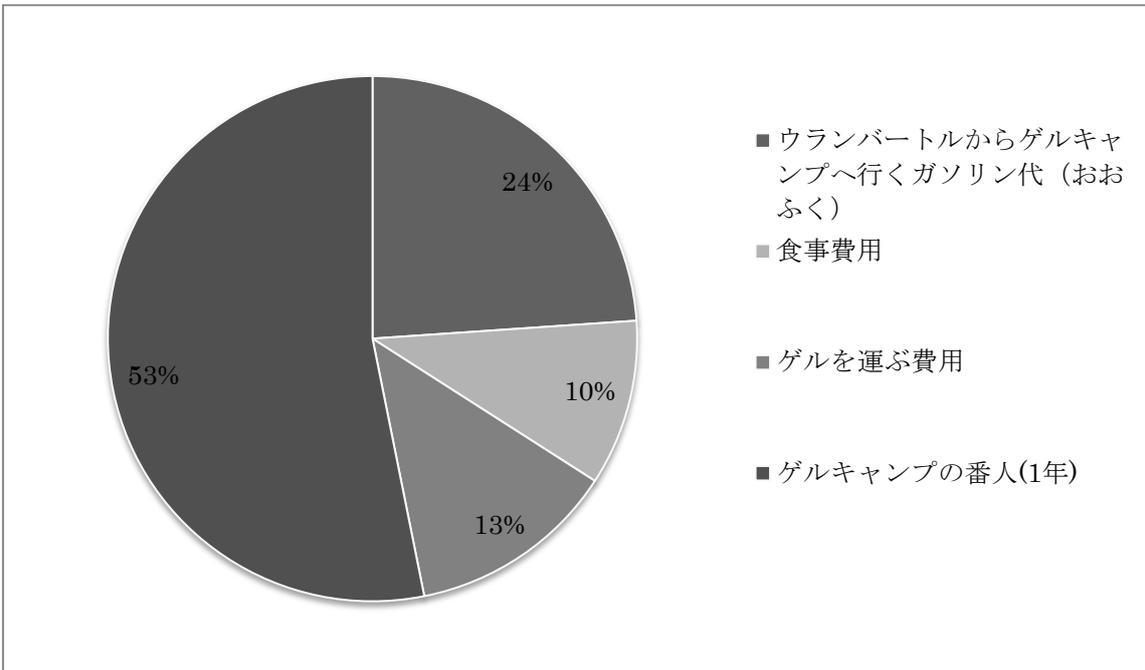


図 23. ゲルキャンプの解体・保管の費用
アラハンガイ県ウギー湖における現地調査より作成

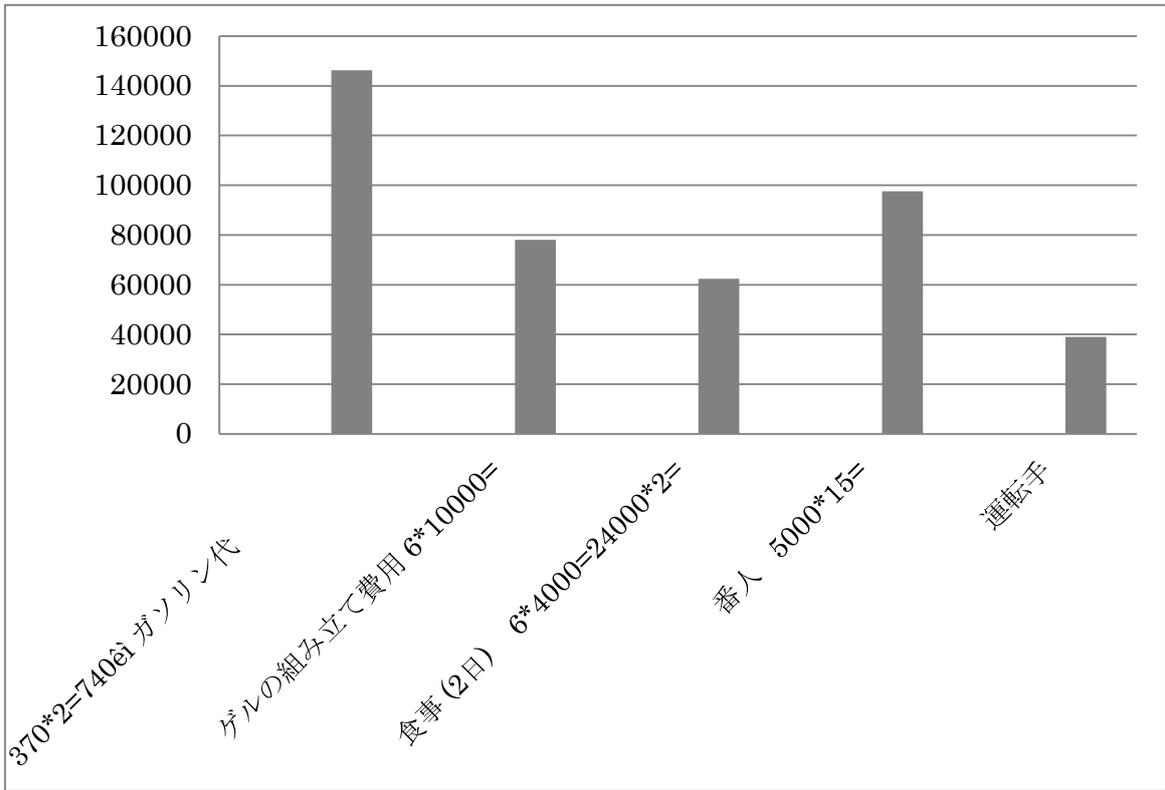


図 24. ゲルキャンプの開始準備費用
アラハンガイ県ウギー湖における小型ゲルキャンプ場の調査より作成

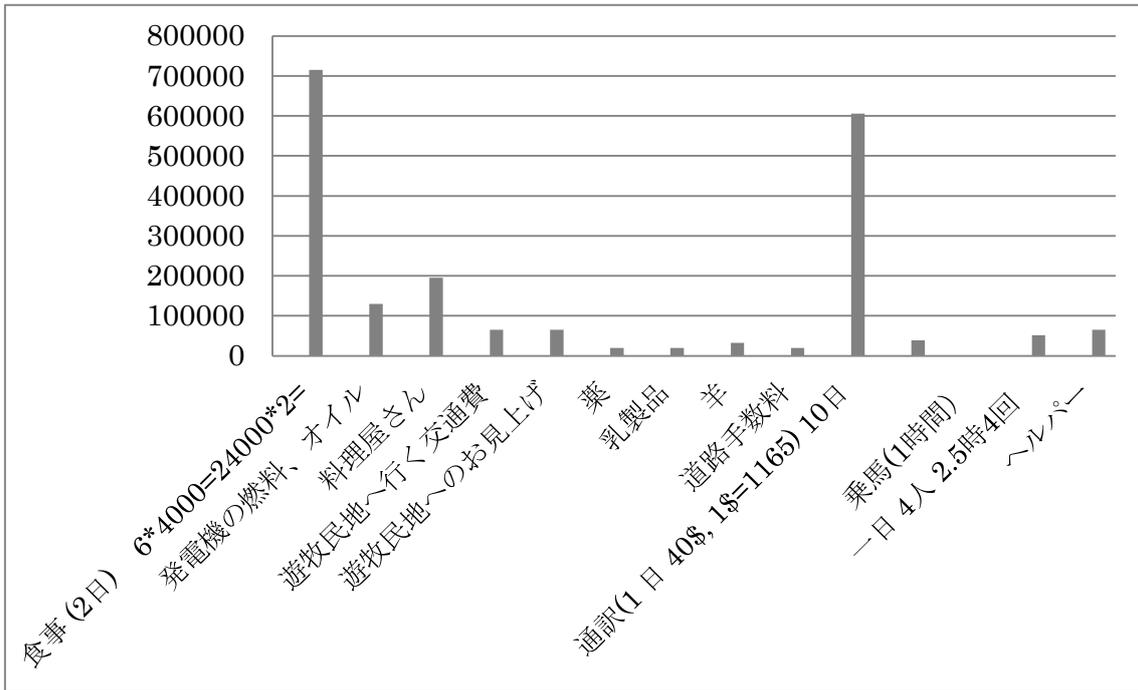
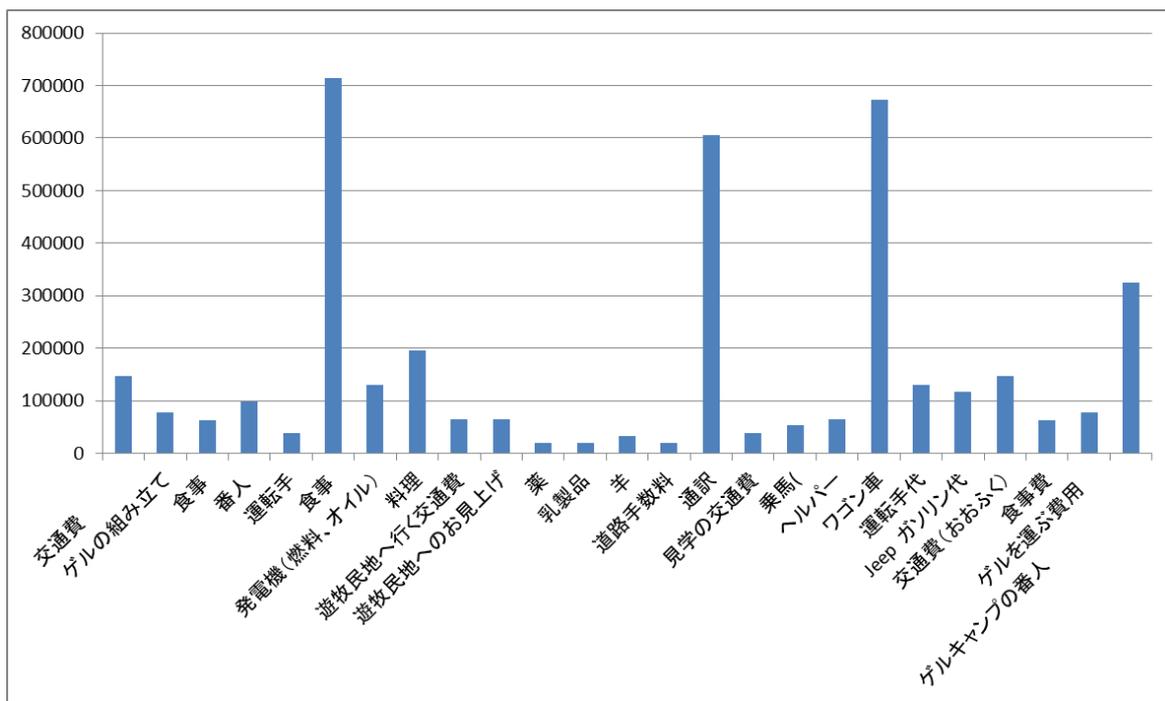


図 25. ゲルキャンプ活動の費用

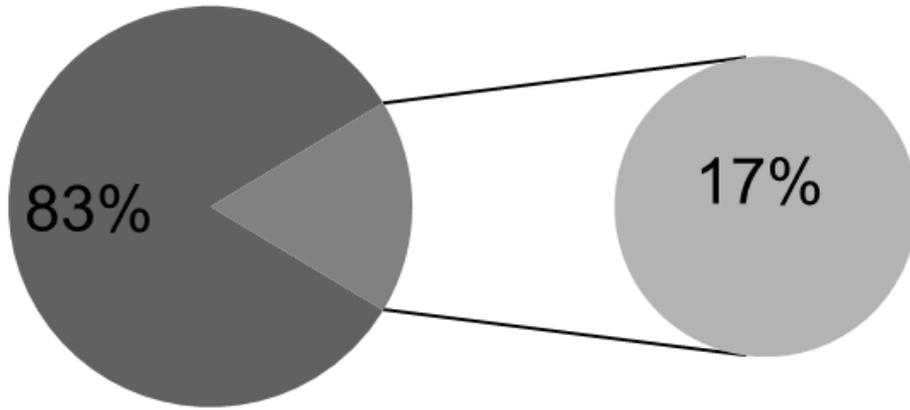
アラハンガイ県ウギー湖における小型ゲルキャンプ場の調査より作成



■支出の割合 (モンゴルトグリク)

図 26. 小規模ゲルキャンプの経営における支出の割合
 アラハンガイ県ウギー湖における小型ゲルキャンプ場の調査より作成

■ ゲルキャンプ ■ 遊牧民



ゲルキャンプ	3978598 トグリク
遊牧民	833300 トグリク

図 27. 地元住民への利益
アラハンガイ県ウギー湖における現地調査より作成

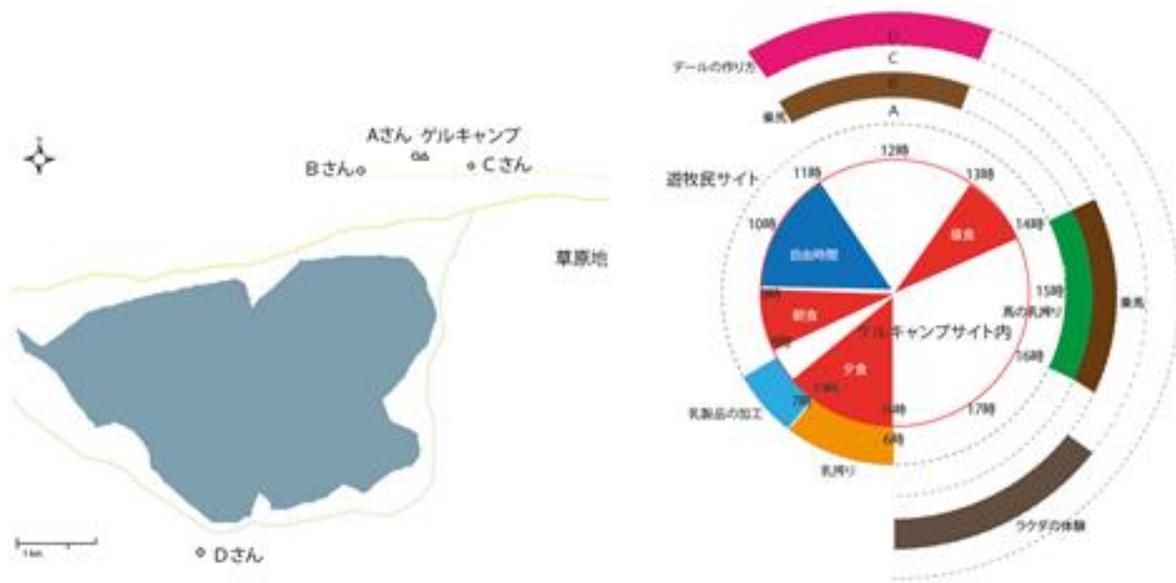


図 28. ウギー湖におけるゲルキャンプのスケジュール
アラハンガイ県ウギー湖における現地調査より作成

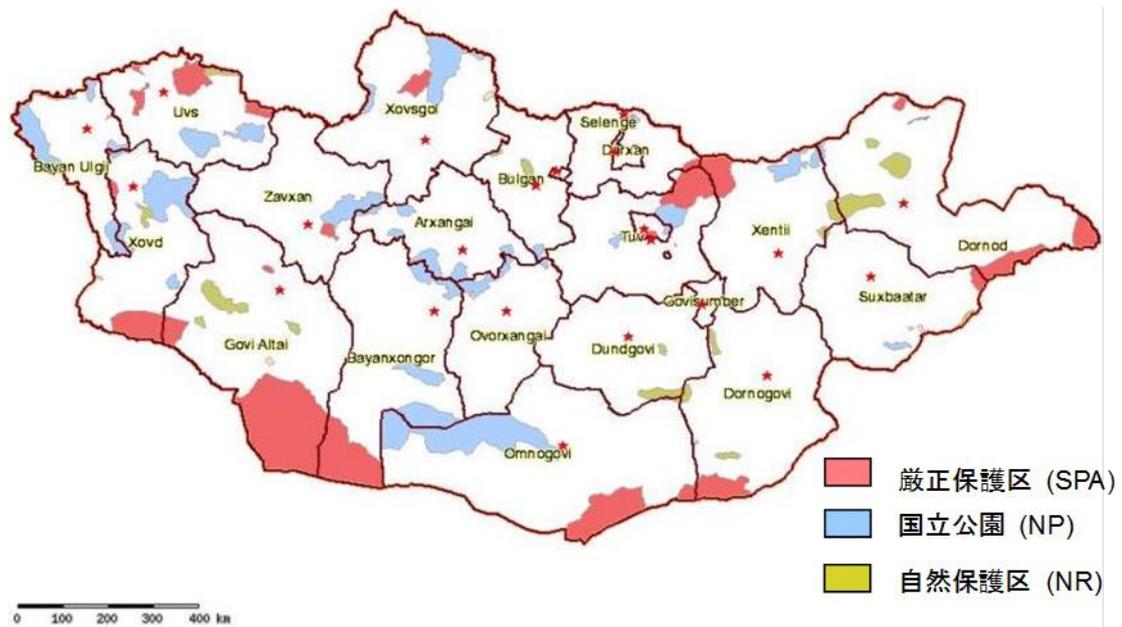


図 29. モンゴルにおける自然保護区
 Special Protected Areas of Mongolia, 2000 より引用

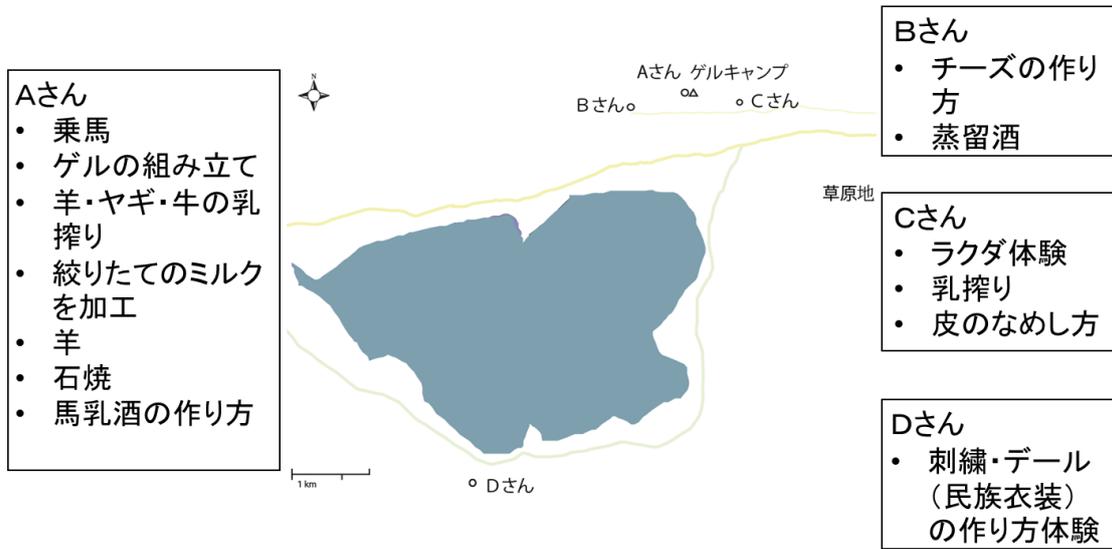


図 30. ウギー湖周辺における遊牧民に配分される作業
アラハンガイ県ウギー湖における現地調査より作成

表1. グリーンツーリズムの特徴と役割

	モンゴル	ヨーロッパ	日本
形態	放牧型畜産	放牧型畜産	農業
景観	放牧地と家畜と集落 が点在する大草原の 景観	草地を中心に家畜と集 落が点在する農村景観	水田、集落、人口 林、の農村景観
家屋 構造	開放的で羊の毛でで きたフェルトと木材 でできたゲル	レンガや石を素材にし た耐用年数の長い施 設、個室用	開放的な木造部屋 大部屋方式
宿泊 施設	プライバシーが守れ ない様式 新しい施設を設置(ゲ ルキャンプ)	プライバシーが守れる 個室方式の宿泊施設 を提供できる	プライバシーが守 れない様式 新しい施設を設置

宮崎猛『これからのグリーン・ツーリズム』家の光協会 2002 年をもとに作成

表 2. モンゴルにおける民主化による観光発展の変化

	社会主義時代（1990年前）	民主化後（2006年現在）	
ホテル	3棟	320棟	初のホテルは1954年8月にA L T A I ホテル建設
ゲルキャンプ	1か所	314か所	1964年にハンテイング目的でウムヌゴビ県にゲルキャンプが建てられた
観光機関・会社	1社	200社	1955年に外国人観光者を管理する政府機関設立（J U U L C H I N）
リゾート地	1か所	30か所	初のリゾート地としてテレルジ国立公園でU B 2 設立
観光産業のターゲットとなる国	旧ソ連連邦国	先進国（日本、韓国、ドイツ、フランス、アメリカなど	1956年6月に初めてロシアから15人の観光者を受け入れた
公式ガイド	なし	182人以上	

モンゴル中央文書館及びモンゴル自然環境観光省のデータより作成

表 3. モンゴルゲルの種類

	4 ハナト(壁)	5 ハナト	6 ハナタ	8 ハナタ	10 ハナタ	12 ハナタ	20 ハナタ
内面直径	5m-5.1m	6.1m-6.2m	6.5m-6.7m	8.3m-8.6m	9.4m-9.6m	12m	17m-17.5m
面積	22m ²	31m ²	36.3m ²	65m ²	77m ²	134.7m ²	254.3m ²
利用目的	乳製品加工や干し肉	宿泊として利用		ゲルキャンプ用(レストランや行事)			

現地調査より作成

表 4. ゲルキャンプが主に分布する 3つの地域

項目	テレルジ 国立公園地域	アラハンガイ県 保護地域	フブスグル県 国立公園地域
各モデル地 域の風景			
	テレルジの森と岩	ウギ湖	丘から見る フブスグル湖
			
	ゲルキャンプ	ゲルキャンプ	ゲルキャンプ
首都からの 距離	70 km	450 km 圏	1,000 km 圏
保護地指定	国立公園	ラムサール条約	国立公園
自然条件	森、草原、川、丘	草原の湿地	大きな湖、森、山
観光地タイプ	近郊保養地	移動の中継地	高級リゾート
観光客の動 向	モンゴル人の日帰り客、外国人宿泊客も多く盛況である。観光ゲルキャンプは過密状態である。	ハラホリン（カラコルム）旅行のついでによる観光客が多い。	リゾート地・トナカイ民族を目的として観光客が多い
地域の主要 資源	草原、森、河川	ウギ湖、鳥類、草原	フブスグル湖、丘、森、魚類、鳥類

モンゴルにおけるゲルキャンプ場の現地調査より作成

表 5. ゲルキャンプの規模別における特徴

	小型ゲルキャンプ	中型ゲルキャンプ	大型ゲルキャンプ
宿泊するゲル	○	○	○
大型ゲル	×	○	○
欧米式建物	×	○	○
キッチン	○	○	○
レストラン	×	○	○
バー	×	○	○
欧米式トイレ	×	○	○
シャワールーム	×	○	○
サウナー	×	○	○
スポーツ場	×	○	○
ビリヤード・カラオケルーム	×	○	○
移動用の建物	○	○	×
ビザカードの利用	×	○	○
インターネット	×	×	○
遊牧民との関係	○	○	×
競馬ルート	○	○	×
ハンティング	○	×	×
ゲルキャンプの移動	○	○	×

現地調査より作成

表 6. ウギー湖のゲルキャンプにおけるの 1 日の行動

乳搾り(ヤギ・羊・牛)	<ul style="list-style-type: none"> •6:00-7:00 •羊・ヤギ・牛の乳搾りは一日2回(朝・夕) 馬の乳絞りの場合は、一日8回(2時間ごと)
乳製品加工	<ul style="list-style-type: none"> •7:00-7:40 絞りたてのミルクを加工↓ 生クリーム・ヨーグルト・アーロール(干しヨーグルトなど)
朝食	<ul style="list-style-type: none"> •8:00-9:00 ゲルキャンプの食堂で用意されたセット料理
自由時間	<ul style="list-style-type: none"> •9:00-11:00 •メモ整理・遊牧民のゲルへ行く準備など
遊牧民のゲルを訪問(Aさん)	<ul style="list-style-type: none"> •11:10-12:30 •聞き取り・写真・遊び・乳製品加工の見学 •男性→馬乳酒・蒸留酒・相撲取り •女性→僕民のお母さんの家事手伝い・刺繍・デール(民族衣装)の作り方体験
昼食	<ul style="list-style-type: none"> •13:00-14:00 •ゲルキャンプの食堂で用意されたセット食
自由時間	<ul style="list-style-type: none"> •14:00-16:00 馬の乳搾り・乗馬(希望のある人)
遊牧民のゲルを訪問(Bさん)	<ul style="list-style-type: none"> •16:30-18:00 •ラクダ体験・皮をなめし方・聞き取り
夕食	<ul style="list-style-type: none"> •18:30-19:30 •ゲルキャンプの食堂で用意されたセット食

アラハンガイ県ウギー湖におけるゲルキャンプ場の現地調査より観光客の 1 日の行動をまとめたものである。

表7 ゲルキャンプにおける乗馬ツアーの概要



【1】乗馬ルートでのオリエンテーションで乗馬の注意などを行う。



【2】乗馬の経験のない参加者には引き綱で対処する。



【3】上手に乗れるようになったらグループで乗馬する。



【4】グループで乗馬している様子。

アラハンガイ県ウギー湖におけるゲルキャンプ場の現地調査より作成
筆者撮影 2010年

表 8. ゲルキャンプの観光資源

No.	項目	内容
0	ゲルの組み立て方	ゲルキャンプで使われているゲルを解体や組み立て、
1	馬乳酒のかくはん	体験者の絞った乳で作り方を教える
2	羊のつぶし方	送別会時に羊をつぶし、肉を解体・内臓料理の作り方
3	石焼	解体した肉で作って見せる
4	蒸留酒の造り方	遊牧民のゲルのなかで作り方のプロセスを体験する
5	乳製品で作る食べ物の紹介と作りかた	ヨーグルト、アーロール、生クリーム、ハイルマグ、モンゴルチーズ、エーズギなど
6	荒い馬の慣らし方の体験	遊牧民が馬をならすのをみる
7	牛のフンあつめ	遊牧民の子供たちと一緒に牛・馬のフンを集める
8	乳搾り	羊、ヤギの乳搾りから始め、慣れてきた時点で牛や馬の乳搾りを体験する

アラハンガイ県ウギー湖におけるゲルキャンプ場の現地調査より作成

表9 アラハンガイ県・ウギー湖における小規模ゲルキャンプ場のルール案

	対象グループ	守るべきルール	
1	観光客	ゴミを捨てない	網で魚を獲らない
		用便は場内トイレ	岸から 100 m には宿泊しない
		水を汚さない	決められた場所でゲルキャンプを張る
2	ゲルキャンプの管理人	周辺のゴミ拾いをする	客にルールを知らせる
		ツアーを客に紹介する	ゲルの移動跡にゴミを残さない
3	観光社ガイド	客のお手本になること	
4	地元住民	観光客に親切にする	
5	ソム（群）	環境保護の総合調整を行う	

アラハンガイ県ウギー湖におけるゲルキャンプ場の地元住民よる聞き取り調査より作成

表 10 ウギノール地域の課題と目標

ウギノール地域の課題	ウギー地域の目標
<ul style="list-style-type: none"> • ゴミ問題 • 過放牧による水質悪化 • 車両のわだちの拡大による草原への影響 • 遊牧民の収入減少 • 野鳥繁殖地周辺でのキャンプ・家畜増加による繁殖への悪影響 • 湖の水量減少（ツアーで関心を高める） 	<p style="text-align: center;"><u>環境の保全</u></p> <p>ゲルキャンプの活動を通して地元住民が観光社に自然の素晴らしさ、大切さに気づいてもらい、湖と周辺的环境保全を推進する。</p> <p style="text-align: center;"><u>地域経済の安定</u></p> <p>経済面で問題を抱えるウギー湖の遊牧民が、ツアーに関わることで、追加収入を得られるようにする。</p> <p style="text-align: center;"><u>文化の継承</u></p> <p>遊牧民がゲルキャンプに関わることで、地域をより誇りに思い、その大切さに気づくことで、伝統文化が継承される。</p>

アラハンガイ県ウギー湖における現地調査より作成
 地元住民とゲルキャンプ場の経営者の間に話を合って決めた目標

表 11. 地元住民に割り当てられる利益

	A	B	C	D	合計
ゲルの組み立て費用	50000	10000	18000	×	78000
係員	60000	8000	19500	×	97500
遊牧民地へのお見上げ	35000	15000	15000	×	65000
薬	19500	×	×	×	19500
乳製品	10000	9500	×	×	19500
羊	32500	×	×	×	32500
乗馬(1時間)	×	1300	×	×	1300
一日 4人 2.5時4回	52000	×	×	×	52000
ヘルパー	35000	15000	15000	×	65000
ゲルを運ぶ費用	30000	24000	24000	×	78000
ゲルキャンプの番人(1年)	325000	×	×	×	325000
デールの作り方	×	×	×	30000	30000
	649000	82800	91500	30000	863300

アラハンガイ県ウギー湖におけるゲルキャンプ場の現地調査より作成



写真1. モンゴルにおける放牧地
2011年4月筆者撮影



写真 2. ウランバートル - 2 リゾート地
2010 年 7 月筆者撮影



写真3. 日本人が経営する Terelj Hirota ゲルキャンプ場
2010年7月筆者撮影



写真 4. ウランバートル市近郊のゲルキャンプ場
2011年7月筆者撮影



写真5. モンゴルにおけるハラハ族のゲル
2011年4月筆者撮影



写真6. モンゴルゲルの内側
2011年4月筆者撮影



写真7. ゲルに風通しをする様子
2011年4月筆者撮影

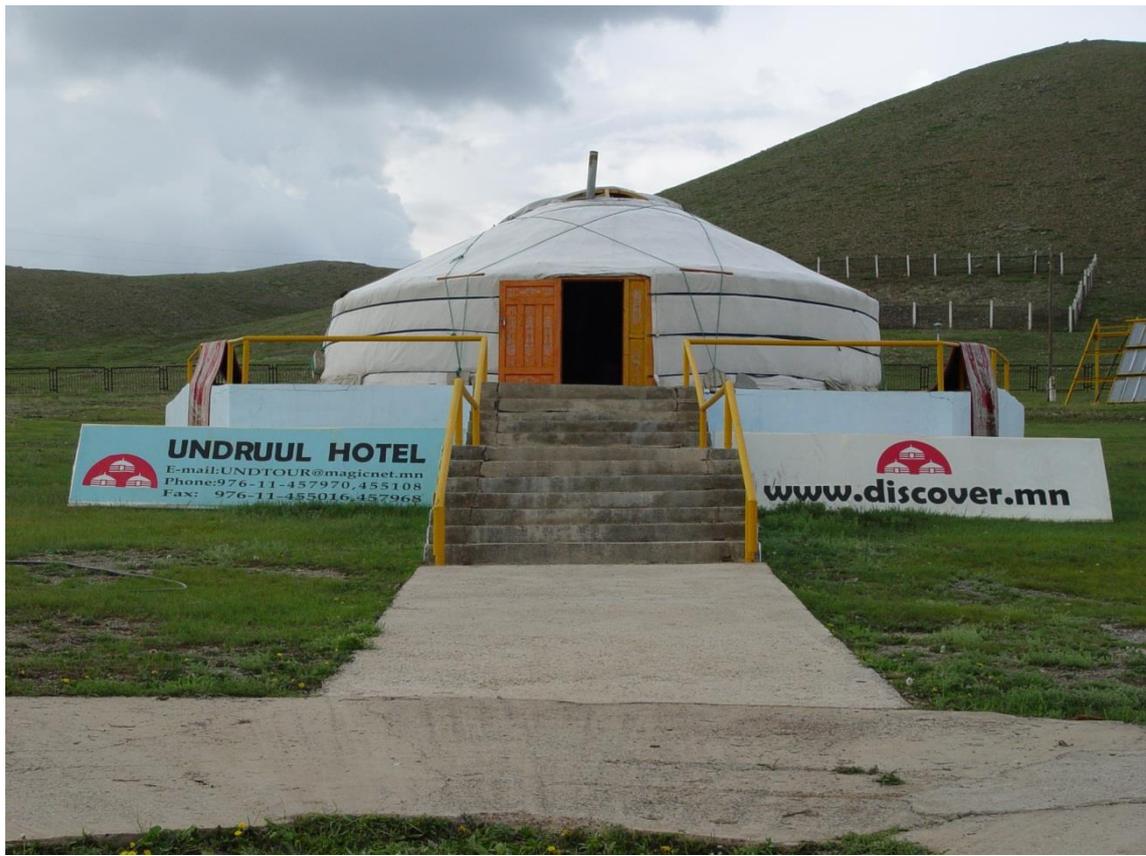


写真8 ゲルキャンプ場に建てられた大型ゲル
筆者撮影



写真9. モンゴルの13世紀時代を再現したゲルキャンプ場
2011年4月筆者撮影



写真 10. 才ポー
2010 年 7 月筆者撮影



写真 11. ウギー湖におけるゲルキャンプ場のゲルの組み立ての体験
2010年6月筆者撮影



写真 12. 観光客が遊牧民のゲルを訪問している様子
2008 年 8 月筆者撮影



写真 13. 羊の屠蓄
2010 年 7 月筆者撮影



写真 14. 石焼（ホルホグ）
2012 年 7 月筆者撮影



写真 15. 観光客の乗馬している様子
2012年7月筆者撮影



写真 16. 地方のナーダム祭の様子
2008 年 7 月筆者撮影



写真 17. アラハンガイ県・ウギー湖のゲルキャンプ場
2010年7月筆者



写真 18. テレルジ国立公園でアメリカ人が経営するゲルキャンプ場
2010年7月筆者



写真 19. Mongol shiltgeen ゲルキャンプ場
2010 年 7 月筆者



写真 20. Mongol shiltgeen ゲルキャンプサイト内
2010年7月筆者



写真 21. アラハンガイ県・カラコルム寺院
2010年7月筆者撮影



写真 22. アラハンガイ県・カラコルム寺院の内側
2010年7月筆者撮影



写真 23. アラハンガイ県ウギー湖の自然風景
2010年7月筆者撮影



写真 24. アラハンガイ県ウギー湖の自然風景
2010年7月筆者撮影



写真 25. ラクダ乗って体験する様子
筆者撮影 2010 年

ウギー湖のゲルキャンプでラクダに乗る体験をしている様子。背中に、こぶを持つラクダは背丈 2m ほどの高さがあり、初めて体験をする観光客に遊牧民が手伝っていることがわかる。



写真 26 山羊の乳搾り体験

筆者撮影 2010

乳搾りを初めて体験している観光客にまず、ヤギと羊の乳搾りができるようになってから、牛及び馬の乳搾りをするようになるのがウギー湖におけるゲルキャンプでは決まりになっている。



写真 27 山羊や羊の乳搾り体験

ゲルキャンプを体験する観光客がヤギと羊の乳搾りをしている。この写真では、やぎと羊の乳搾りをする時に遊牧民の女の子がよく手伝っていることがわかる。



写真 28 アーロールを天日干しする様子

ヨーグルトを沸騰させて専用の袋に入れ、石などの重石を置いて約6時間放置する。その後、好きな形に切り乾燥させたものをアーロールという。作っている人の好みによって砂糖を入れたりして食べられる。ウギー湖のゲルキャンプではアーロールの作り方が観光資源として利用している。



写真 29. 小規模ゲルキャンプの内面
2010年7月筆者撮影



写真 30. 大規模ゲルキャンプの内面
2010年7月筆者撮影



写真 31. 土の上に建てた遊牧民のゲル

2010年7月筆者撮影

遊牧民は夏営地にゲルを立てる時に、床を敷かない。床とか大きい家具などを冬営地に置いて移動するのが一般的である。



写真 32 馬乳酒を発行させるの袋
筆者撮影 2010 年

モンゴルゲルのドアのすぐ左側の壁面にフフル（牛革製の袋）がつるしてあり、この中に馬乳酒を入れて木の棒で2日間から3日間攪拌すると馬乳酒が出来上がる。



写真 33. ウギー湖にける遊牧民の乳製品加工している様子



写真 34. ウギーのゲルキャンプ場の様子
筆者撮影